

藤崎遺跡 V

—第12・13・14次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第232集

1990

福岡市教育委員会

藤崎遺跡 V

—第12・13・14次調査—



遺跡略号	遺跡調査番号
第12次調査	FUA-12 8817
第13次調査	FUA-13 8818
第14次調査	FUA-14 8819

1990

福岡市教育委員会

序

福岡市西部の藤崎一帯は、古砂丘上に営まれた弥生時代から古墳時代にかけての大墳墓群として著名な遺跡であり、バスター・ミナル建設に伴って実施された第2次調査区の方形周溝墓からは三角縁神獣鏡が出土するなど様々な貴重な成果が報告されています。そして、福岡市営地下鉄の開通以来再開発事業が活発化し、ビルの高層化が進むとともに周辺遺跡の発掘調査件数も増加しています。

今回発掘調査した第12・13・14次調査区では、壹栄墓等からなる弥生時代の墳墓群や中世の溝と井戸が検出され、藤崎遺跡群の広がりと密度の濃さを確認すると共に海に望んで活動する古代人の在りし姿を思い浮べることができます。また、古砂丘上に展開する墳墓群の在り方は、弥生時代の社会構造や早良地方の歴史を究明するうえで貴重な史料になるものと考えます。

本書はこれらの発掘調査成果を収録したものです。本書が市民の皆さんに広く活用され、埋蔵文化財保護に対するご理解の一助になると共に、学術研究においても活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間にはご指導・ご助言をいただいた諸先生をはじめ、多くの方々のご協力をいただきました。殊に地権者の大賀学氏、前田勝利氏、内山潔氏には格別のご理解とご協力をいただきました。記して心から感謝の意を表する次第であります。

平成2年3月

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

れいげん

1. 本書は、福岡市教育委員会が福岡市早良区藤崎におけるテナントビル建設に先立って、昭和63年度に緊急発掘調査した藤崎遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書には第12次調査、第13次調査、第14次調査及び付論を収録する。
3. 本書に使用した方位はすべて磁北方位であり、真北からの偏差は西偏 6°21'である。
4. 遺構は呼称を記号化し、東館墓をST、箱式石棺墓をSQ、土墳をSK、溝をSD、井戸址をSE、ピットはSPとしたが方形周溝墓はそのままの名称を付した。
5. 本書に掲載した遺構の実測・製図は第12次調査区は瀧本が、第13次調査区は小林・田崎真理・梶村が、第14次調査区は小林が行った。
6. 遺物の整理実測・製図は第12次調査区は瀧本が、第13次調査区は小林・田崎が、第14次調査区は小林・田崎・山村信栄（太宰府市教育委員会）が行なった。
7. 本書に掲載した写真は遺構・遺物とともに第12次調査区は瀧本が、第13・14次調査区は小林が撮影した。
8. 本書の執筆は以下の者が担当した。
I. II.小林
III. 第12次調査...瀧本
IV. 第13次調査...小林・田崎 [2.-2)~7) の
土器]
V. 第14次調査...小林・田崎 [2.-3)]
なお、第13次調査区出土の人骨については、付論と
して中橋孝博先生（九州大学第2解剖学教室）の玉
稿をいただき内容の充実を図った。
9. 本報告に係わる遺物・記録類は一括して埋蔵文化財
センターに保管している。
10. 本書編集は小林・瀧本が行なった。

本文目次

序	
Iはじめ	1
1. 発掘調査にいたるまで	1
2. 発掘調査の組織	2
II立地と歴史的環境	5
1. 立地と歴史的環境	5
2. これまでの調査	7
III第12次調査	9
1. 調査の概要	9
2. 調査の記録	9
1). 墓柏墓	9
2). 溝	12
3). 土壌	13
3. 小結	14
IV第13次調査	15
1. 調査の概要	15
2. 調査の記録	17
1). 墓柏墓	17
2). 箱式石棺墓	45
3). 方形周溝墓	47
4). 土壌	48
5). 溝	54
6). 井戸	58
7). 含包層出土の遺物	59
3. 小結	62
V第14次調査	65
1. 調査の概要	65
2. 調査の記録	67
1). 溝	67
2). 土壌	68
3). 含包層出土の遺物	69
3. 小結	70

付論『藤崎遺跡第13次調査区出土の弥生時代人骨について』 中橋孝博

挿図目次

Fig. 1	周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig. 2	藤崎遺跡周辺地形図 (昭和初期頃) (1/5,000)	4
Fig. 3	藤崎遺跡位置図 (1/5,000)	6
Fig. 4	第12次調査区遺構配置図 (1/100)	10
Fig. 5	ST-01実測図 (1/30)	11
Fig. 6	ST-01甕棺実測図 (1/10)	11
Fig. 7	SD-01~03土層図 (1/40)	12
Fig. 8	SD-03出土土器実測図 (1/3)	13
Fig. 9	SK-01実測図 (1/60)	13
Fig. 10	第13次調査区周辺現況図 (1/400)	15
Fig. 11	第13次調査区遺構配置図 (1/150)	16
Fig. 12	ST-01~05実測図 (1/20)	18
Fig. 13	ST-01・02甕棺実測図 (1/6)	19
Fig. 14	ST-03・04甕棺実測図 (1/6)	20
Fig. 15	ST-06~09実測図 (1/20)	22
Fig. 16	ST-06甕棺実測図 (1/6)	23
Fig. 17	ST-07・08甕棺実測図 (1/6)	24
Fig. 18	ST-05・09・10甕棺実測図 (1/10)	折込み
Fig. 19	ST-10~13実測図 (1/20)	25
Fig. 20	ST-11~13甕棺実測図 (1/6)	26
Fig. 21	ST-14~16実測図 (1/20)	28
Fig. 22	ST-14甕棺実測図 (1/10)	29
Fig. 23	ST-15・16甕棺実測図 (1/10)	30
Fig. 24	ST-17~19実測図 (1/20)	31
Fig. 25	ST-20・21実測図 (1/20)	32
Fig. 26	ST-17・18・20甕棺実測図 (1/10)	33
Fig. 27	ST-19甕棺実測図 (1/6)	34
Fig. 28	ST-22・23実測図 (1/20)	35
Fig. 29	ST-21~23甕棺実測図 (1/10)	折込み
Fig. 30	ST-24~26実測図 (1/20)	37
Fig. 31	ST-24・25・28甕棺実測図 (1/10)	折込み
Fig. 32	ST-26甕棺実測図 (1/6)	39
Fig. 33	ST-27・28実測図 (1/20)	41
Fig. 34	ST-29~31実測図 (1/20)	43
Fig. 35	ST-29~31甕棺実測図 (1/6)	44
Fig. 36	SQ-01実測図 (1/30)	45

Fig.	37	SQ-01出土上器実測図 (1/4)	46
Fig.	38	方形周溝墓実測図 (1/80)	46
Fig.	39	方形周溝墓出土土器実測図 (1/4)	47
Fig.	40	SK-01-06実測図 (1/40)	49
Fig.	41	SK-07-09実測図 (1/60)	50
Fig.	42	SK-10-13実測図 (1/40)	51
Fig.	43	SK-01・03・09出土土器実測図 (1/4)	52
Fig.	44	SK-10・11・12出土土器実測図 (1/4)	53
Fig.	45	SD-01-07断面図 (1/60)	55
Fig.	46	SD-01・04・07出土上器実測図 (1/4)	56
Fig.	47	SE-01・02実測図 (1/60)	57
Fig.	48	SE-01・02出土土器実測図 (1/4)	58
Fig.	49	SE-01出土銅錢拓影 (2/3)	58
Fig.	50	包含層出土土器実測図 (1/4)	59
Fig.	51	擾乱層出土土器実測図 (1/4)	60
Fig.	52	土製品実測図 (1/4)	61
Fig.	53	石器実測図 (1/3)	61
Fig.	54	包含層出土彩文土器実測図 (1/2)	62
Fig.	55	第12次・第14次調査区別現況図 (1/400)	65
Fig.	56	第14次調査区遺構配置図 (1/100)	66
Fig.	57	SD-01土壌断面図 (1/40)	67
Fig.	58	SK-01・02実測図 (1/30)	68
Fig.	59	包含層出土上器実測図 (1/4)	69

図 版 目 次

- PL. 1 遺跡周辺航空写真
- PL. 2 (1). 調査区全景 (北から) (2). 調査区全景 (西から)
- PL. 3 (1). 調査区北半部 (東から) (2). 中世溝土層 (西から)
- PL. 4 (1). ST-01 (南東から) (2). ST-01壺棺
- PL. 5 (1). 調査区全景北半部 (2). 調査区全景南半部
- PL. 6 (1). ST-01 (南から) (2). ST-02・19 (南から)
 (3). ST-02 (北から)
- PL. 7 (1). ST-03 (東から) (2). ST-04 (西から)
 (3). ST-05・08全景 (東から)
- PL. 8 (1). ST-05 (西から) (2). ST-05 (南から)
 (3). ST-06 (南から)

- PL. 9 (1). ST-07 (東から) (2). ST-08 (東から)
(3). ST-09 (北から)
- PL. 10 (1). ST-09 (北から) (2). ST-10 (北から)
(3). ST-11・SK-13 (北から)
- PL. 11. (1). ST-12 (南から) (2). ST-13・14 (北から)
(3). ST-14 (北から)
- PL. 12 (1). ST-14 (西から) (2). ST-15 (東から)
(3). ST-16 (北から)
- PL. 13 (1). ST-17 (北西から) (2). ST-18 (南から)
(3). ST-19 (北から)
- PL. 14 (1). ST-20・21・SQ-01 (東から) (2). ST-20 (南東から) (3). ST-20 (北西から)
- PL. 15 (1). ST-21 (東から) (2). ST-21 (南東から)
(3). ST-22 (南から)
- PL. 16 (1). ST-23・24・26 (東から) (2). ST-23 (東から)
(3). ST-24 (東から)
- PL. 17 (1). ST-24 (西から) (2). ST-25 (北西から)
(3). ST-26 (南から)
- PL. 18 (1). ST-11・27・28・29 (南から)
(2). ST-28・29 (南から) (3). ST-28人骨検出状況 (南から)
- PL. 19 (1). ST-27 (北から) (2). ST-30 (南から)
(3). ST-31 (北から)
- PL. 20 (1). SQ-01 (南東から) (2). 方形周溝塗
(3). 調査区西壁土層断面 (北側)
- PL. 21 (1). SK-01 (東から) (2). SK-03 (南から)
(3). SK-07 (南西から)
- PL. 22 (1). SK-08 (北から) (2). SK-10 (北から)
(3). SK-12 (東から)
- PL. 23 (1). SE-01 (東から) (2). SE-01 (南東から)
(3). SE-02土層断面 (西から)
- PL. 24 13次調査区出土埴輪
- PL. 25 13次調査区出土甕棺
- PL. 26 13次調査区出土甕棺
- PL. 27 13次調査区出土甕棺
- PL. 28 13次調査区出土遺物
- PL. 29 13次調査区出土土製品・石器
- PL. 30 (1). 14次調査区全景 (東から)
(2). 14次調査区SD-01全景 (西から)

I はじめに

1. 調査にいたるまで

藤崎遺跡は福岡市西部の副都心として開発が進む早良区西新のすぐ西側にあり、近年までは海岸砂丘に面した閑静な住宅地帯であった。しかし、昭和40年代のめざましい経済成長に伴って次第に商業都市として変貌し、1981（昭和56）年の市営地下鉄開業以来はさらにその傾向を強め、今日では限られた土地空間の一層の有効活用を求めてビルの高層化が進んでいる。

藤崎遺跡の初見は古く、1912（明治45）年の藤崎古墳の発見に始まる。土体部の箱式石棺には仿製三角縁二神竜虎鏡と素堀頭太刀が副葬されており、広く周知されるに至った。藤崎遺跡の本格調査は、1977（昭和52）年の市営地下鉄建設工事に伴う第1次調査に始まる。第1次調査では豪棺墓や土壙墓等からなる弥生時代の墳墓群が確認された。さらに1980（昭和55）年の第3次調査では、三角縁二神馬車馬鏡を副葬した古墳時代はじめの方形周溝墓が発見された。これによって藤崎遺跡は弥生時代から古墳時代に亘る一大墳墓群であると同時に、早良平野における首長層の成立過程を考える上で欠くことのできぬ遺跡として再認識されるに至り、今日まで17次の発掘調査が実施されている。

今回発掘調査した地点は、国道202号線に南面する藤崎遺跡群のほぼ中央部にあたり、いずれもテナントビルの建設に伴うものである。発掘調査にあたっては、遺跡の現状保存を前提に事業主体者との協議をすすめたが、建設設計画の変更には至らず記録保存の止むなきに至った。

今回報告する第12・13・14次調査は、1988（昭和63）年度に発掘調査を実施したもので、各調査地点が東西に隣接しているために合本として報告した。

なお、発掘調査にあたっては地権者である大賀学氏、前田勝利氏、内山潔氏をはじめ事関係者の方々の物心両面にわたるご理解とご協力をいたしました。末筆ながら記して謝意を表した。

遺跡調査番号：8817	遺跡略号：FUA-12	分布地図番号：81-A-1
-------------	-------------	---------------

調査地籍：福岡市早良区高取二丁目142番地		
-----------------------	--	--

工事面積：657m ²	調査対象面積：300m ²	調査実施面積：204m ²
------------------------	--------------------------	--------------------------

調査期間：1988年5月25日～6月13日		
-----------------------	--	--

遺跡調査番号：8818	遺跡略号：FUA-13	分布地図番号：81-A-1
-------------	-------------	---------------

調査地籍：福岡市早良区高取二丁目165番地		
-----------------------	--	--

工事面積：413m ²	調査対象面積：413m ²	調査実施面積：372m ²
------------------------	--------------------------	--------------------------

調査期間：1988年6月16日～7月26日		
-----------------------	--	--

遺跡調査番号：8819	遺跡番号：FUA-14	分布地図番号：81-A-1
-------------	-------------	---------------

調査地籍：福岡市早良区高取二丁目140・141番地		
---------------------------	--	--

工事面積：173m ²	調査対象面積：173m ²	調査実施面積：102m ²
------------------------	--------------------------	--------------------------

調査期間：1988年6月18日～6月25日		
-----------------------	--	--

2. 発掘調査の組織

第12次調査

調査委託 大賀 学

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第2係

庶務担当 第2係長 飛高憲雄（前任） 柳沢一男（現任） 岸田隆 松延好文

調査担当 清木正志

補助員 村上かおり

調査・整理作業 有田吉太 伊藤みどり 牛尾秋子 牛尾シキヨ 牛尾 豊 菊地栄子
菊地昭一 悅慶とみ子 林 嘉子 平野ミサヲ 藤崎洋子 細川ミサヲ 山西
人美 結城シズ 結城信子 結城千賀子 結城弥澄 渡辺ちず子

第13次調査

調査委託 前田勝利

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第2係

庶務担当 第2係長 飛高憲雄（前任） 柳沢一男（現任） 岸田隆 松延好文

調査担当 小林義彦

補助員 梶村嘉長 田崎真理

調査・整理作業 尾園 晃 青柳型子 荒巻ヤチ代 上原千代子 大瀬良清子 鬼木礼子
木村美奈子 木村良子 柴田タツ子 津田和子 堤 滉代 土斐崎孝子 鳥巣
良子 西島タミエ 西島初子 野坂三重子 橋本恵美子 花畠照子 馬場イツ
子 松本藤子 百田トモ子 古岡貝代 吉岡竹子 吉岡蓮枝

第14次調査

調査委託 内山 潔

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第2係

庶務担当 第2係長 飛高憲雄（前任） 柳沢一男（現任） 岸田隆 松延好文

調査担当 小林義彦

補助員 梶村嘉長 田崎真理

調査・整理作業 荒巻ヤチ代 上原千代子 大瀬良清子 木村良子 柴田タツ子 津田和
子 堤 滉代 土斐崎孝子 西島タミエ 西島初子 野坂三重子 橋本恵美子
松本藤子 吉岡アヤ子 吉岡貝代 古岡竹子 吉岡蓮枝

また、発掘調査・整理報告にあたっては、磯望（西南大学） 小林茂（九州大学） 山崎純
男（福岡市教育委員会） 山村信栄（太宰府市教育委員会）の諸先生方には色々の貴重なご助
言、ご指導を受けた。



Fig. 1 凡例

- | | | |
|--------------|------------|------------|
| 1. 藤崎道路 | 4. 草岱殿塚古墳 | 9. 新金原遺跡 |
| 2. 西新町遺跡 | 5. 松浦殿塚古墳 | 10. 原瀬町遺跡 |
| 3. 有田・小田部遺跡群 | 6. 有田七田前遺跡 | 11. 銀金森木遺跡 |
| | 7. 原跡儀遺跡 | 12. 千國遺跡 |
| | 8. 原遺跡 | 13. 鶴町遺跡 |

Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/25,000)

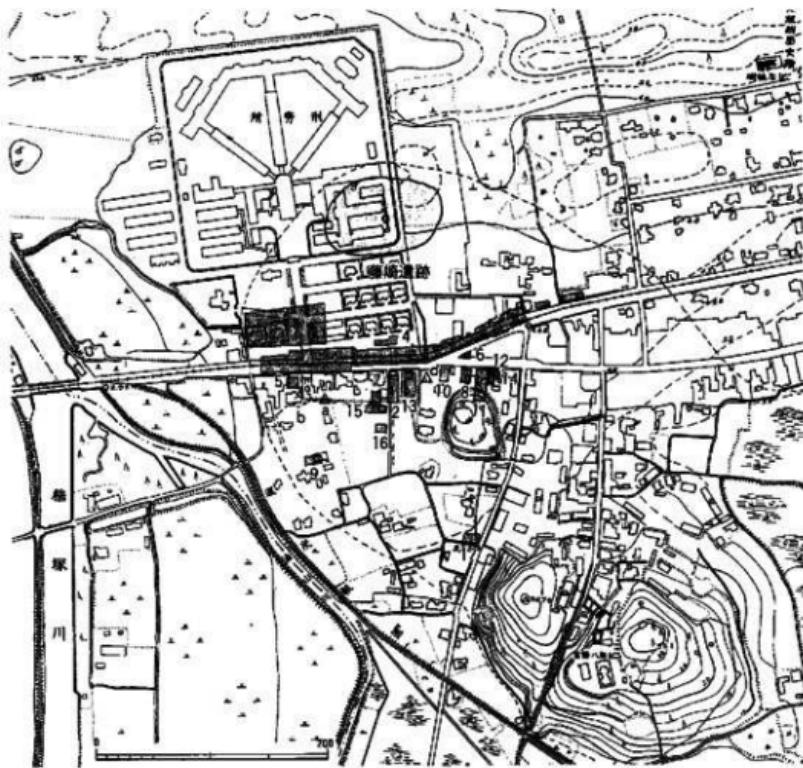


Fig. 2 凡例

- a. 第1地点(明治45年 箱式石棺出土地)
- b. 第2地点(大正6年 昭和5年箱式石棺・妻棺墓出土地)
- c. 第3地点(昭和33年 妻棺墓出土地・旧刑務所内遺跡)
- d. 第4地点(昭和50年代免見地)

- | | | |
|-----------|-------------|-------------|
| 1. 第1次調査区 | 7. 第7次調査区 | 13. 第13次調査区 |
| 2. 第2次調査区 | 8. 第8次調査区 | 14. 第14次調査区 |
| 3. 第3次調査区 | 9. 第9次調査区 | 15. 第15次調査区 |
| 4. 第4次調査区 | 10. 第10次調査区 | 16. 第16次調査区 |
| 5. 第5次調査区 | 11. 第11次調査区 | 17. 第17次調査区 |
| 6. 第6次調査区 | 12. 第12次調査区 | |

Fig. 2 藤崎遺跡周辺地形図(昭和初期頃)(1/5000)

II 立地と歴史的環境

1. 立地と歴史的環境

藤崎遺跡は、福岡市の西部の博多湾に面した早良区藤崎・高取・百道地内にあり、福岡市文化財分布地図「西部I、宝見81」で周知化された遺跡である。1979（昭和54）年の分布調査時には西警察署を中心に分布する藤崎B遺跡と国道202号線沿いに東西に長く分布する藤崎A遺跡（Fig. 3）とに区分されていた。しかし、集積された近年の調査データによればA・B両遺跡は一連の遺跡で、南方の紅葉八幡宮の立地する独立丘陵の南端を巡る東西500m、南北700mまで分布範囲が拡がることが確認されている。

博多湾沿岸には湾内の左転回流によって形成された小砂丘が連なり、宝見川右岸には百道・西新・鳥飼の浜が砂州状につづく。藤崎遺跡は、この百道浜の南に形成された標高5~6mの古砂丘に立地し、博多湾に面した早良平野開口部の東縁にあたる。砂丘後背地はラグーンが嵌がり、東南側には独立小丘陵が点在して砂丘とをさえぎっている。

藤崎遺跡は、この古砂丘上に形成された弥生時代から古墳時代の大塚墓群と中世の集落遺構からなる複合遺跡である。このうち弥生~古墳時代の墳墓群は古砂丘尾根（国道202号）に沿った東西300m、南北100mの範囲に墓域を作る。古墳時代前期の方形周溝には三角縁二神二車馬鏡が副葬されていた。

藤崎遺跡のある早良平野の弥生時代から古墳時代の遺跡についてみると、藤崎遺跡の古砂丘の東側には弥生時代中期の甕棺墓群や弥生末~古墳時代の竪穴住居跡等の集落址からなる西新町遺跡がある。古砂丘上に展開する弥生時代甕棺墓の在り方は藤崎遺跡と対比して興味深い。また、竪穴住居跡からは陶質土器が検出され、朝鮮半島との交流が窺える。南西方の中位段丘上には有田遺跡群がある。丘陵上には弥生時代前期の環濠集落址があり、古墳時代後期まで継続的に集落が営まれている。早良平野の拠点的集落として位置づけられよう。宝見川左岸には、多組細文鏡や前漢鏡のほか多数の青銅利器を副葬した甕棺墓群からなる飯盛古武遺跡群や弥生時代後期の環濠集落遺跡である野方遺跡等の拠点的遺跡がある。弥生時代には農耕生産力の向上に伴って沖積地内への遺跡の進出が目立ち、原遺跡・鶴町遺跡・湯納遺跡や拾六町ツイジ遺跡等では水田址が確認されている。

一方、早良平野における首長墓群の展開をみると、弥生時代前期末から中期には青銅鏡や利器を副葬した飯盛古武遺跡群や細形銅劍を副葬した野方久保遺跡の甕棺墓群が、後期は野方遺跡の箱式石棺墓群や宮の前遺跡の墳丘墓が宝見川左岸地帯に拡がる。古墳時代になると三角縁二神二車馬鏡を副葬した藤崎遺跡の方形周溝墓群がある。宝見川下流左岸の姪浜には箱式石棺墓に船載の二神二獸鏡や玉類を副葬した五島山古墳がある。さらに、宝見川上流域では平野奥の樋渡古墳や押塚古墳等の前方後円墳がつづき、首長層の成立と変遷過程を窺いえる。



Fig. 3 凡例

- a. 第1地点(明治45年 箱式石棺出土地)
- b. 第2地点(大正6年 昭和5年箱式石棺・漆棺墓出土地)
- c. 第3地点(昭和33年 漆棺墓出土地 旧刑務所内遺跡)
- d. 第4地点(昭和50年代発見地)

- | | | |
|-----------|-------------|-------------|
| 1. 第1次調査区 | 7. 第7次調査区 | 13. 第13次調査区 |
| 2. 第2次調査区 | 8. 第8次調査区 | 14. 第14次調査区 |
| 3. 第3次調査区 | 9. 第9次調査区 | 15. 第15次調査区 |
| 4. 第4次調査区 | 10. 第10次調査区 | 16. 第16次調査区 |
| 5. 第5次調査区 | 11. 第11次調査区 | 17. 第17次調査区 |
| 6. 第6次調査区 | 12. 第12次調査区 | |

Fig. 3 藤崎遺跡位置図 (1/5000)

2. これまでの調査

藤崎遺跡の発掘調査は、1912（明治45）年のいわゆる「藤崎古墳」の発見以来、今年度末現在で4発見地点と17調査区にのぼる。各地点の詳細は既刊の報告書で詳しく整理されており、ここではその概略について整理した。1977（昭和52）年以降に実施した組織的な発掘調査は、順次調査次数を付し、今後の再開発事業の進展に伴って調査件数はさらに増加するものと思われる。

（発見地点）

第1地点 1912年（明治45年）発見、島田寅次郎報告。箱式石棺から三角縁二神龍虎鏡（径24.5cm）、素環頭大刀が出土。藤崎古墳と称された。

第2地点 1917年（大正6年）発見、中山平次郎報告。箱式石棺より方格渦文鏡が出土。

1930年（昭和5年）発見、長倉松男・鏡山猛報告。村上研究所内検出。弥生時代前期の壇棺墓、副葬小壺及び箱式石棺が出土。石棺は藤崎石棺と称された。

第3地点 昭和30年代発見、宮井善郎報告。藤崎刑務所内遺跡。工事中に弥生時代中期の壇棺墓群が出土。弥生時代終末標識土器である西新町式土器も出土。

第4地点 昭和50年代発見。井戸開削工事中に壇棺片と彩文土器を検出。

（発掘調査地点）

第1次調査 1977～78年（昭和52～53年） 福岡市高速鉄道工事に伴って調査。弥生時代前～終末の壇墓群と弥生時代終末～古墳時代前期の住居跡12軒、溝状造構、柱穴を検出した。

第2次調査 1977年（昭和52年） テナントビル建設に伴って調査。国道202号線に沿い、第1次調査区の南側に位置する。弥生時代前～後期の壇棺墓60基、石棺墓2基、土墳墓9基、方形周溝墓1基を検出した。前期の壇棺墓より管玉が出土している。

第3次調査 1980年（昭和55年） バスターミナル建設に伴って調査。第1次調査の北西側に接する。古墳時代前期の方形周溝墓9基、古墳～奈良時代の住居跡7軒ほかを検出。6号方形周溝墓には三角縁二神二車馬鏡や素環頭大刀等を副葬する。

第4次調査 1980年（昭和55年） 藤崎駅の出入り口建設に伴う調査。早良区役所の南に位置する。古墳時代前期の方形周溝墓1基、壇棺墓2基を検出。方形周溝墓2基に小型彷彿鏡を副葬。

第5次調査 1980年（昭和55年） 藤崎駅の出入口建設に伴う調査。第2地点の村上研究所内の発見地北側に位置する。弥生時代前期初頭～前期壇棺墓2基と石蓋土墳墓1基を検出。

第6次調査 1982年（昭和57年） 藤崎駅の出入口建設に伴う調査。第1次調査区の北側に接する。壇棺墓5基と転型丹塗り土器を検出。

第7次調査 1983年（昭和58年） 整骨医院増築に伴って調査。第2次調査地区の東側に位置する。弥生時代中～後期の壇棺墓19基、土墳12基、方形周溝墓を検出。

第8次調査 1983年(昭和58年) テナントビル建設に伴って調査。第6次調査地区の南側に位置する。弥生時代の壺棺2基、溝1条、中世の溝1条を検出した。

第9次調査 1984年(昭和59年) 共同住宅建設に伴う調査。第2発見地点である村上研究所の南側に位置する。弥生時代の方形周溝墓1基、古墳時代の住居跡3軒のはか中世の溝と土壤を検出。中世の土壤からは鉄滓・繡羽口などが出土し、鍛冶跡と考えられるものがある。

第10次調査 1986年(昭和60年) 共同住宅の建設に伴う調査。第8次調査地区的西側に位置する。弥生時代の壺棺墓6基、溝1条や古墳時代の方形周溝墓1基等を検出した。

第11次調査 1986年(昭和60年) テナントビル建設に伴って調査。第8次調査地区的東側に位置する。弥生時代の壺棺墓4基、溝1条、古墳時代の溝1条と中世の溝1条を検出した。

第12次調査 1988年(昭和63年) テナントビル建設に伴って調査した。弥生時代後期の壺棺墓1基と中世の溝、土壤、井戸を検出した。

第13次調査 1988年(昭和63年) テナントビル建設に伴って調査。弥生時代前～後期の壺棺墓31基、箱式石棺墓1基、方形周溝墓1基、土壤13基、中世の溝、井戸を検出した。

第14次調査 1988年(昭和63年) テナントビル建設に伴う調査。中世の溝と土壤を検出。

第15次調査 1989年(平成1年) テナントビル建設に伴って調査。弥生時代の箱式石棺墓、古墳時代後期の堅穴住居跡と古代から中世の溝を検出した。

第16次調査 1989年(平成1年) テナントビル建設に伴う調査である。2面の遺構面を確認した。上面は奈良時代の溝と柱穴。下面は古墳時代の土壤と柱穴を検出した。

第17次調査 1989年(平成1年) テナントビル建設に伴う調査である。古墳時代後期の炉跡5基と鎌倉時代の掘立柱建物跡、井戸を検出した。

調査次	調査点名	所 在 地	面 積	溝 金 溝 句	參 考 名	時 代	層	備 注
第1次	第1地点	福岡市早良区 高宮町1丁目14		昭和45年 3月19日	川内野五郎氏宅	古墳時代	式部船	古墳時代 式部船
第2地点	第2地点	福岡市早良区 高宮町1丁目18		昭和45年 3月19日	川内野五郎氏宅	古墳時代	式部船	古墳時代 式部船
第3地点	第3地点	福岡市早良区 高宮町2丁目13		昭和30年代	田 岩 鋼 斎	弥生時代	堅穴墓	
第4地点	—	福岡市早良区 高宮町2丁目37		昭和50年	佐 戸 鋼 斎	弥生時代	堅穴墓—1基	赤土色(壁)
第1次 第4地点	第4地点	福岡市早良区 高宮町2丁目37	4,952m ²	昭和52年4月 14日—5月15日	寺 木 鋼 斎	弥生時代—中世	堅穴墓—1基 柱穴—1基	赤土色—1基 柱穴—1基
第2次 第5地点	第5地点	福岡市早良区 高宮町2丁目37	430m ²	昭和52年	テナントビル	弥生時代—中世	堅穴墓—1基	赤土色—1基
第3次 第6地点	第6地点	福岡市早良区 高宮町2丁目89	2,700m ²	4月14日—7月31日	福岡55年	古墳時代	堅穴墓—1基	赤土色—1基
第4次 第7地点	第7地点	福岡市早良区 高宮町2丁目89	3,143m ²	5月19日—5月28日	地下鉄出入口 A	古墳時代初期	方形周溝墓—1基	赤土色—1基
第5次 第8地点	第8地点	福岡市早良区 高宮町2丁目89	1,011m ²	昭和55年 2月29日	地下鉄出入口 B	古墳時代中期	方形周溝墓—1基	赤土色—1基
第6次	—	福岡市早良区 高宮町2丁目18	約150m ²	昭和57年 12月	地下鉄出入口 C	弥生時代	堅穴墓—1基	
第7次	—	福岡市早良区 高宮町2丁目18	200m ²	昭和58年 7月25日—8月26日	菅 金 鋼 斎	弥生時代	堅穴墓—10基 土坑—12基	赤土色—10基 土坑—12基
第8次	—	福岡市早良区 高宮町2丁目144-36	532m ²	昭和58年 10月18日—11月31日	テナントビル	古墳時代—中世	堅穴墓—2基	赤土色—2基
第9次	—	福岡市早良区 高宮町2丁目144-36	241m ²	昭和59年12月26日 1月1日	菅 金 鋼 斎	古墳時代	方形周溝墓—1基	赤土色—1基
第10次	—	福岡市早良区 高宮町2丁目144-36	1,965m ²	昭和60年 1月23日—2月14日	分 類 住 宅	古墳時代	方形周溝墓—1基、井戸—1基	赤土色—1基、井戸—1基
第11次	—	福岡市早良区 高宮町2丁目144-36	445m ²	昭和60年 10月23日—11月10日	テナントビル	古墳時代	方形周溝墓—4基	赤土色—4基
第12次	—	福岡市早良区 高宮町2丁目142	857m ²	昭和63年 5月25日—6月15日	大 寶 宇 氏			
第13次	—	福岡市早良区 高宮町2丁目188	4,123m ²	昭和63年3月16日—3月26日	菅 田 鋼 斎	古墳時代—後期	堅穴墓—1基	赤土色—1基
第14次	—	福岡市早良区 高宮町2丁目149	1,024m ²	昭和63年6月18日—6月25日	内 口 鋼 斎	中世—近世	土坑—1基	赤土色—1基
第15次	—	福岡市早良区 高宮町2丁目144	287m ²	平成1年 6月9日—6月26日	柳 じ う	古墳時代	方形周溝墓—1基	赤土色—1基
第16次	—	福岡市早良区 高宮町2丁目144	147m ²	平成1年 7月7日—7月14日	二 谷 鋼 斎	平安—平安後期	方形周溝墓—2基	赤土色—2基
第17次	—	福岡市早良区 高宮町2丁目144	176,025m ²	平成1年 7月19日—7月26日	菅 金 鋼 斎	B.C前	井戸—5基	上塗20—30 井戸、柱穴跡
			132m ²	12月19日—12月23日	菅 金 鋼 斎	13C		

調査区一覧表

III 第12次調査

1. 調査の概要

第12次調査地は、藤崎遺跡の西中央部にあたり、標高4.5~4.7mに位置する。本調査地に接した西側の地では第11次調査が行われ、弥生時代の甕棺墓や中世の溝などが検出されている。さらに、これらの遺構は東に広がる様相を呈していた。そのため、工事に先立って試掘 sondage を昭和63年3月15日に実施し、遺構の存在を確認するにいたった。発掘調査は1988年5月25日から同年6月13日まで行い、その面積は408m²である。

調査地の基本的層序は、上層から近世を中心とした数層におよぶ客土、暗茶褐色砂層、地山層の黄白色砂層である。地表下0.4~0.8m（標高4.0~4.2m）で検出した暗茶褐色砂層は、調査区北辺部では認められず、中央部から南にかけて存在し、上面は南に緩やかな傾斜を呈している。この層は、中世の陶磁器片が混在しているものの、これまでの調査で13世紀頃と言われている東西溝を覆っていることから、中世の新しい時期での整地層と考えられる。黄白色砂層は、地表下0.7~1.4m（標高3.4~3.9m）で調査区全域に広がり、上面は南に緩やかな傾斜を呈している。この傾斜はこれまでの調査で確認されている古代の地形に合致し、さらに土層中には遺物は全く含まれていないことから本来の砂丘面と考えられる。

遺構は、甕棺墓1基、溝3条、土壙4基、井戸1基、小穴である。しかし、遺構の残存状態は擾乱により良好とはいえない。これは、近世から近代にかけて本調査地では鍛冶屋が営まれており、その際にゴミ穴などが掘られたことによる。遺構の年代は、弥生時代、鎌倉時代~室町時代、江戸時代以降に大別される。以下、各遺構について述べていく。

2. 調査の記録

先述したように検出した遺構は、甕棺墓、溝、土壙、井戸、小穴である。土壙は不定形な平面形を呈し、性格は明らかではない。また小穴のいくつかは、掘立柱建物の柱穴の可能性もありえるが、建物を検出するにはいたらなかった。

遺物は、弥生時代、中世、近世、近代のものが出土しているが、遺構に伴う場合と、擾乱土壙や包含層のように各時代のものが混在して出土する場合があった。特に弥生時代の遺物は、甕棺墓を除けば、その大半が原位置を保っていない状態で出土している。

1) 甕棺墓

検出した甕棺墓は1基である。今回検出した甕棺墓の位置は、藤崎遺跡の甕棺墓群の南辺域を示すものである。

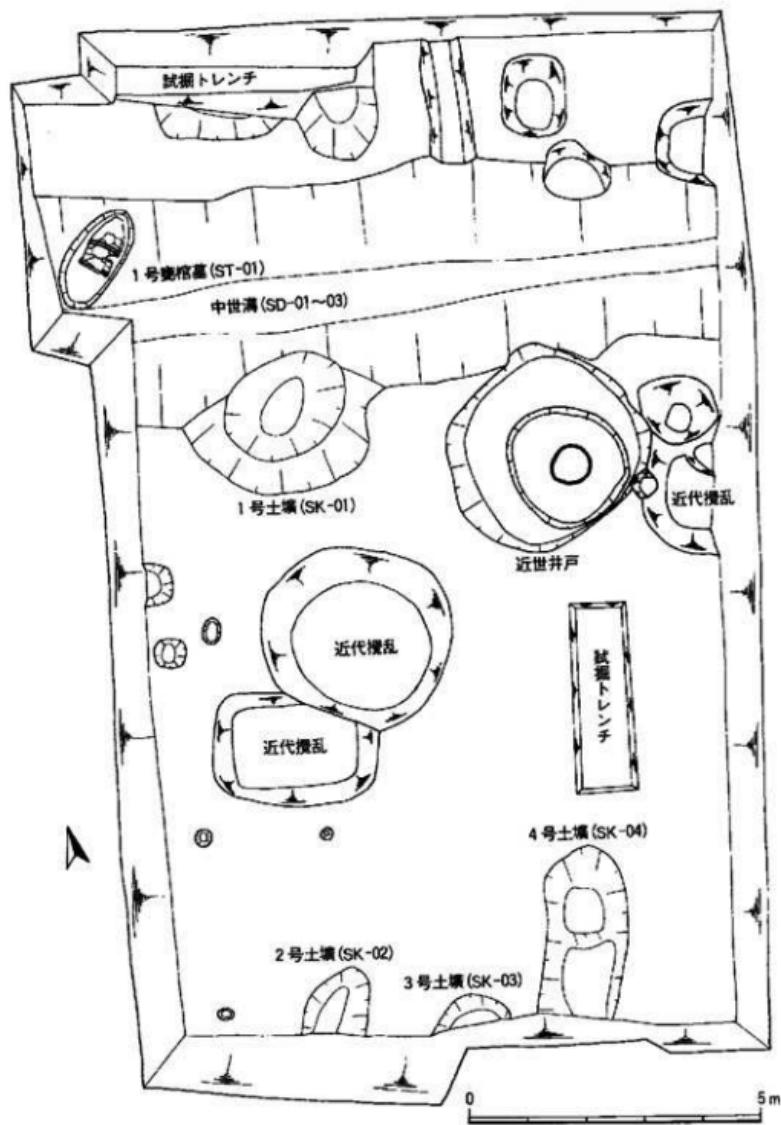


Fig. 4 第12次調査区遺構配置図 (1/100)

1号焼棺墓 (ST-01) (Fig. 5, PL.4)

調査区の西北端に位置し、地山の黄白色砂層上面で検出した。墓壙と焼棺の一部は、上層造構である中世の東西溝を開削する際に焼されている。従って、合口式の成人棺と考えられるものの、棺の組み合わせについては不明確である。

墓壙は長軸1.9m・短軸0.9mを測る梢円形の平面形を呈し、水平に掘られている。長軸は北東に向く。焼棺は、墓壙底にはほぼ水平の状態で埋置されている。焼棺内には人骨は残存していない。また、棺の内側とともに遺物は認められなかった。

1号焼棺 (Fig. 6, PL.4)

棺として用いられた土器（1）は焼型土器で、合口式の下焼の可能性が強い。器高99.6cm・口縁部外径54.6cm、胴部最大径58.7cmを測る。器形は砲弾形を呈し、断面形が「く」の字状にやや外反する口縁を有する。口縁端部はナデ調整により断面形が丸味を持つ。頸部には断面三角形の突帯を1条、胴部中央には断面M字状の突帯を2条それぞれ施している。外面は縱方向の10~12条を単位とするハケ目調整を施し、内面はナデ調整である。突帯の貼り付けは、外面のハケ目調整を終えてから行っている。口縁部と頸部にはナデ調整を施しているが、部分的にハケ目が残る。胎土は精選されており、色調は暗黄褐色を呈する。

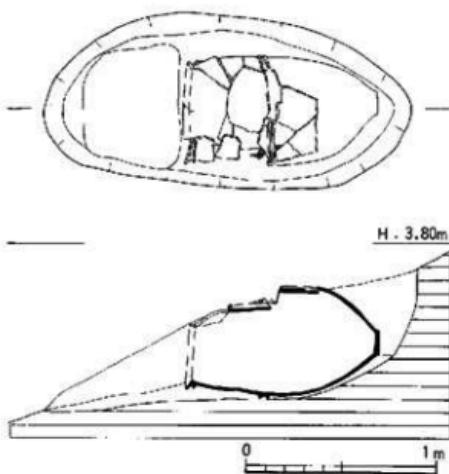


Fig. 5 ST-01実測図(1/30)

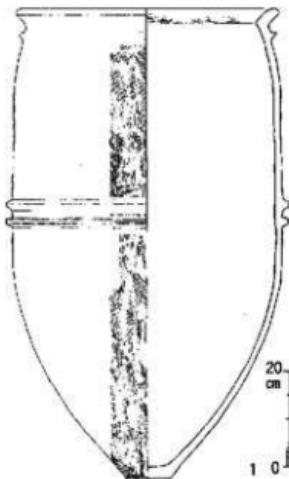


Fig. 6 ST-01焼棺実測図(1/10)

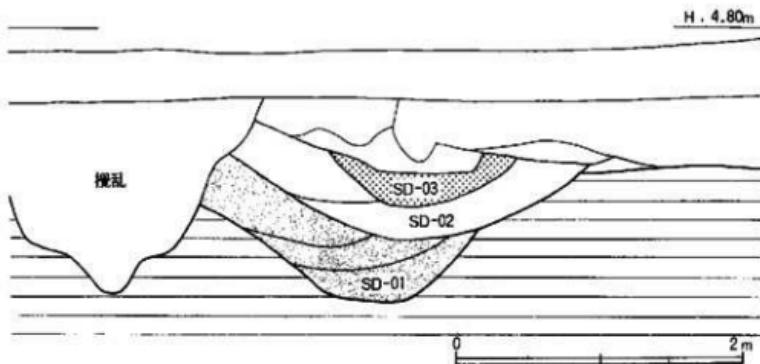


Fig. 7 SD-01~03土層図 (1/40)

2) 溝

調査区北辺部で東西溝を3条検出した。3条とも11次調査で検出した東西溝にそれぞれつながる。3条の溝は重なるように在り、切り合い関係から1号溝がもっとも古く、3号溝がもっとも新しい。周辺の擾乱が激しく、開削時における溝の規模などは不明である。各溝の覆土からは、数点の遺物しか出土していない。

1号溝 (SD-01) (Fig. 7, PL.3)

直線的に東西に延びる溝である。幅1.8~2.0m、深さ0.6mを測る。溝の断面形は半月状を呈し、斜面は弧を描くように立ち上がる。覆土は黄褐色砂混じりの暗褐色砂・茶褐色砂で、下層の溝覆土と比べてやや薄っている。調査区東辺における溝底の標高は2.8mである。

2号溝 (SD-02) (Fig. 7, PL.3)

直線的に東西に延びる溝である。幅2.5~3.0m、深さ0.9mを測る。溝の断面形は半月状を呈し、斜面は緩やかに弧を描くように立ち上がる。覆土は黄白色砂混じりの茶褐色砂・褐色砂である。調査区東辺における溝底の標高は3.25mである。

3号溝 (SD-03) (Fig. 7, PL.3)

直線的に東西に延びる溝である。幅2.4~3.4m、深さ1.2mを測る。溝の断面形は逆台形を呈し、溝底は狭い平面を持つ。斜面は直線的に立ち上がる。覆土は黒斑混じりの褐色砂・暗茶褐色砂・細砂である。数点の中国産青磁碗の破片が出土地している。先の1号壺棺墓は、3号溝の北斜面に位置し、この溝を開削する際に壊されたものである。調査区東辺における溝底の標高は3.45mを測る。

3号溝出土遺物 (Fig. 8)

青 磁

碗(2) 龍泉窯系である。口径16cm、底径・器高は底部を欠失して不明。口縁内側に1条の圓線を施している。体部内面は櫛目文、外面は無文である。胎土は灰白色を呈する。釉は淡緑色で、0.5mmの厚みを測る。

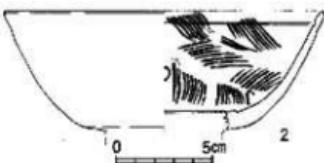


Fig. 8 SD-03出土土器実測図(1/3)

3) 土 壤

4基の土壤を地山層の黄白色砂上面で検出した。1基は削平を受け、他の3基も調査区以外に造構が広がっているために、今回検出した全ての土壤の形状や性格は不明である。

1号土壤 (SK-01) (Fig. 9, PL.2)

調査区北半部で検出した。1号溝の開削時に土壤の北半部が壊されており、本来の土壤の平面形は不明確である。残存する土壤の規模は、東西3.2m・南北2.4m・深さ1mを測る。土壤の断面形は半月状を呈し、壁は緩やかな弧を描くように立ち上がる。

2号土壤 (SK-02) (Fig. 4, PL.2)

調査区南辺で検出した。造構は調査区の外へ続く。東西1.1m・深さ0.3mを測る。断面形は逆台形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。本調査では土壤としたが、強い根柢があるわけではなく、溝の可能性もありえる。

3号土壤 (SK-03) (Fig. 4, PL.2)

調査区南辺で検出した。造構は調査区の外へ続く。東西1.4m・深さ0.3mを測る。断面形は半月状を呈する。

4号土壤 (SK-04) (Fig. 4, PL.2)

調査区南辺で検出した。造構は調査区の外へ続く。東西1.4m・深さ0.4mを測る。断面形は逆台形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。本調査では土壤としたが、積極的な根柢があるわけではなく、溝の可能性もありえる。

土壤出土遺物

遺物は、各土壤覆土からは出土していない。

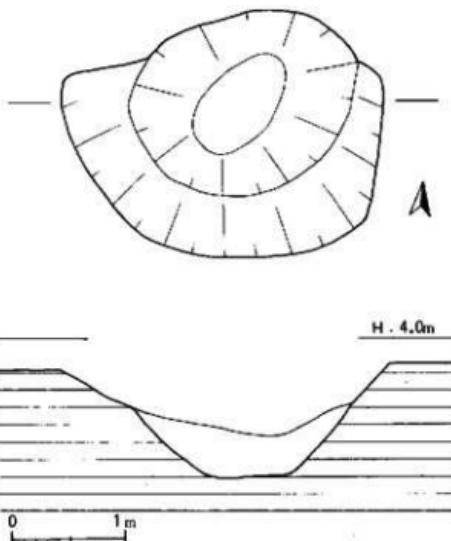


Fig. 9 SK-01実測図(1/60)

3. 小 結

今回の調査では弥生時代・中世・近世の遺構・遺物を検出したが、ここでは主に壇棺墓と東西溝に関して述べることでまとめとしたい。

壇棺墓の築造時期は、壇の形状・制作手法などから、弥生時代後期前葉に位置すると考えられる。これまでの調査によって、藤崎遺跡群の壇棺墓は西北西方方向に長軸をもつ東西280m・南北70~100mを測る楕円形状に展開していると考えられている。今回検出した壇棺墓は藤崎遺跡群では通算202基めになるが、出土位置的には墓域の南辺を示すものである。また、壇棺墓の位置する辺りから、壇棺墓が掘り込まれている砂丘面の黄白砂層上面が緩やかに下りながら、調査区の南に位置する独立丘陵の北裾に達している。これは壇棺墓を築造する際に、明らかに地形を意識した結果と考えざるをえない。

東西溝3条の開削時期は、各溝の覆土からは時期を決定する遺物が出土していないので本調査区に限定すれば不明である。しかし、これまでの調査結果を根拠にすると、最初に開削された溝（1号溝）の時期は、13世紀ごろに求められる。3条の溝は重複する位置関係にあるが、各溝の開削は下層の溝の大半が埋まってから行われていることから、開削の時には各溝間にかなりの時間差が存在することがうかがえる。また、1・2号溝が第8・10・11次調査で検出されているが、本調査での在り方と併せて見ると、1号溝が東西にほぼ直線的に開削されているのに対して、2号溝は東西方向に蛇行して開削されている。これは、各溝の性格の異なりに起因するのであろうが、本調査ではその要因を明らかにすることはできなかった。

本調査および周辺地域での調査においても中世の遺物が出土するものの、明晰な遺構は検出されていない。これは、近世以降における整地を中心とした工事によって削平を受けた結果によるものと考えられるが、遺物の質・量を裏付ける遺構の存在が確かなだけに、周辺地域における今後の発掘調査に留意する必要があろう。

IV 第13次調査

1. 調査の概要

本調査区は、福岡市早良区高取二丁目165番地にあり、古砂丘上に長く抜がる藤崎遺跡群のほぼ中央部に位置する。1977（昭和52）年の第1次調査以来、今次が第13次調査にあたる。

本調査区周辺は、古砂丘上を東西に長く抜がる遺跡群の南側緩斜面上に立地し、標高は高い北側で3.5m、南側で3.2mを測り、緩やかな傾斜を示す。調査区の西隣には第2・7次調査区があり、弥生時代の壇場墓、土壙墓、箱式石棺墓や方形周溝墓等が検出されている。

発掘調査の結果、現地表下20~30cmで遺構の掘り込まれた黄白褐色砂の地山砂層になり、上層には茶褐色砂の遺物包含層が薄く堆積している。遺構は、壇場墓（31）と箱式石棺墓（1）や方形周溝墓（1）からなる弥生時代前期から後期の墳墓群と土壤（13）のほか、中~近世の溝と井戸址を検出した。また、北寄りの西壁からは土壙墓に供獻されたと推定される弥生時代前期の彩文土器が検出された。弥生時代墳墓群の検出は、これまでの調査成果を補完するものであり、当該期の墳墓群の中心域が本調査区周辺に所在する証左となろう。

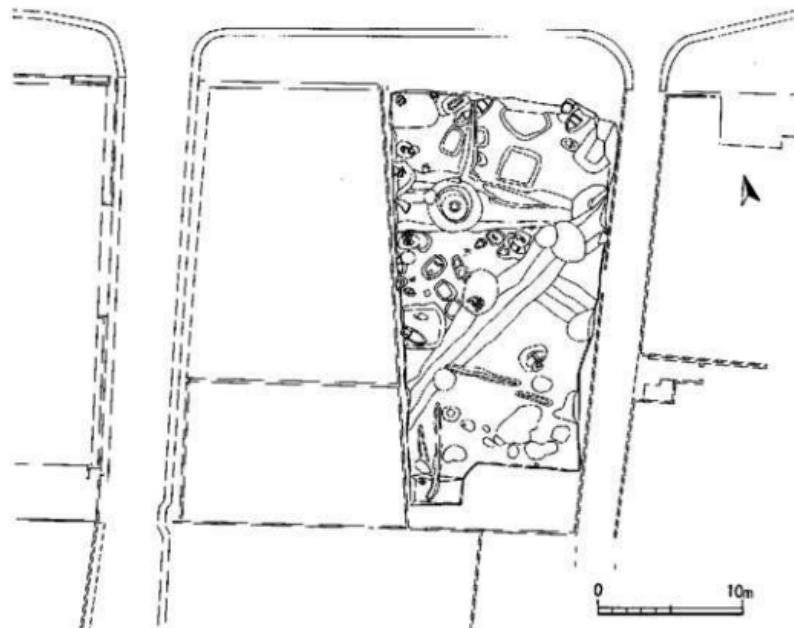


Fig.10 第13次調査区周辺現況図(1/400)

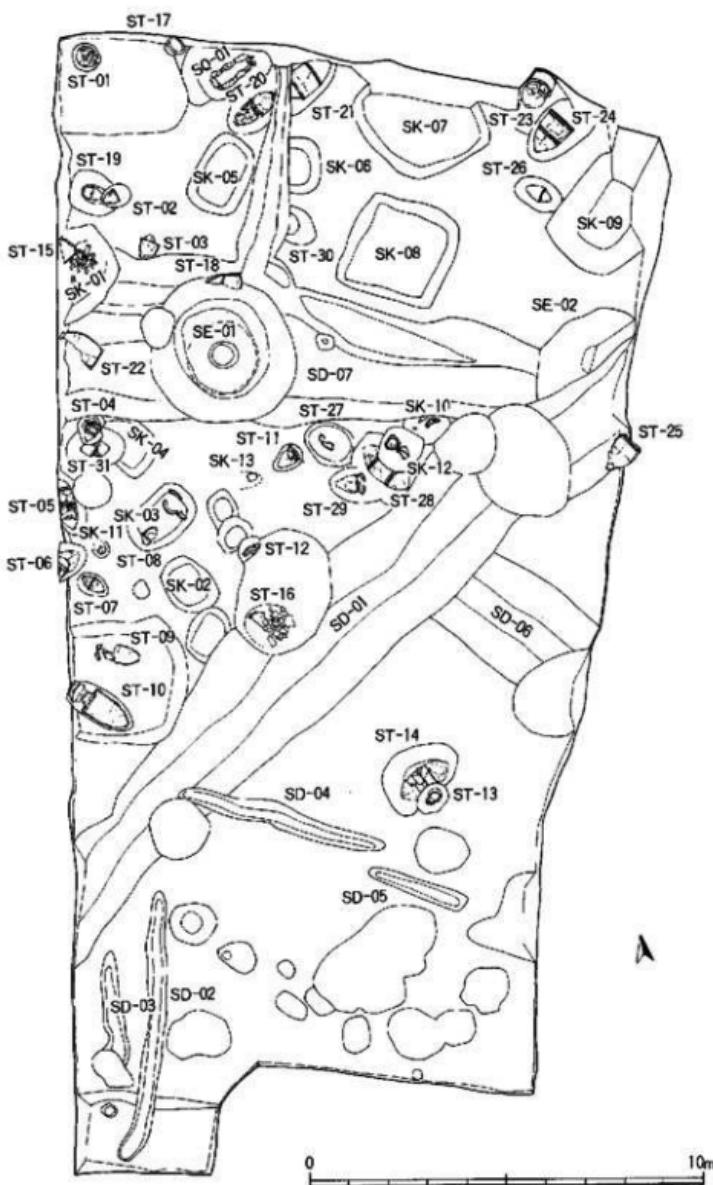


Fig.11 第13次調査区構成面図 (1/150)

2. 調査の記録

1) 壺棺墓

壺棺墓は総計31基検出した。西側の第2次調査では55基を検出している。墓域の拡がりはSD-01より北に密集しており、ST-14を南限として分布する。時期的な偏りは明確にはしがたいが、東側縁辺に前期末から中期前半のものが立地する傾向が窺える。立地的には古砂丘の後背緩斜面上にあたる。藤崎遺跡群の壺棺墓域はこの古砂丘の尾根上および後背緩斜面上に東西に長くのびて分布し、本調査区および西隣の第2・7次周辺が壺棺墓域の中心域になる。

ST-01 (Fig. 12・13, PL. 6・24)

調査区の北西隅で検出した覆口式小児用壺棺墓である。上甕は鉢形土器、下甕は口縁部を打ち欠いた壺形土器である。墓壇は直径約75cmの円形プランを呈し、47°の傾斜をもって埋置している。甕棺はN-49.5°-Wに主軸方位をとる。時期は前期のものであろう。

上甕（1）は、口径41.4cm、底径9.8cm、器高23.3cmを測る鉢形土器である。体部はやや膨らみぎみに立ち上がり、上半部は小さく屈曲して弱い稜を作る。頸部は内傾ぎみに直口し、口縁部は如意状に外方に開く。調整は内外面ともに研磨を施す。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。

No.	方 位	傾 斜	形 基	墓 壇	時 期	備 考	切 り 合 い
01	N-49°30'-W	47°	覆口式	鉢+甕 74×71	円形	前期	小児棺、木蓋
02	W-20°-S	13°	—	单 甕 77×60	楕円形	中後半	小児棺
03	N-30°-E	21°30'	接口式	鉢+甕 76×75	円形	中期末	中入棺？
04	N-34°-E	31°30'	覆口式	片唇歪な甕 83×70	椭円形	中明末	小児棺
05	N-10°-W	12°30'	接合式	甕+甕 70×83	不整形	中期末	成人棺
06	N-64°30'-W	33°	奇口式	甕+甕 70×83	不整形	後期	中入？
07	N-45°20'-W	ほぼ水平	接合式	甕+甕 60×85	楕円形	中期末	小児棺 月影
08	N-49°-E	19°30'	偏口式	鉢+甕 —	—	中期後半	小児棺
09	W-25°-N	42°は水平	偏口式	鉢+甕 —	—	中期後半	成人棺
10	N-45°-W	15°	合口式	甕+甕 90×200	楕円形	中期末	成人棺 下甕内に或骨あり
11	N-60°30'-E	44°は水平	單口式	甕 70×80	楕円形	中後半	小児棺
12	N-80°30'-E	8°	接合式	甕+甕 70×83	不整形	中期後半	小児棺
13	N-43°-E	23°30'	接口式	鉢+甕 90×68	楕円形	中後半	小児棺 ST-14
14	N-62°30'-E	ほぼ水平	接合式	甕+甕 150×220	不整形	中期後半	成人棺 『蓋付』(?)あり ST-13
15	N-35°6'-W	—	單口式	甕 —	—	中後半	成人棺
16	N-63°-W	6°30'	甕 —	—	不整形	中期後半	—
17	N-59°30'-E	—	單口式	甕 —	—	中期末	木蓋
18	E-6°30'-S	—	偏口式	甕 —	—	中期後半	成人棺
19	W-27°-N	24°30'	接口式	鉢+甕 112×132	楕円形	中期後半	小児棺 ST-02
20	N-62°-E	4°	接口式	甕+甕 157×#119	不整形	中期末	成人棺 『蓋付』(?)あり ST-23
21	N-65°30'-E	10°	接口式	鉢+甕 —	—	中期末	成人棺 ST-20
22	N-47°-W	7°30'	單口式	甕 —	—	中期後半	成人棺 木蓋
23	N-43°30'-E	44°	接口式	甕+甕 —	—	中期後半	成人棺 ST-24
24	N-51°30'-E	8°	單口式	甕 205×120	楕円形	中期後半	成人棺 木蓋 ST-23
25	N-56°30'-E	—	接口式	甕+甕 —	—	中期後半	成人棺
26	E-39°30'-S	11°	接口式	鉢+甕 127×82	楕円形	中期後半	小児棺
27	E-31°30'-S	—	—	甕 140×111	楕円形	中期後半	小児棺
28	N-35°-W	8°30'	接合式	鉢+甕 195×150	楕円形	中期末	成人棺
29	E-6°30'-S	10°	單口式	甕 120×#X92	不整形	中期後半	小児棺、石蓋
30	N-53°30'-W	—	單口式	甕 149×90	楕円形	中期後半	小児棺、木蓋 方形周溝
31	E-9°-S	ほぼ水平	合口式	甕+甕 150×110	楕円形	中期	小児棺 『蓋付』(?)あり

藤崎13次壺棺墓一覧表

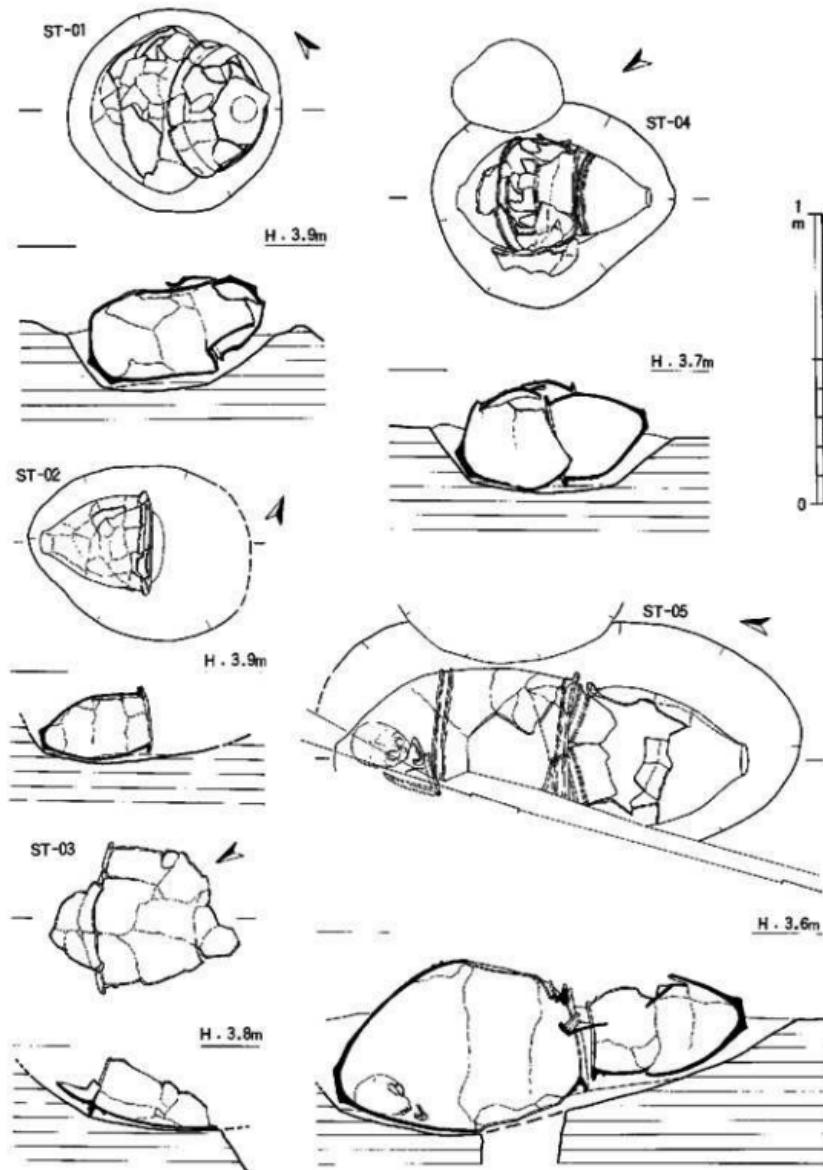


Fig.12 ST-01~05実測図(1/20)

下壺（2）は、口縁部を打ち欠いた壺形土器で、底径13.5cm、器高53.7cmを測る。反りぎみに内傾する頭部は口縁下が直口する。胴部は肩の張った玉壺状をなし、頭部との境に凹線が1条巡る。調整は外面がハケ目後に研磨、内面は胴部が押圧後ナデ、頭部はハケ目。

ST-02 (Fig. 12・13. PL. 6・24)

調査区の北西部で検出した壺形土器を用いた單口式の小児川壺棺墓である。ST-19と重複し、新しい。墓壙は直径約75cmの円形プランを呈し、13°の傾斜をもって埋置している。壺棺はW-20°-Sの主軸方位で埋置される。壺の口縁部に沿って床面埋土がやや黒みをおび、木蓋を設けていたことが考えられる。時期は中期後半であろう。

壺（3）は、口径31.5cm、底径7.4cm、器高36.0cmを測る壺形土器である。逆「L」字状の口縁端部には一部に刻み目がある。胴部は砲弾状をなし、口縁部下は小さく内傾する。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は外面がハケ目、内面はナデ、胎土は少量の砂粒を含み、焼成は良好。

ST-03 (Fig. 12・14. PL. 7・24)

調査区の北西部で検出したやや大きめの接口式小児川壺棺墓

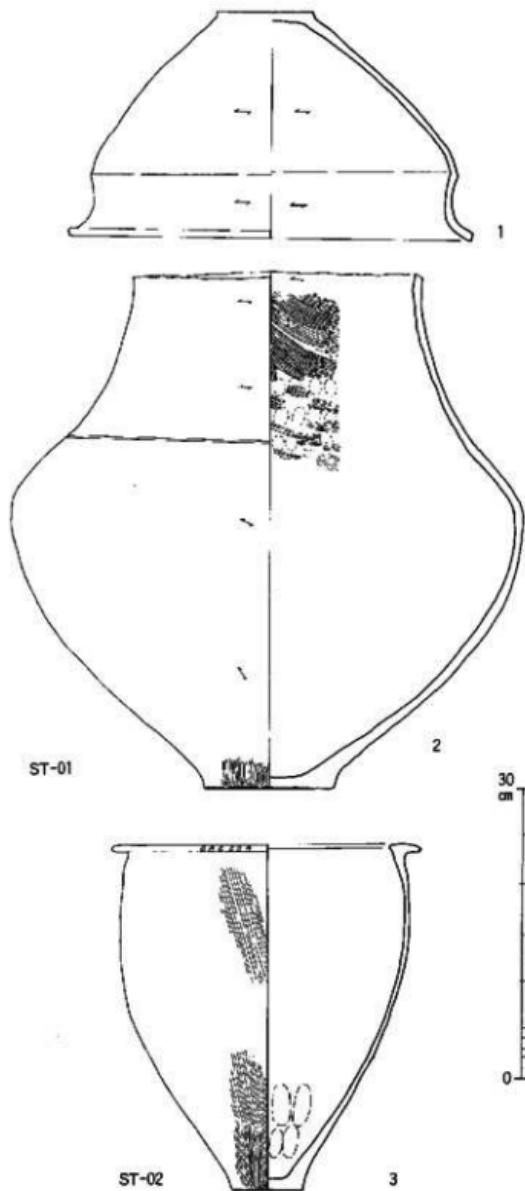


Fig.13 ST-01・02壺棺実測図(1/6)

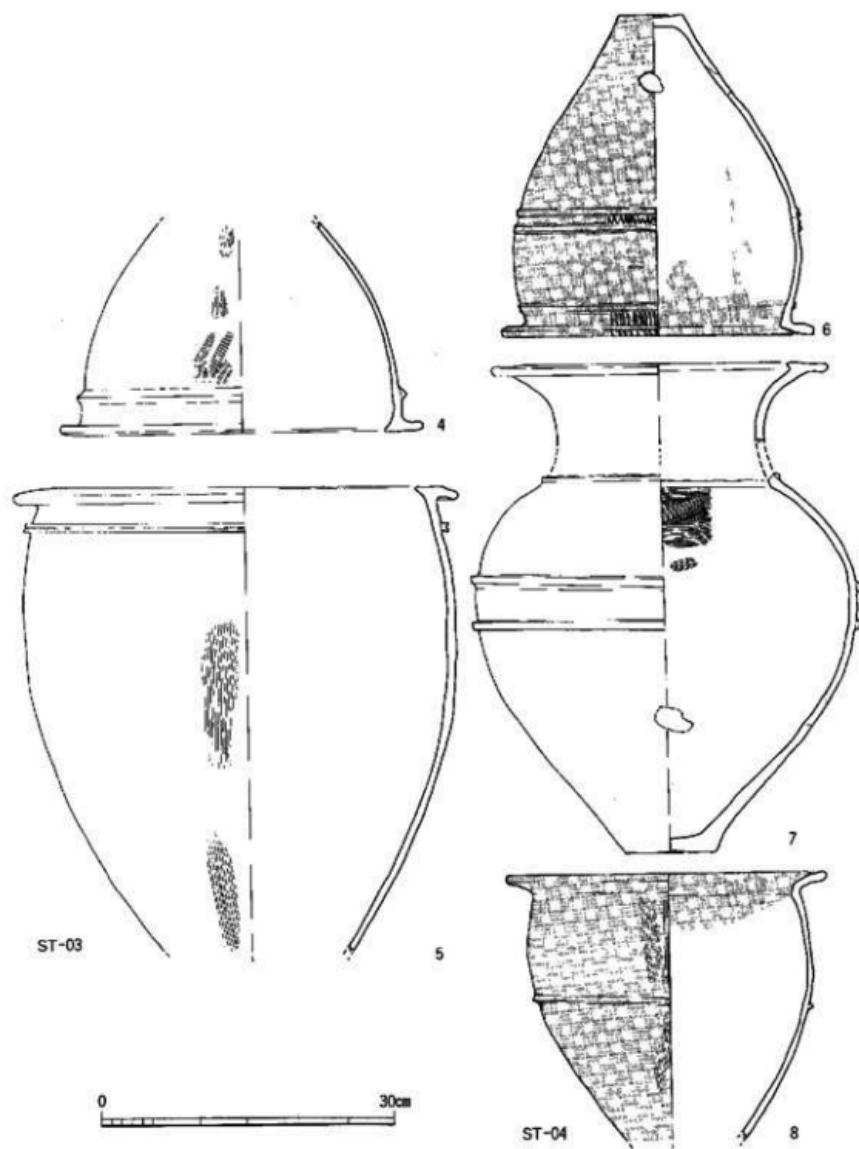


Fig.14 ST-03・04壺棺実測図(1/6)

である。壺棺は上面の削平が著しく下半の一部を残すのみで、墓壙等も確認できなかった。上壺は鉢形土器、下壺は壺形土器であるが下壺に比べて上壺は非常に小さい。墓壙は直径約75cmの円形プランを呈し、21.5°の傾斜をもって埋置している。壺棺はN-30°-Eの主軸方位で埋置される。時期は中期末であろう。

上壺（4）は、口径37.0cmの鉢形土器である。逆「L」字状の口縁部は内唇を小さく摘み出す。体部は彫らみをもって立ち上がり、口縁部下に三角凸帯が1条巡る。調整は口縁部-凸帯までがヨコナデ、胴部外面はハケ目、内面はナデ、胎土は精良で焼成は良好。色調はにぶい橙色。

下壺（5）は、口径49.5cmの壺形土器である。逆「L」字状の口縁部は外唇部が小さく下がり、その直下には「M」字凸帯が1条巡る。調整は外面がハケ目、内面はナデ仕上げ。

ST-04 (Fig. 12・14. PL. 7・24)

調査区の中央部西側で検出された接口式小児用壺棺墓である。SK-04・ST-31と重複し、この中で最も新しい。上壺は丹塗りの壺形土器、下壺は口縁部を打ち欠いた壺形土器で、上下壺の接合部上面と西側面は胴部下半を打ち欠いた丹塗りの壺形土器で覆っている。墓壙は70×83cmの楕円形プランを呈し、31.5°の傾斜をもって埋置している。壺棺はN-34°-Eの主軸方位で埋置される。時期は中期末であろう。

上壺（6）は、口径31.8cm、底径6.7cm、器高37.7cmを測る壺形土器である。逆「L」字状の口縁部は小さく外傾し、端部に刻み目を施す。口縁部直下には1条、胴部には2条の浅い「M」字凸帯が巡る。口縁下には縱方向の、胴部凸帯間には櫛描き波状文の暗文を施している。調整は外面が丁寧な研磨、内面はナデて仕上げ、外面全体と内面の口縁下には丹彩を施す。胎土は精良で、焼成は良好。胴部下半には焼成後の穿孔がある。

下壺（7）は、口径34.5cmの壺形土器で、頭部下半は打ち欠いている。短く反りぎみに聞く頸部に鋤先状の口縁部がつく。胴部は肩の張った倒卵形をなし、頭部下には三角凸帯が1条、胴部には「M」字凸帯が2条巡る。調整は外面がヨコナデ・ナデ、内面は押圧後にナデて仕上げ一部にハケ目が残る。胴部下半には焼成後の穿孔がある。

（8）は口径32.6cmの壺形土器で、胴部下半を打ち欠いている。逆「L」字状の口縁部は小さく外傾し、胴部中位には三角凸帯が1条巡る。調整は内外面ともハケ目後丁寧にナデて仕上げている。外面全体と内面口縁部下には丹彩を施す。胎土は精良で、焼成は良好。

ST-05 (Fig. 12・18. PL. 8・26)

調査区の中央部西側で検出した接口式成人用壺棺墓で、ST-06のすぐ北に位置する。壺棺は上・下ともに壺形土器であるが下壺に比べて上壺はやや小さい。棺内には頭骨と上腕骨の一部が遺存していた。頸部を下壺に、つまり北に向けた仰臥屈膝であろう。葬被葬者は然年の女性である。墓壙は70×83cmの楕円形プランを呈し、12.5°の傾斜をもって埋置している。壺棺はN-10°-Wの主軸方位で埋置される。時期は中期末であろう。

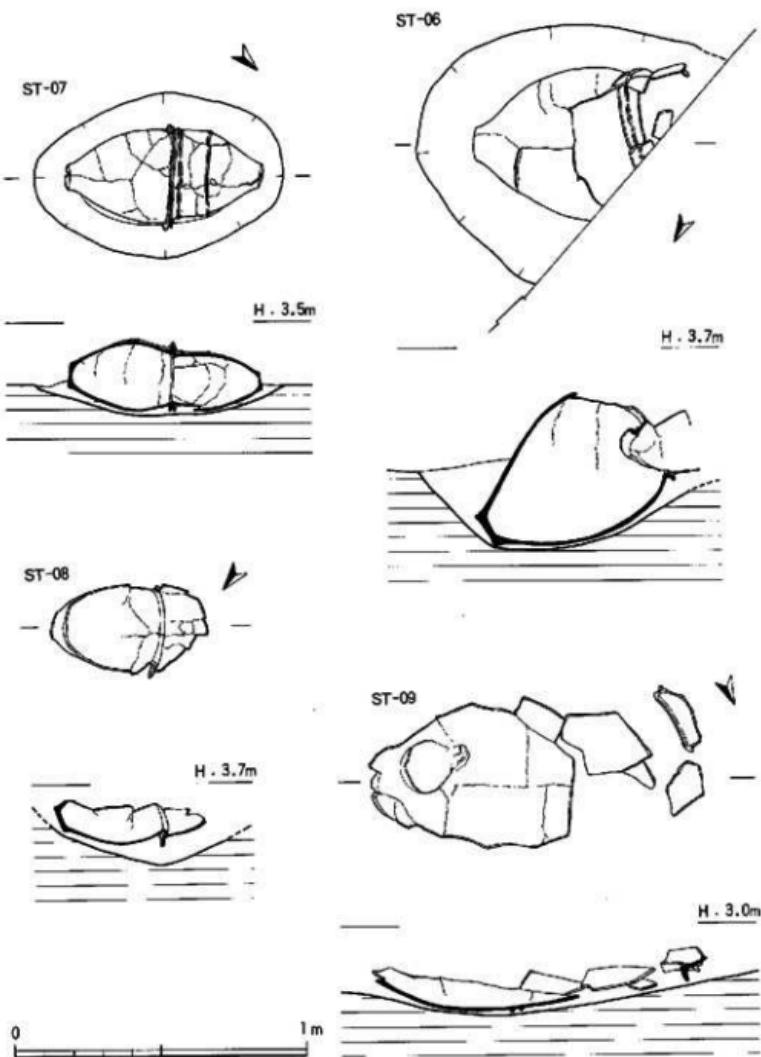


Fig.15 ST-06~09実測図(1/20)

上壺（15）は、口径41.5cm、底径10.7cm、器高54.3cmの壺形土器である。「く」字状の口縁部は端部が肥厚し、中央が凹線状に凹む。倒卵形の胴部に平底の底部がつき、口縁部直下に三角凸帯が1条巡る。調整は外面が細かいハケ目、内面はナデ。外面は全体に煤が付着している。胎土は粗く石英砂を多く含む。

下壺（16）は、口径52.6cm、底径12cm、器高86.5cmの壺形土器である。「く」字状の口縁部は端部が肥厚する。倒卵形の胴部中位には「コ」字凸帯が2条、口縁部直下には三角凸帯が1条巡る。調整は内外面ともナデで仕上げ、外面にはハケ目が残る。胎土は石英砂を多く含み、焼成は堅緻。色調は赤橙色。

ST-06(Fig.15・16, PL. 8・24)

調査区の中央部西側で検出した大きめの小児用壺棺墓で、ST-05のすぐ南に位置する。壺棺は呑口式で上・下壺とともに壺形土器であるが下壺に比べて上壺は小さい。墓壙は70×83cmの楕円形プランを呈し、33°の傾斜をもって埋置する。壺棺は

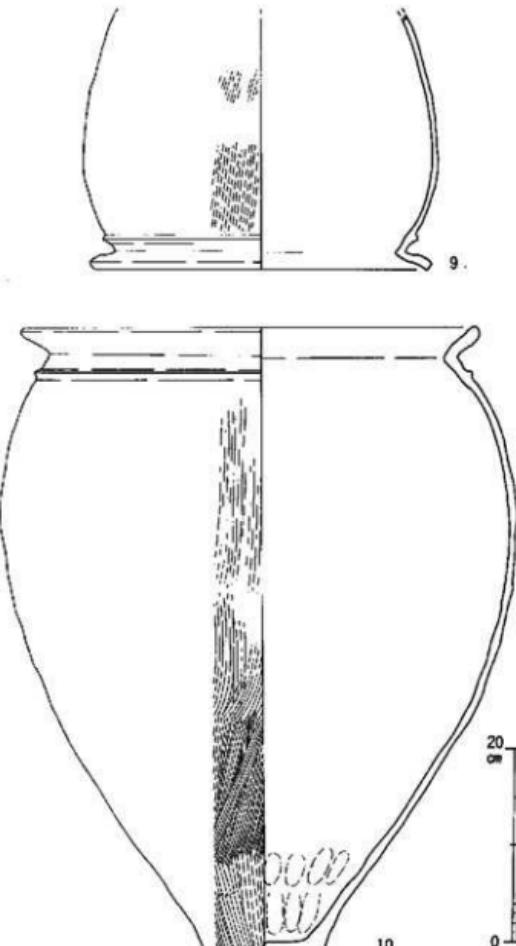


Fig.16 ST-06壺棺実洞図(1/6)

N-64.5°-Wの主軸方位で埋置される。時期は後期初頭であろう。

上壺（9）は、壺形土器で口径35.1cmを測る。逆「L」字状の口縁部は外傾し、口縁部直下には1条の三角凸帯が巡る。調整は口縁部がヨコナデ、胴部は外面がハケ目、内面はナデ。

下壺（10）は、口径47.7cm、底径12.6cm、器高64.8cmを測る中型の壺形土器である。「く」

字状の口縁部直下には三角凸帯が1条巡り、胴部は倒卵形をなす。調整は口縁部から凸帯下がヨコナデ、胴部は外面がハケ目、内面はナデで仕上げる。胎土には砂粒を含み、焼成は良好。

ST-07 (Fig. 15・17, PL. 9・24)

調査区の中央部西側で検出した合口式の小児用壺棺墓で、ST-06のすぐ南に位置する。墓壙は60×85cmを測る楕円形プランを呈する。壺棺は主軸方位をN-45.3°-Wにとり、ほぼ水平に埋置している。時期は中期末に属する。

上壺(11)は、口径30.3cm、底径8.4cm、器高33.7cmを測る變形土器である。口縁部は逆「L」字状をなし、胴部上半は小さく内傾する。調整は内外面ともハケ目で、内面はさらにナデで仕上げている。胎土には少量の砂粒を含み、焼成は良好。色調は淡い黄色。

下壺(12)は、口径28.3cm、底径5.7cm、器高30.2cmを測る丹塗りの變形土器である。口縁部は逆「L」字状をなし、端部には刻み目を施す。口縁部上面には放射状の、凸帯との間に横方向の暗文を施す。口縁部直下と胴部には「M」字凸帯が各々1条巡る。調整は外面が研磨、内面はナデ仕上げ。胎土は精良で、焼成は良好。胴部凸帯下には焼成後に円孔を穿つ。

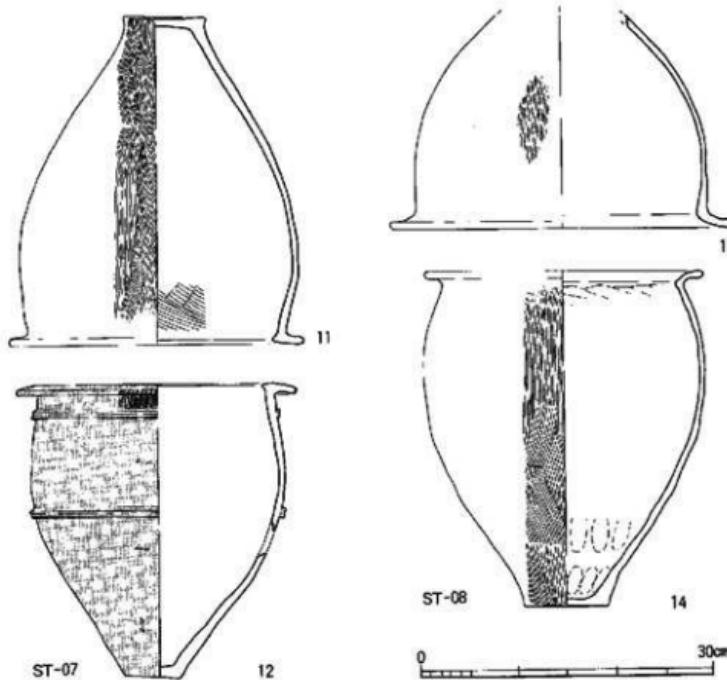
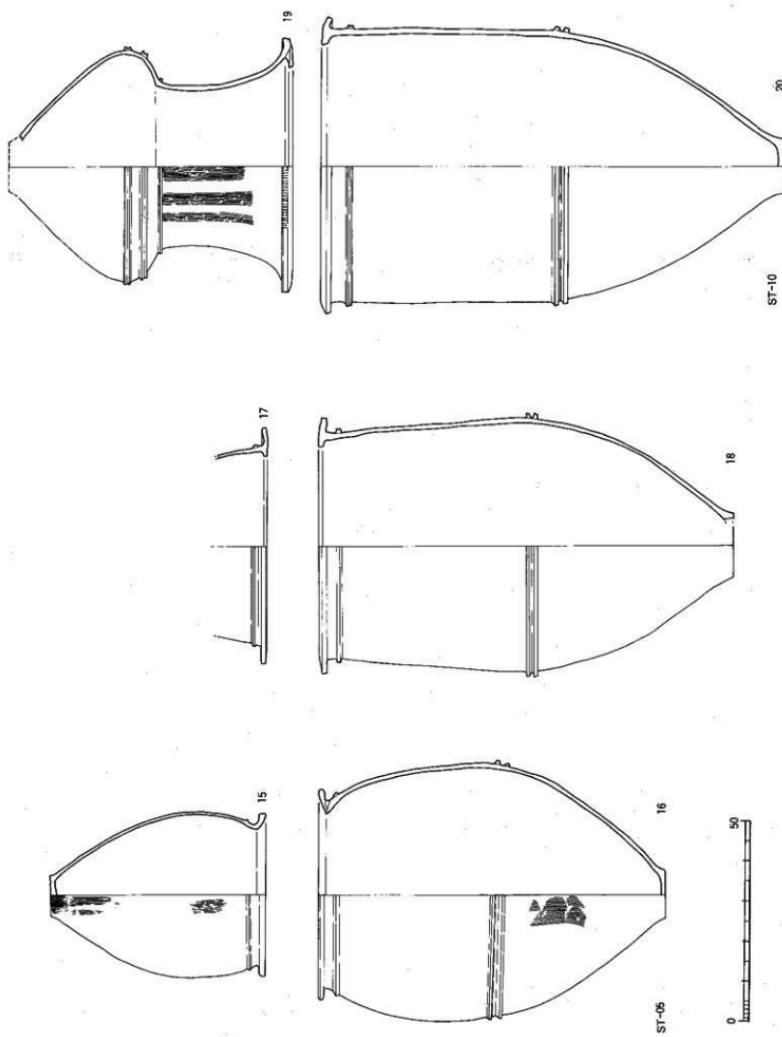


Fig.17 ST-07-08壺棺実測図(1/6)

Fig.18 ST-55-09-10瓣精英圖(1/10)



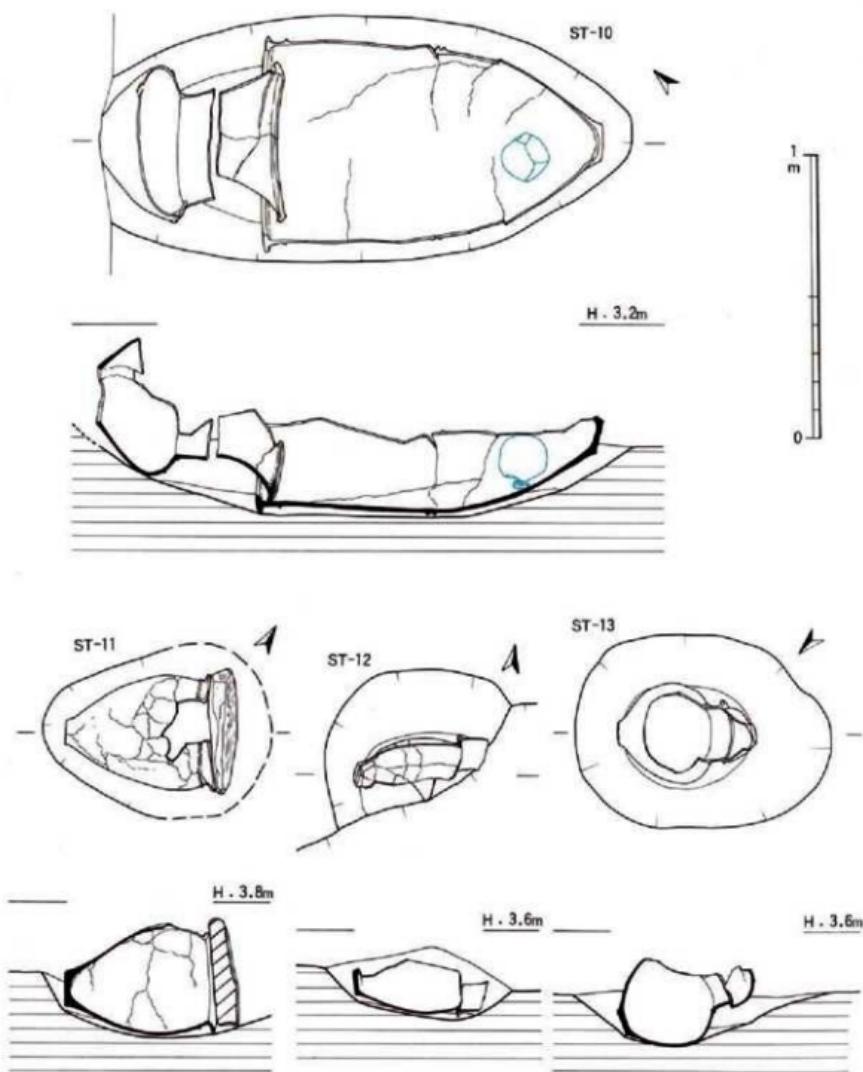


Fig.19 ST-10~13実測図(1/20)

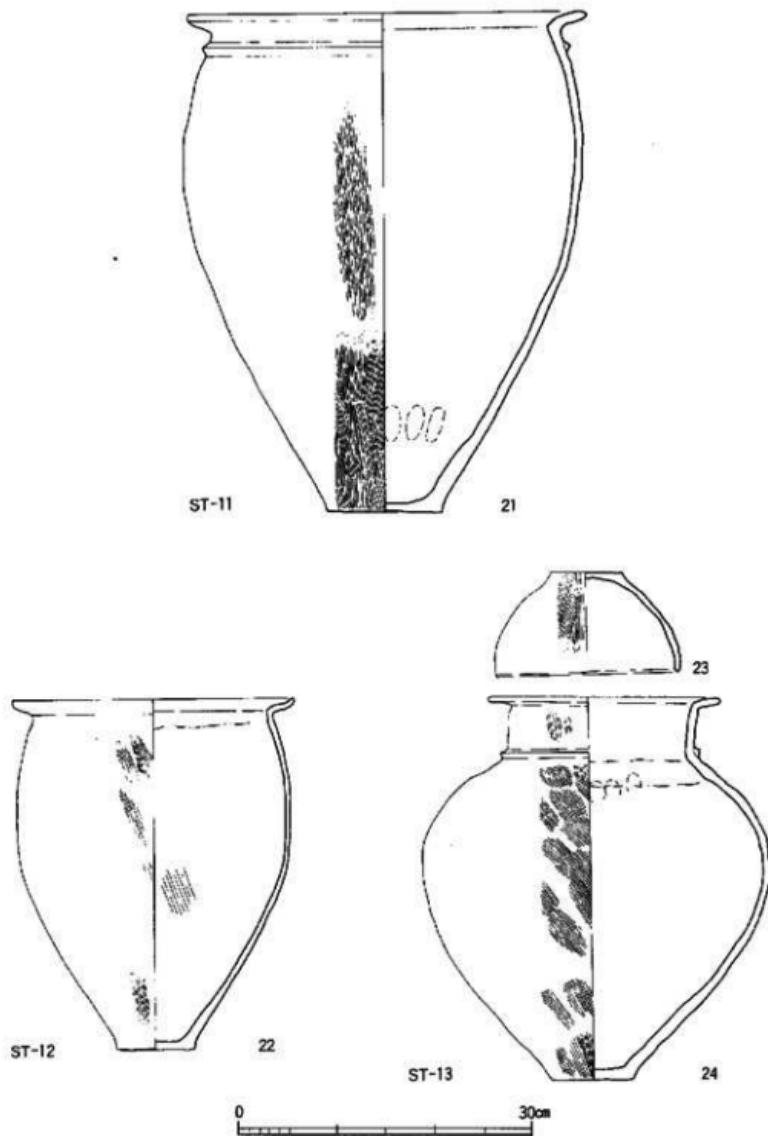


Fig.20 ST-11~13壺実測図(1/6)

ST-08 (Fig. 15・17 PL. 9・24)

調査区の中央部西側で検出した覆口式小児用壺棺墓である。SK-03の埋没後に埋置している。壺棺の上半部は著しい削平を受けて消失しており、墓壙等も確認できなかった。上壺は鉢形土器、下壺は変形土器である。墓壙は浅い舟底状を呈し、19.5°の傾斜で埋置している。壺棺はN-49°-Eの主軸方位で埋置される。時期は中期後半であろう。

上壺(13)は、口径35.0cmの鉢形土器である。口縁部は「く」字状に外反する。調整は外面がハケ目、内面はナデて仕上げている。胎土は砂粒を含み、焼成は良好。色調は橙色。

下壺(14)は、口径28.5cm、底径8.6cm、器高34.4cmを測る変形土器である。「く」字状の口縁部は反りぎみに開き、肥厚する端部は丸くおさまる。胴部上半部は小さく内弯する。調整は外面がハケ目、内面はナデて仕上げ。胎土は粗砂粒を多く含み、焼成は良好で、橙色を呈す。

ST-09 (Fig. 15・18 PL. 10・26)

調査区の西側で検出した合口式成人用壺棺墓である。10号壺棺墓と並列埋置した北側にある。上壺は鉢形土器、下壺は変形土器である。上面は削平が著しく、上壺は口縁部付近を残すのみである。墓壙は明確でないが浅い舟底状を呈し、壺棺はほぼ水平に埋置されている。主軸方位はW-25°-Nを示す。下壺底部には頭骨が遺存し、頭位を下壺にした仰臥屈葬であろう。10号壺棺墓と頭位を同方位にとる。被葬者は成人で、性別は不明、時期は中期後半であろう。

上壺(17)は、口径59.8cmの鉢形土器である。逆「L」字状の口縁部はうすく、内唇を小さく摘み出す。口縁部直下に1条の「M」字凸帯が巡る。調整は内外ともナデ。胎土・焼成は良好。

下壺(18)は、口径64.0cm、底径16.0cm、器高105.5cmを測る変形土器である。口縁部は「T」字状を呈し、直下には「M」字凸帯が1条巡る。胴部は砲弾形を呈し、中位に2条の「コ」字凸帯が巡る。調整は内外ともナデ。胎土・焼成とも良好で、色調は内面が灰白色、外面はにぶい黄褐色。

ST-10 (Fig. 19・18 PL. 10・26)

調査区の西側で検出した合口式成人用壺棺墓である。9号壺棺墓と並列埋置した南側に位置する。上壺は広口の壺形土器で、下壺は変形土器である。上壺の底部は基礎杭のために消失している。壺棺は90×200cmの横円形プランを呈する舟底状の墓壙内に、15°の傾斜でN-45°-Wに主軸をとって埋置される。下壺底部には頭骨が遺存しており、頭骨を下壺にむけた仰臥屈葬であろう。被葬者は成年女性で、頭位は9号壺棺墓と同方位をとる。時期は中期末であろう。

上壺(19)は、口径63.2cmを測る大型の壺である。直口ぎみにひらく頭部に鋤先状の口縁部がつき、口縁端部には刻み目を施している。頭部には8~9本を単位とする縱方向の暗文帯を3cm前後の間隔で配し、胴部との境には「コ」字凸帯が1条巡る。胴部は肩の張った扁球形をなし、最大径部に2条の「M」字凸帯が巡る。調整は内外ともナデて仕上げ、外面と頭部内面には煤様の黒色顔料を塗布している。胎土・焼成とも良好。

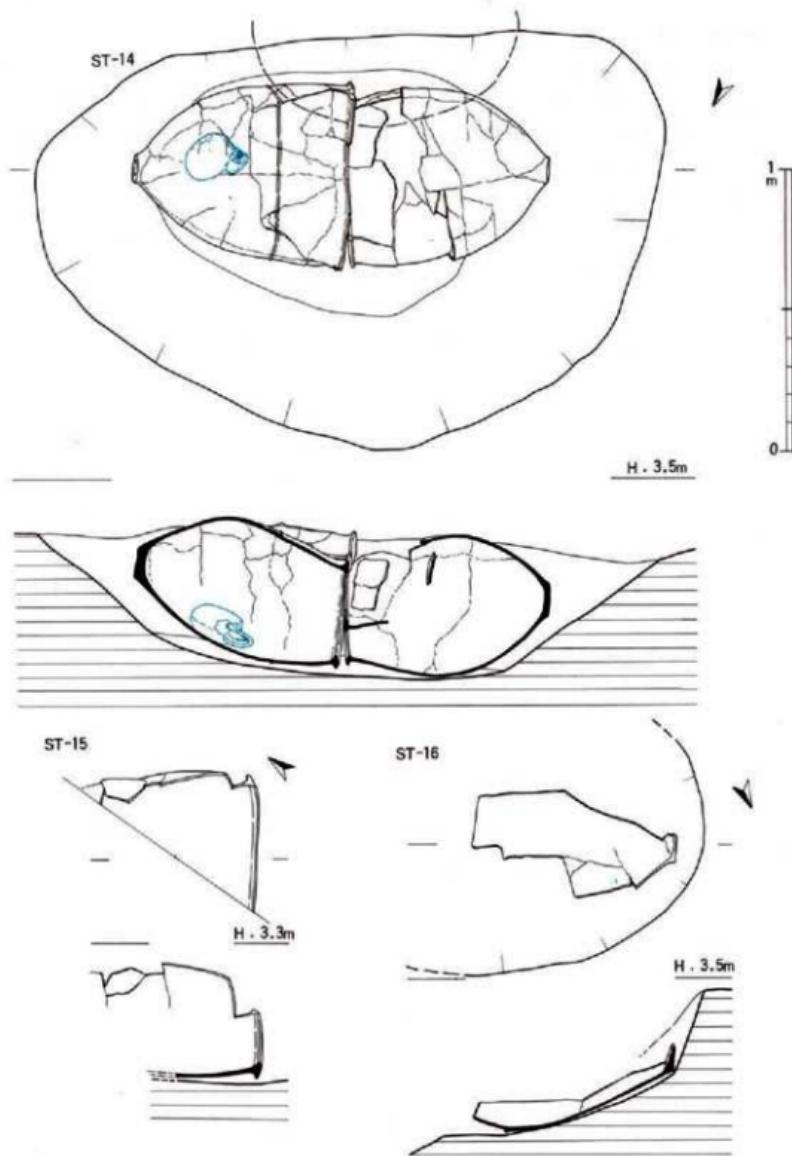


Fig.21 ST-14~16実測図(1/20)

下壺(20)は、口径73.6cm、底径13.6cm、器高106.2cmの壺形土器である。口縁部は「T」字状をなし、外唇は小さく垂れる。砲弾形の胴部は上半が直口して立ち上がる。口縁部直下に「M」字凸帯が1条、胴部中位に「コ」字凸帯が2条巡る。調整は内外面ともナデで仕上げ、外面と頸部内面には煤様の黒色顔料を塗布している。胎土に粗砂粒を多く含み、焼成は良好。

ST-11 (Fig. 19・20 PL. 10・25)

調査区のほぼ中央で検出した壺形土器用い、た単口式小児用壺棺墓である。墓壙は60×80cmの楕円形プランを呈し、壺棺はN-60.5°-Eの主軸方位でほぼ水平に埋置されている。また、壺棺は44×38cm、厚さ約7cmの板石をもって蓋石としている。時期は中期後半であろう。

壺(21)は、口径40.8cm、底径11.6cm、器高52.2cmを測る壺形土器である。「く」字状の口縁部は反りぎみに開き、口縁直下に三角凸帯が1条巡る。調整は外面が粗いハケ目、内面はナデ。胎土は精良で焼成は良好。

ST-12 (Fig. 19・20 PL. 11・25)

調査区の中央部で検出した接口式小児用壺棺墓で、ST-08の東2.5mの距離にある。壺棺は上・下壺とともに壺形土器で、下壺南半と上壺の大半は搅乱を受けて消失している。墓壙は70×83cmの楕円形プランを呈し、8°の傾斜をもつて埋置している。壺棺はN-80.5°-Eの主軸方位で埋置される。時期は中期後半であろう。上壺は調査中に紛失して現存しない。

下壺(22)は、口径28.6cm、底径8.0cm、器高35.9cmの壺形土器である。「く」字状の口縁部は端部を上方に小さく跳ね上げている。調整は内外ともハケ目後にナデ。胎土は小砂粒を少量含む。

ST-13 (Fig. 19・20 PL. 11・25)

調査区の南東部で検出した接口式小児墓で、ST-14の上面を切って埋置している。上壺に

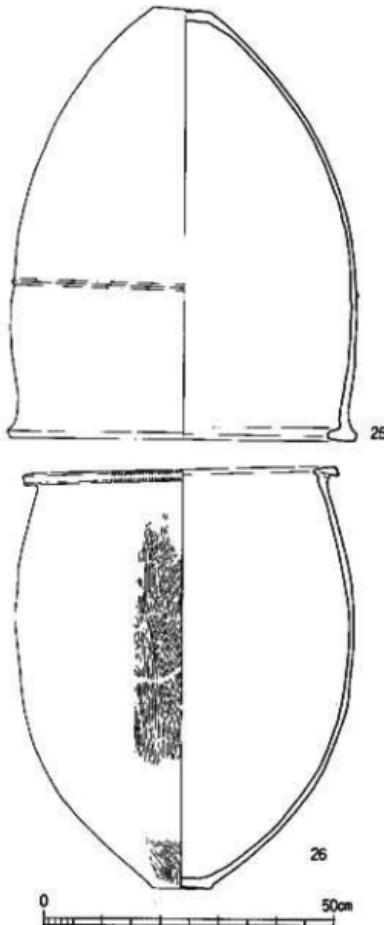


Fig. 22 ST-14壺棺実測図(1/10)

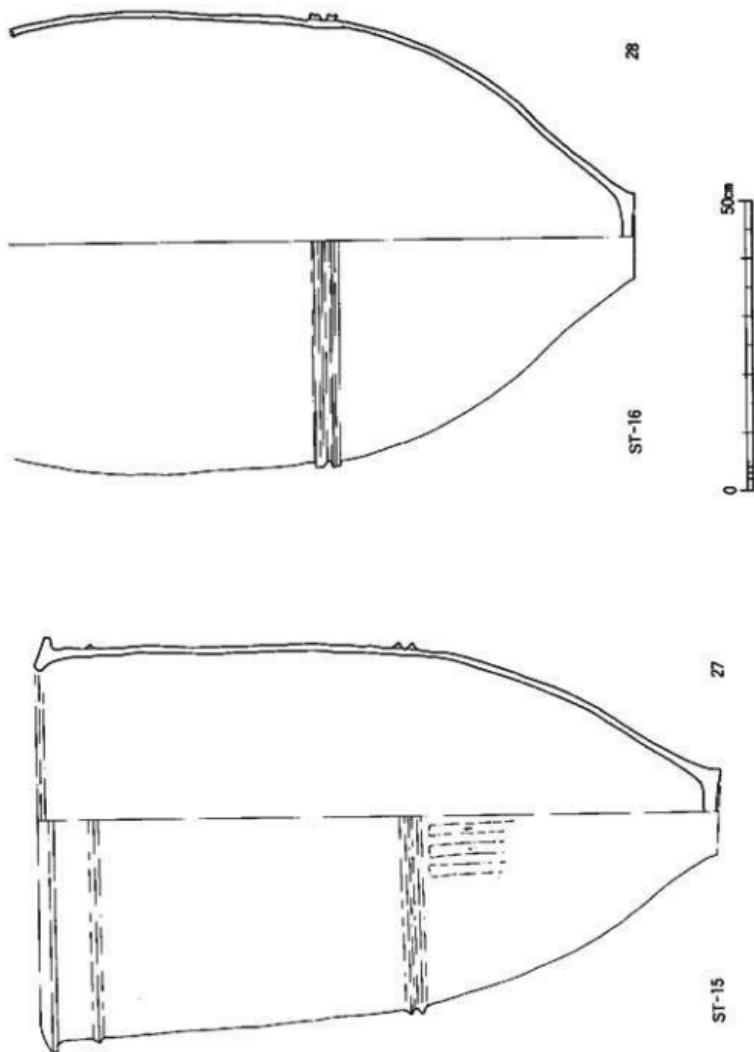


Fig.23 ST-15・16壺棺実測図(1/10)

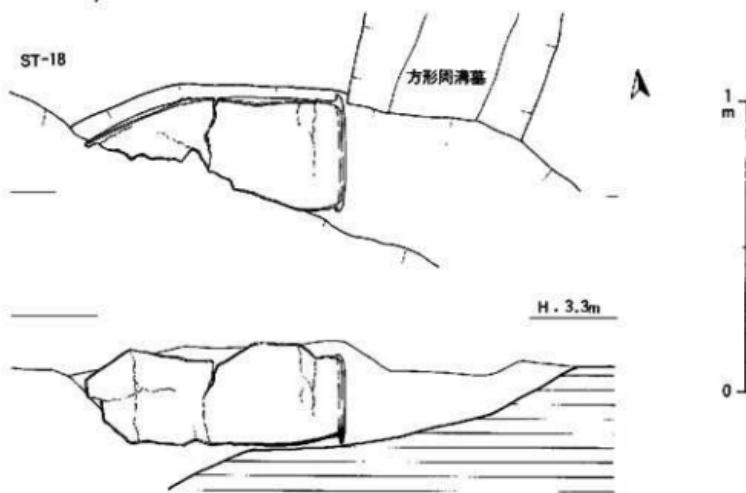
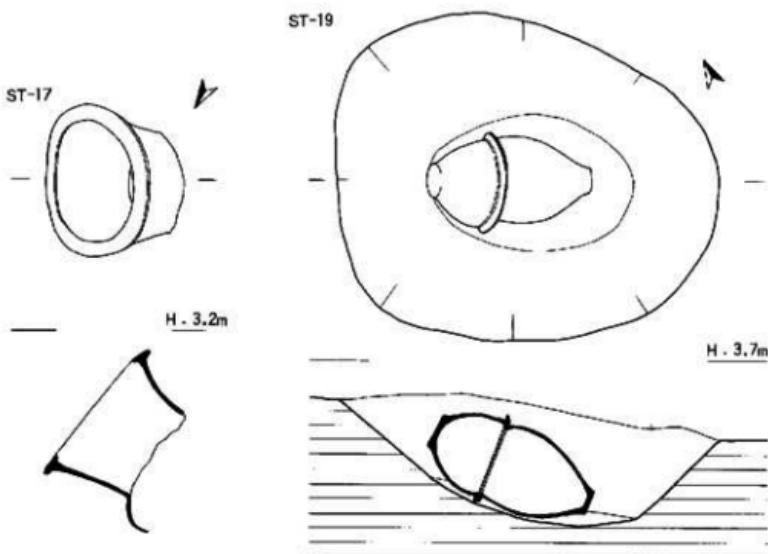


Fig.24 ST-17~19実測図(1/20)

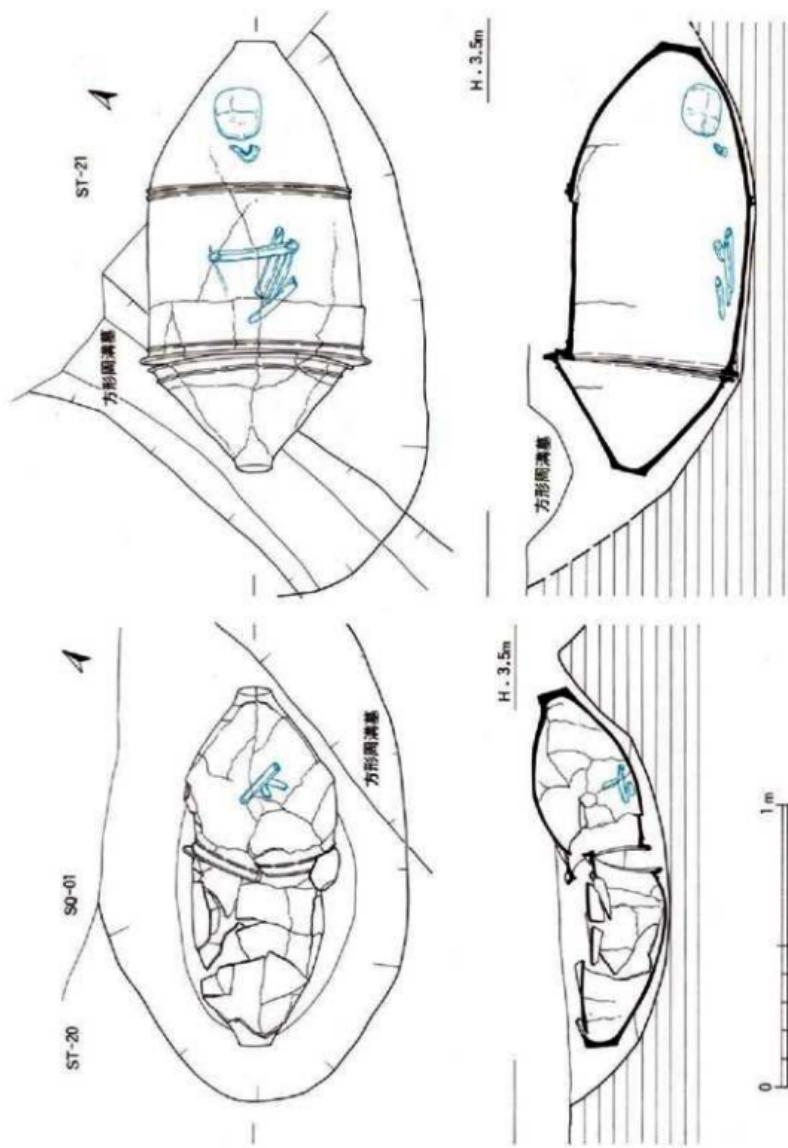


Fig.25 ST-20・21実測図(1/20)

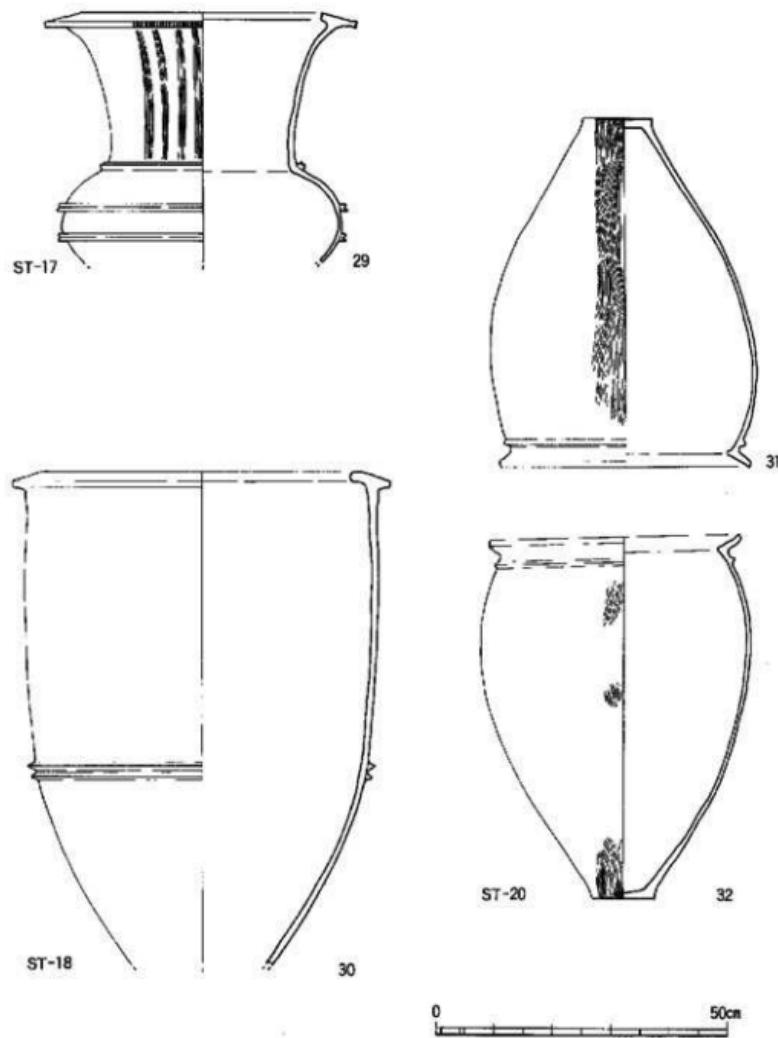


Fig.26 ST-17・18・20・29・30・31・32

小型の鉢形土器、下壺に壺形土器を用いている。

墓壇は $68 \times 90\text{cm}$ の梢円形プランを呈し、 23.5° の傾斜をもって埋置している。N- 43° -Eに主軸方位をとる。時期は中期後半であろう。

上壺（23）は、口径 18.9cm 、底径 7.3cm 、器高 10.4cm の鉢形土器である。体部は半球形をなし、端部を丸くおさめた口縁部は直口して立ち上がる。調整は外表面がハケ目、内面と底部はナデ。胎土に石英砂を多く含み、焼成は良好。

下壺（24）は、口径 23.5cm 、底径 8.2cm 、器高 39.1cm の壺形土器。頭部は短く直口し、口縁部は強く屈曲して大きく外方に開く。胴部は肩の張った球形で、頭部との境に三角内帯が1条巡る。調整は外表面が粗いハケ目、内面はナデ。

ST-14 (Fig. 21・22 PL. 11・26)

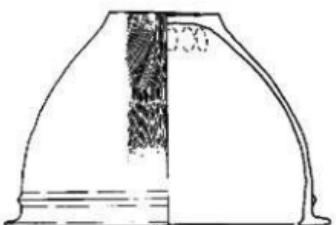
調査区の南東部で検出した接口式成人用壺棺墓である。南側上面には13号壺棺墓がある。上・下壺ともに壺形土器を用い、接合部には粘土等による目詰りは施されていない。上壺内に南側を向いた頭骨が、下壺内には骨小片が遺存していた。被葬者は熟年の女性である。壺棺は $150 \times 220\text{cm}$ の梢円形プランを呈する舟底状の墓壇にはば水平にN- 62.5° -Eの主軸方位で埋置されている。時期は中期初頭であろう。

上壺（25）は、口径 60cm 、底径 10cm 、器高 73.4cm の大型の壺形土器である。口縁部は短い「T」字状をなし、内唇部は粘土を補強して厚く張り出す。胴部上半はやや内傾ぎみに立ち上がり、中位に小さな三角凸帯を1条巡らす。調整は内外ともナデ。胎土には砂粒と雲母を含む。

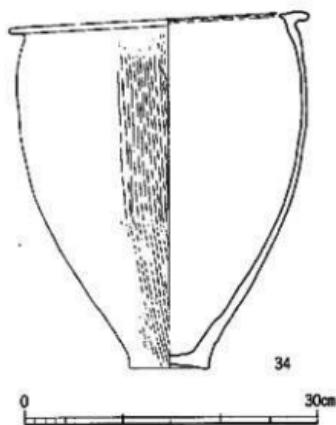
下壺（26）は、口径 54cm 、底径 10cm 、器高 72cm の壺形土器である。道「L」字状の口縁部は端部を平坦に作り、上下にヘラ状工具による刻み目を施す。胴部は倒卵形を呈する。調整は外表面が粗いハケ目、内面はナデ。胎土には小砂粒と雲母を含み、焼成は良好。色調は赤褐色。

ST-15 (Fig. 21・23 PL. 12・26)

調査区の北西部で検出した壺形土器を用いた單口式成人用壺棺墓である。壺棺は上面をSK-01によって破壊され、底部は調査区外にある。口縁部に沿って幅約 5cm の浅い帯状の淡黒色砂層があり、木蓋を用いた可能性が考えられる。主軸方向をN- 35.6° -Wにとり、ほぼ水平



33



34

0 30cm Fig. 27 ST-19 壺棺実測図(1/6)

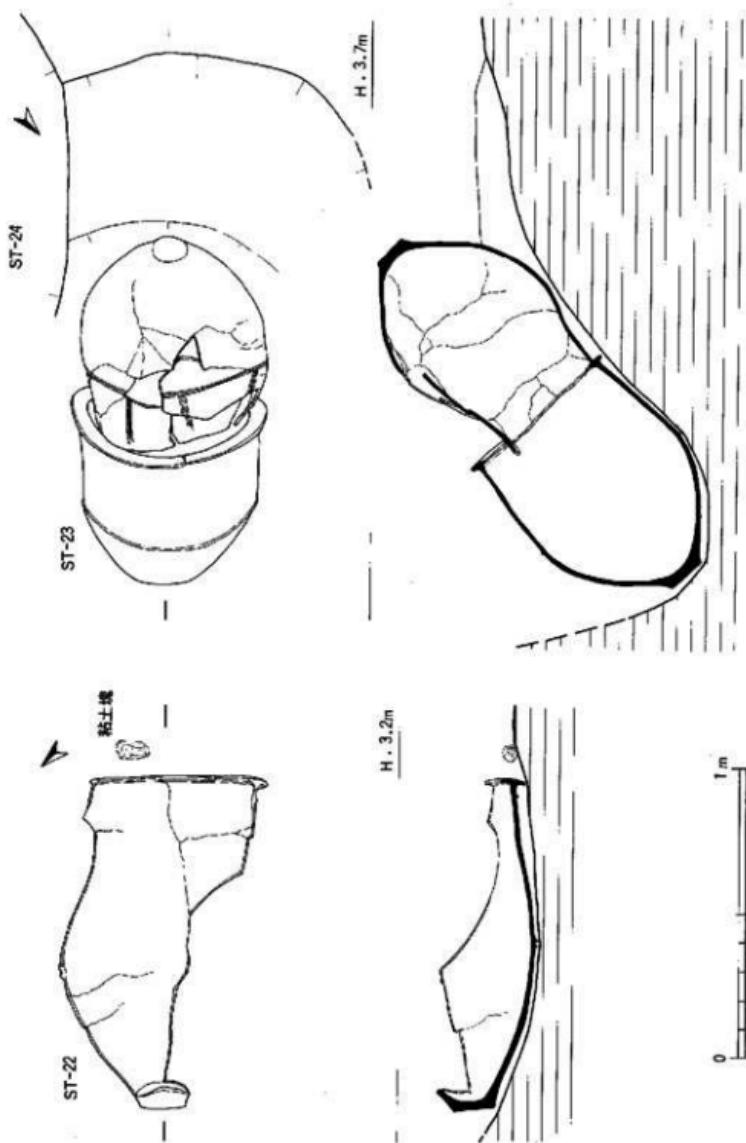


Fig.28 ST-22・23実測図 (1/20)

に埋置している。口縁部下で成人女性の骨片が検出された。時期は中期後半であろう。

壺（27）は、口径71.4cm、底径15cm、器高117cmの壺形土器である。「T」字状の口縁部は小さく外傾する。砲弾形の胸部中位と口縁下に三角凸帯が巡る。調整は内外面ともナデで、胴部凸帯下には幅約2cmのヘラ痕が残る。胎土は小砂粒と雲母を含み、焼成は良好。色調は淡黄色。

ST-16 (Fig. 21・23 PL. 12・26)

調査区の中央部で検出した成人用壺棺墓である。壺棺はSD-01によってその大半が破壊され、墓壙の底面に接した胴部下半を残すのみである。壺棺はN-63°-Wに主軸方位をとり、6.5°の傾斜で埋置されている。時期は中期後半であろう。

壺（28）は、底径14.8cmの壺形土器である。砲弾形の胸部中位には2条の「M」字凸帯が巡る。調整は内外面ともナデで仕上げ、外面には煤様の黒色顔料が塗布されている。胎土には多くの砂粒と雲母を含む。焼成は良好で、にぶい黄褐色を呈する。

ST-17 (Fig. 24・26 PL. 13・26)

調査区の北西隅で検出した単口式成人用壺棺墓である。壺棺は大型の蓋を用いるが、胴部下半は現代井戸によって攢乱され消失している。上壺はなく、木蓋を用いたものであろう。主軸方位をN-59.5°-Eにとって埋置されている。時期は中期末であろう。

壺（29）は、口径54cmの壺形土器である。鋤先状の口縁部は小さく外傾し、端部にはヘラ状工具による刻み目を施す。長くのびる頸部には4~5本を単位とする継方向の暗文を施す。胴部は扁球形で、頸部との境と最大径部に「M」字凸帯を巡らす。調整は外面がヨコナデ、内面はナデ。外面には煤様の黒色顔料が付着している。胎土・焼成は良好・堅緻。色調は褐色。

ST-18 (Fig. 24・26 PL. 13)

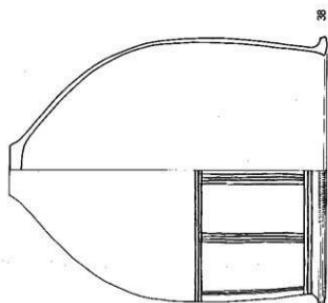
調査区の北西部で検出した成人用壺棺墓である。壺棺墓は方形周溝墓とSE-01によってきられていた。壺棺は大型の壺形土器を用いている。上壺の存在は明確にできなかったが、木蓋を用いた単壺の可能性も考えられる。壺棺はE-6.5°-Sに主軸方位をとり、ほぼ水平に埋置されている。時期は中期後半であろう。

壺（30）は、口径64.7cmを測る壺形土器である。「T」字状の口縁部は小さく外傾し、内唇は肥厚する。砲弾形の胸部中位には2条の三角凸帯が巡る。調整は内外面ともに丁寧なナデ。胎土は良質であるが、粗砂粒を少量含み、焼成は堅緻。色調はにぶい橙色。

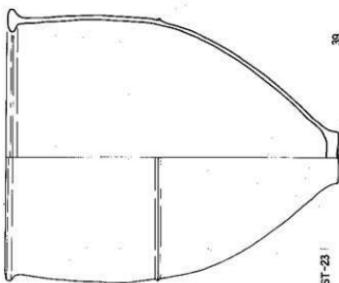
ST-19 (Fig. 24・27 PL. 13・25)

調査区の北西部で検出した小児用壺棺墓で、ST-02と重複し、古い。壺棺は合口式で上壺には鉢形土器、下壺には壺形土器を用いている。墓壙は112×132cmの楕円形プランを呈し、24.5°の傾斜をもって埋置している。主軸方位はW-27°-Nとする。時期は中期後半であろう。

上壺（33）は、口径33.3cm、底径11.2cm、器高21.8cmの鉢形土器である。口縁部は逆「L」字状で、体部は半球形を呈する。口縁部直下には三角凸帯が1条巡る。調整は口縁部がヨコナ

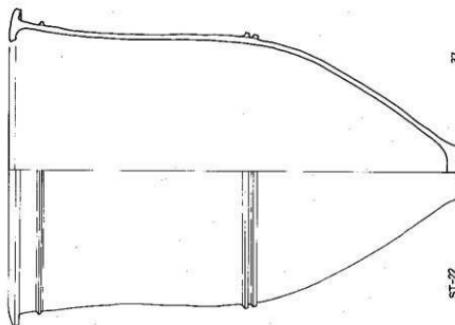


35



39

ST-23



37

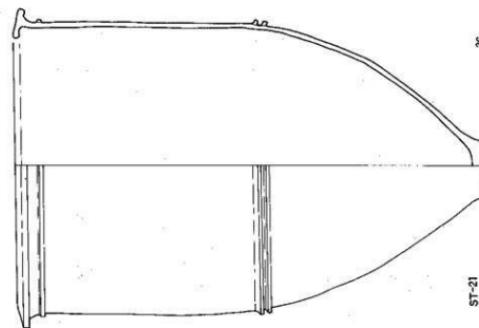
ST-22



Fig.29 ST-21~23縦断面測定(1/10)



35



36

ST-21

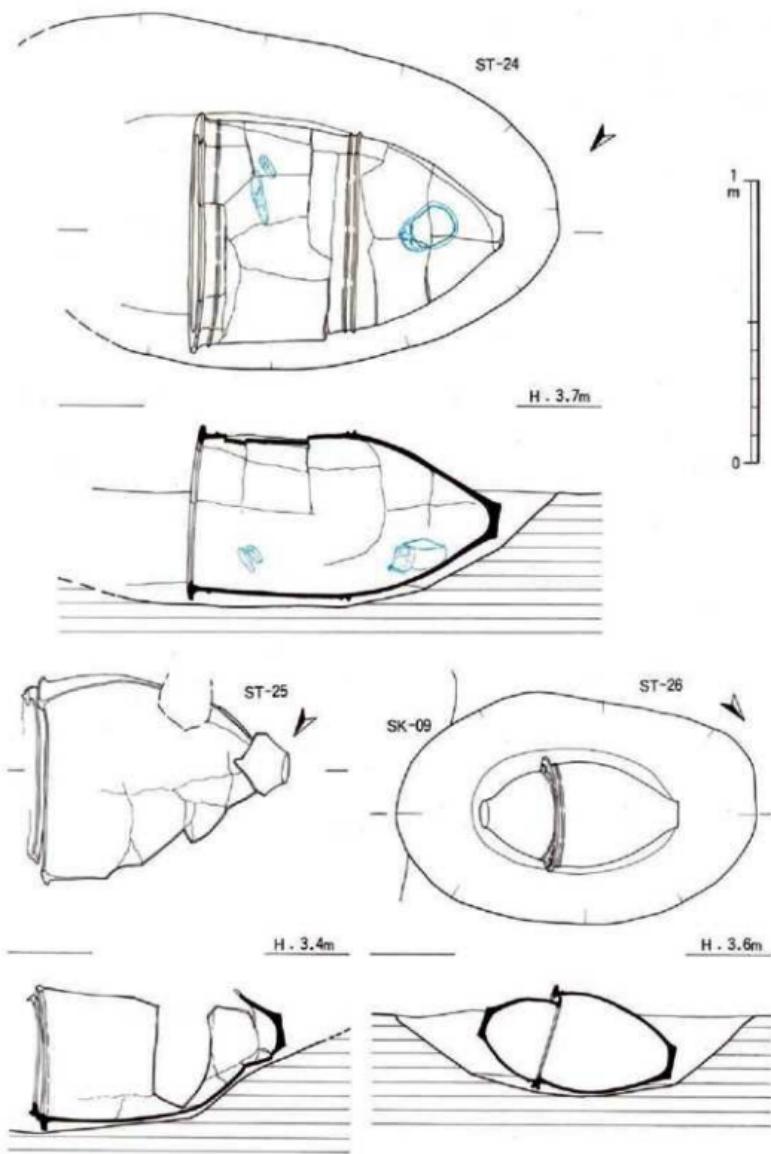


Fig.30 ST-24~26実測図(1/20)

テ、外面はハケ目、内面はナデ。胎土は石英砂を多く含み、焼成は良好。色調は淡黄橙色。

下壺（34）は、口径30.6cm、底径は8cm、器高35.6cmの変形土器である。口縁部は逆「L」字状を呈し、倒卵形の胴部に上げ底状の底部がつく。調整は外面が粗いハケ目、内面はナデで仕上げる。胎土には石英砂を少量含み、焼成は良好。にぶい橙色を呈す。

ST-20 (Fig. 25・26 PL. 14・27)

調査区の北西部で検出した成人用斂棺墓である。斂棺墓は北側を箱式石棺墓（SQ-01）、東側を方形周溝墓によってきかれている。また、東側の方形周溝墓下ではST-21と重複し、ST-21より新しい。上・下壺ともに変形土器を用いる。上壺は水平に、下壺は4°の傾斜を以て埋置しているため接合部下面には、6cm程の隙間があり、逆に上面は上壺が下壺に被っている。接合部には粘土等による目貼りは施されていない。上壺内には大腿骨片があり、下壺側を頭位とした仰臥屈葬と思われる。被葬者は成人女性である。斂棺は110×160cmの楕円形プランを呈する舟底状の墓壙にN-62°-Eの主軸方位で埋置されている。時期は後期初頭であろう。

上壺（31）は、口径43.9cm、底径12cm、器高60.5cmの変形土器である。「く」字状の口縁部は直線的にのび、直下には三角凸帯が1条巡る。胴部は倒卵形をなす。調整は外面が粗いハケ目、内面はナデ。胎土・焼成とも良好であるが、小砂粒を若干量含む。にぶい黄橙色を呈す。

下壺（32）は、口径44.2cm、底径10.8cm、器高63.7cmの変形土器である。「く」字状の口縁部は内弯ぎみに開き、端部は小さく上方に跳ね上げている。胴部は倒卵形を呈し、口縁部下に1条の三角凸帯が巡る。調整は外面が粗いハケ目、内面はナデ。胎土は粗く石英砂を多く含む。

ST-21 (Fig. 25・29 PL. 15・27)

調査区の北西部で検出した接口式成人用斂棺墓である。斂棺墓は東側で方形周溝墓・ST-20と重複し、もっとも古い。斂棺は上壺に鉢形土器、下壺に変形土器を用いている。接合部には粘土等による目貼りは施されていない。下壺内には頭骨と大腿骨があり、仰臥屈葬と思われる。被葬者は然年男性である。斂棺は舟底状の楕円形プランを呈する墓壙に主軸方位をN-65.5°-Eにとり、10°の傾斜で埋置されている。時期は中期末であろう。

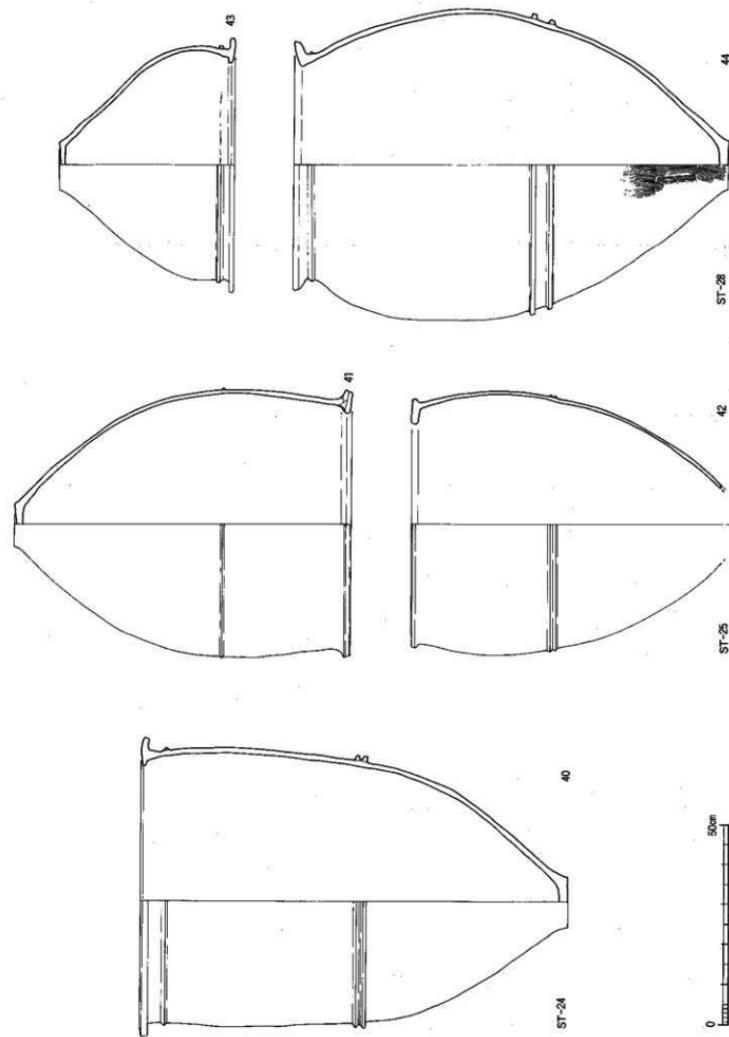
上壺（35）は、口径71.4cm、底径11.6cm、器高37cmの鉢形土器である。「T」字状の口縁部は大きく外傾し、直下には「コ」字凸帯が1条巡る。体部は直線的に開く。調整は口縁部がヨコナデの他はナデで仕上げている。胎土は精良で焼成は良好。色調はにぶい黄橙色。

下壺（36）は、口径73~79cm、底径14cm、器高118.2cmの変形土器で、土圧による歪みが顕著。「T」字状の口縁部は小さく外傾する。胴部は砲弾形を呈し、口縁下に1条、中位に2条の「コ」字凸帯が巡る。調整は内外面ともにナデ。胎土は砂粒と雲母を多く含む。

ST-22 (Fig. 28・29 PL. 15・26)

調査区の北西部で検出した変形土器を用いた単口式成人墓である。SD-07と重複し、古い。削平のため墓壙底面に接した一部を残すのみで、墓壙は確認できなかった。口縁部外側には約

Fig.31 ST-24·25·26瓣壳素描图(1/10)



7cmの間隔をおいて長さ12cm、幅5cmの帯状の黄白色粘土塊があり、木蓋を用いたものであろう。主軸方位をN-47°-Wにとり、ほぼ水平に埋置される。時期は中期後半であろう。

上壺（37）は、口径79.5cm、底径10.8cm、器高112.2cmの変形土器である。「T」字状の口縁部は小さく外傾し、砲弾形の胴部は上半が反りぎみに立ち上がる。調整は内外面ともにナデ。

ST-23 (Fig. 28・29 PL. 16・27)

調査区の北東部で検出した接合式成人墓である。壺棺墓は東側でST-24と重複し、ST-24よりも古い。壺棺は上・下壺ともに変形土器を用い、上壺は口縁部を打ち欠いている。接合部には粘土等による目貼りは施されていない。壺棺は横円形プランを呈する深めの墓壙に44°の急角度をもって埋置されている。主軸方位はN-43.5°-Eにとる。時期は中期初頭であろう。

上壺（38）は、口径51-62cm、底径12.6cm、器高79.3cmの変形土器で、土圧による歪みが著しい。逆「L」字状の口縁部は厚く短い。平坦な端部にはヘラ状工具による刻み目を施す。胴部は短い砲弾形を呈し、上半部には25cmの間隔で上下2段に3本の横凹線を描き、その間に12cmの間隔で4本の縦凹線を配する線刻文を描いている。調整は内外面ともナデで仕上げ、全体に煤様の黒色顔料を塗布している。胎土は良質で砂粒・雲母を含む。焼成は良好。

下壺（39）は、口径62-67cm、底径12.8cm、器高85cmの変形土器で、土圧による歪みが顕著。口縁部は厚い「T」字状を呈する。短い砲弾形の胴部は上半が小さく内寄し、中位には三角凸帯を1条巡らす。調整は内外ともナデで、外面には煤様の黒色顔料を塗布している。胎土は多くの砂粒と雲母を含み、焼成は良好。色調はにぶい橙色。

ST-24 (Fig. 30・31 PL. 16・27)

調査区の北東部で検出した単口式成人墓である。西側でST-23と重複し、こ

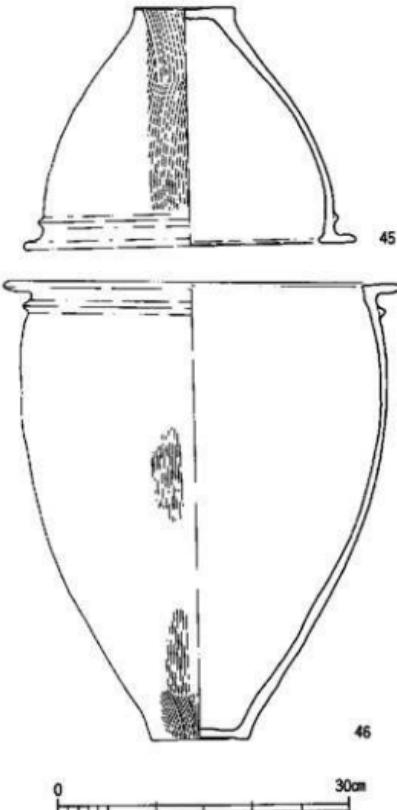


Fig.32 ST-26壺棺実測図(1/6)

れより新しい。壺棺は大形の壺形土器を用いている。壺棺は梢円形の墓壙に主軸方位をN-51.5°-Eにとり、ほぼ水平に埋置されている。蓋については明瞭でないが、木蓋を用いたものと考えられる。壺奥の底部近くに頭骨が、口縁部下には大脛骨片があり、壺奥を頭位とした仰臥屈葬と思われる。被葬者は成人女性である。時期は中期後半であろう。

壺(40)は、口径75.2cm、底径は12.4cm、器高107cmの壺形土器である。口縁部は「T」字状を呈し、内唇は張り出しが弱い。砲弾形の胴部は口縁下が小さく内弯する。口縁部下に三角凸帯が1条、胴部中位に三角凸帯と「コ」字凸帯が各1条巡る。調整は内外面ともナデ。胎土は砂粒・雲母を含み、焼成は良好。色調は淡黄色。

ST-25 (Fig. 30・31 PL. 17・27)

調査区の東部で検出した接口式成人用壺棺墓である。壺棺墓は北側がSD-01によつてきらめている。また、上壺は調査区外にあたるため全容は明らかではない。壺棺は上・下壺とともに壺形土器を用い、上壺がやや小さめである。墓壙は削平により明瞭でないが、N-56.5°-Eの主軸方位ではほぼ水平に埋置されている。時期は中期前半であろう。

上壺(41)は、口径68cm、底径11cm、器高84cmの壺形土器である。短い「T」字状の口縁部は上端に粘土紐を貼り付け厚く仕上げている。短い砲弾形の胴部上位には三角凸帯が1条巡る。調整は内外ともナデ、外面には煤様の黒色顔料が残る。胎土は多くの砂粒と雲母を含む。

下壺(42)は、口径62.7cmを測る壺形土器である。「T」字状の口縁部は内唇が強く張りだす。胴部は短い砲弾形をなし、口縁下は緩く内弯する。胴部中位は三角凸帯が2条巡る。調整は内外面ともにナデ。外面には煤様の黒色顔料が残る。胎土は小砂粒を少量含み、焼成は良好。

ST-26 (Fig. 30・32 PL. 17・25)

調査区の北東部で検出した接口式小児墓である。SK-09と重複し、これより古い。上壺は鉢形土器、下壺に壺形土器を用いる。上壺は上面を下壺内に強く挿入しているために、一端が外方に折れている。粘土目貼りはみられない。墓壙は83×126cmの梢円形プランを呈し、11°の傾斜で埋置している。主軸方位はE-39.5°-Sにとる。時期は中期後半であろう。

上壺(45)は、口径34.3cm、底径10.4cm、器高24.5cmの鉢形土器である。逆「L」字状の口縁部は上端を水平に整え、内唇の張り出しが弱い。体部は半球形をなし、口縁直下には三角凸帯が1条巡る。調整は外面が粗いハケ目、内面はナデで仕上げる。胎土は精良で、焼成も良好。

下壺(46)は、口径40.5cm、底径10cm、器高46.9cmの壺形土器である。逆「L」字状の口縁部は上端を水平に仕上げ、直下には三角凸帯が1条巡る。調整は外面がハケ目、内面はナデ。外面には煤が付着している。胎土は精良で、焼成は良好。色調は外面がにぶい黄色、内面は橙色。

ST-27 (Fig. 33 PL. 19)

調査区の中央部で検出した小児墓である。東側がST-28と重複し、古い。墓壙は削平が著

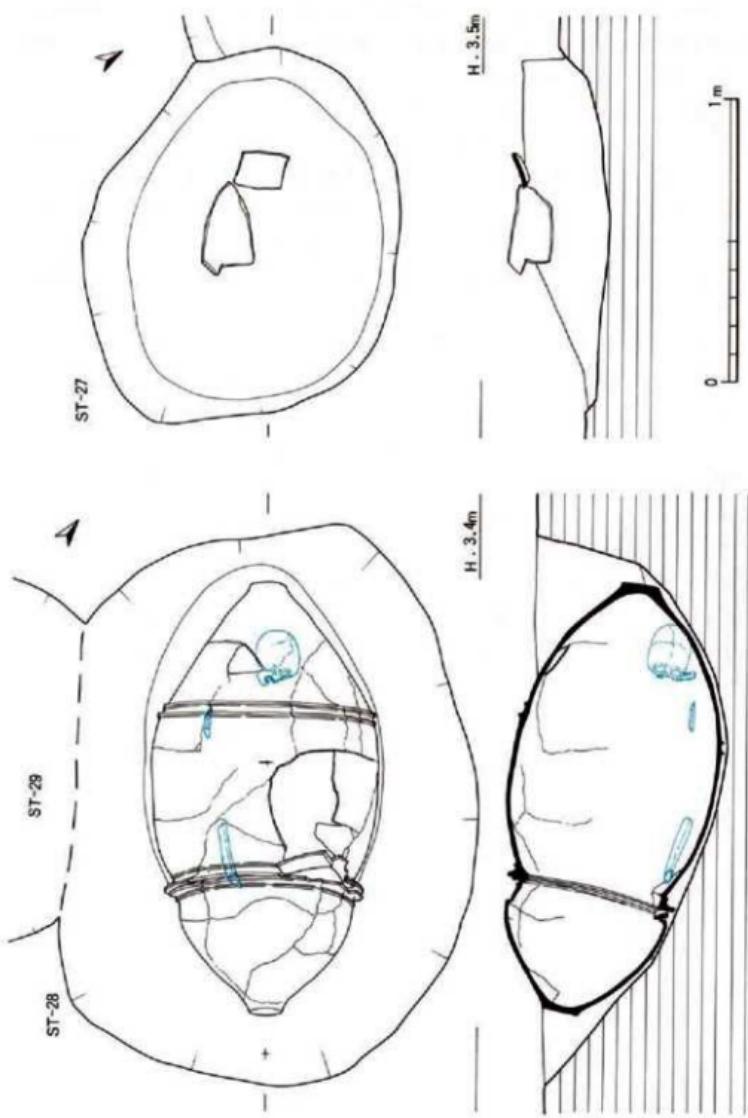


Fig.33 ST-27・28実測図(1/20)

しく、壺棺は下半の一部を残すのみで詳細な埋葬状況は明確にはできなかった。墓壙は114×130cmの不整円形プランを呈し、破片と墓壙との関係から主軸をE-31.5°-Sにとって埋置されたものと推定される。時期は中期後半であろう。壺は小片のため同化できなかった。

ST-28 (Fig. 33・31 PL. 18・27)

調査区の中央部で検出した接口式成人墓である。ST-27・29、SK-12、SD-01と重複し、ST-27より新しく、SK-12、SD-01よりも古い。上壺に鉢形土器、下壺に壺形土器を用いる。接合部には粘土等による目貼りは施されていない。下壺奥には頸骨が、右側縁からは上腕骨片と大腿骨片が検出された。つまり壺兜を頭位とした仰臥屈葬と思われる。被葬者は老年男性である。墓壙は125×195cmの不整梢円形を呈し、主軸方位をN-35°-Wにとる。時期は中期末。

上壺(43)は、口径64.4cm、底径12.1cm、器高44cmの鉢形土器である。「T」の口縁部は小さく外傾し、内唇の張り出しが弱い。胴部は半球形を呈し、小さく内弯する口縁下に1条の「コ」字凸帯が巡る。調整は外面がハケ目後ナデ、内面はナデ。胎土・焼成は良好。

下壺(44)は、口径61.8cm、底径12.4cm、器高109cmの壺形土器である。「く」字状の口縁部は端部を外方に小さく摘み出し、中央が凹む。胴部は倒卵形で、口縁直下に三角凸帯が1条、胴部中位に「コ」字凸帯が2条巡る。調整は内外ともナデで仕上げ、胴部下半には粗いハケ目が残る。

ST-29 (Fig. 34・35 PL. 18・25)

調査区のほぼ中央で検出した壺形土器を用いた単口式小児用壺棺墓である。壺棺はST-29と重複するが、前後関係は明確にはしえなかった。墓壙は95×140cmの梢円形プランと推定される。壺棺はE-6.5°-Sに主軸方位をとり、10°の傾斜をもって埋置されている。また、壺棺は47×52cm、厚さ12cmの板石をもって蓋石としている。時期は中期後半であろう。

壺(47)は、口径44cm、底径9.8cm、器高59.2cmの壺形土器である。口縁部は逆「L」字状で、上端はほぼ水平に仕上げる。胴部は倒卵形を呈し、口縁下に三角凸帯が1条巡る。調整は外面がハケ目後にナデ、内面はナデ。胴部上半には煤が付着している。胎土は精良で、焼成も良好。

ST-30 (Fig. 34・35 PL. 19・25)

調査区の北西側で検出した単口式小児墓である。墓壙の西側は方形周溝墓によってきられ、壺棺は胴部上半を残して消失している。墓壙は90×148cmの梢円形を呈す。主軸方位をN-53.5°-Wにとり、ほぼ水平に埋置されている。また、壺の口縁部に沿って床面に幅7cm、深さ3cmの浅い溝状の凹みがあり、木蓋を設けていたものであろう。時期は中期後半であろう。

壺(48)は、口径35cmの壺形土器である。口縁部は「く」字状に外反し、直下には1条の三角凸帯が巡る。胴部は倒卵形。調整は外面がハケ目、内面はナデ。外面には煤の付着が著しい。日用雑器を転用したものであろう。胎土は粗く砂粒を多く含み、焼成は良好。にぶい橙色。

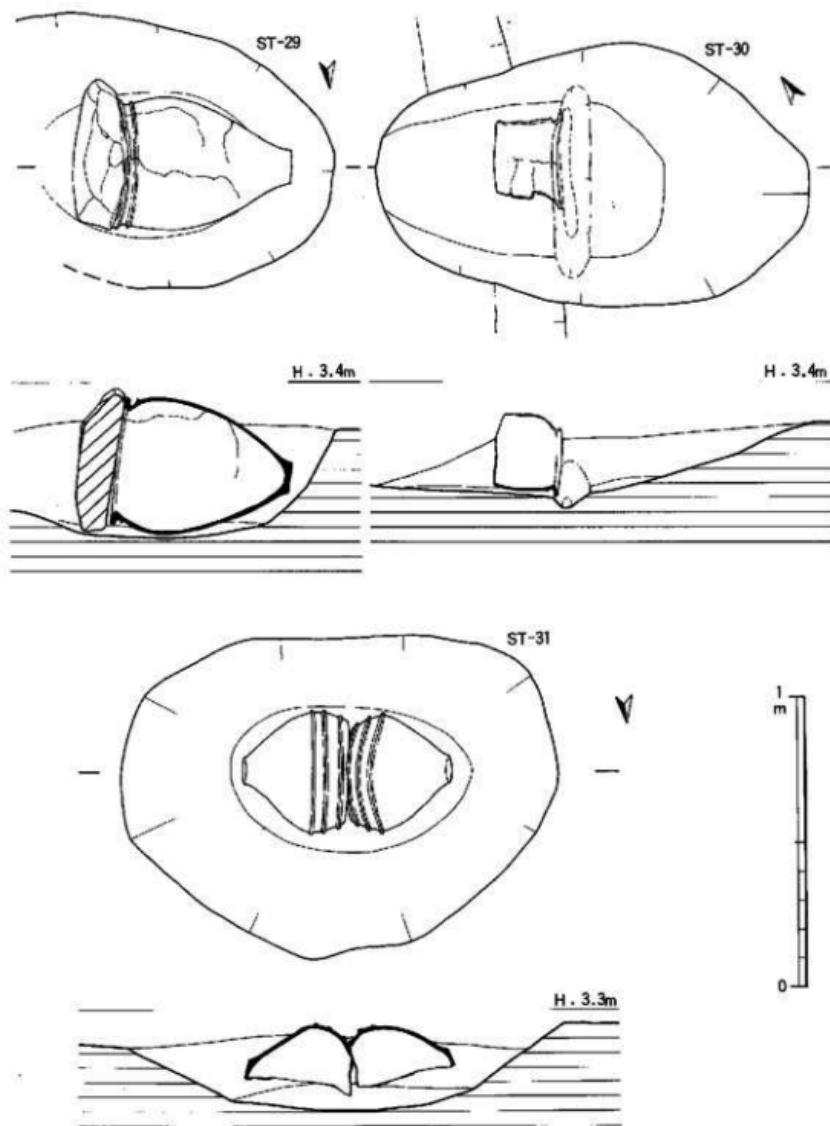


Fig.34 ST29~31実測図(1/20)

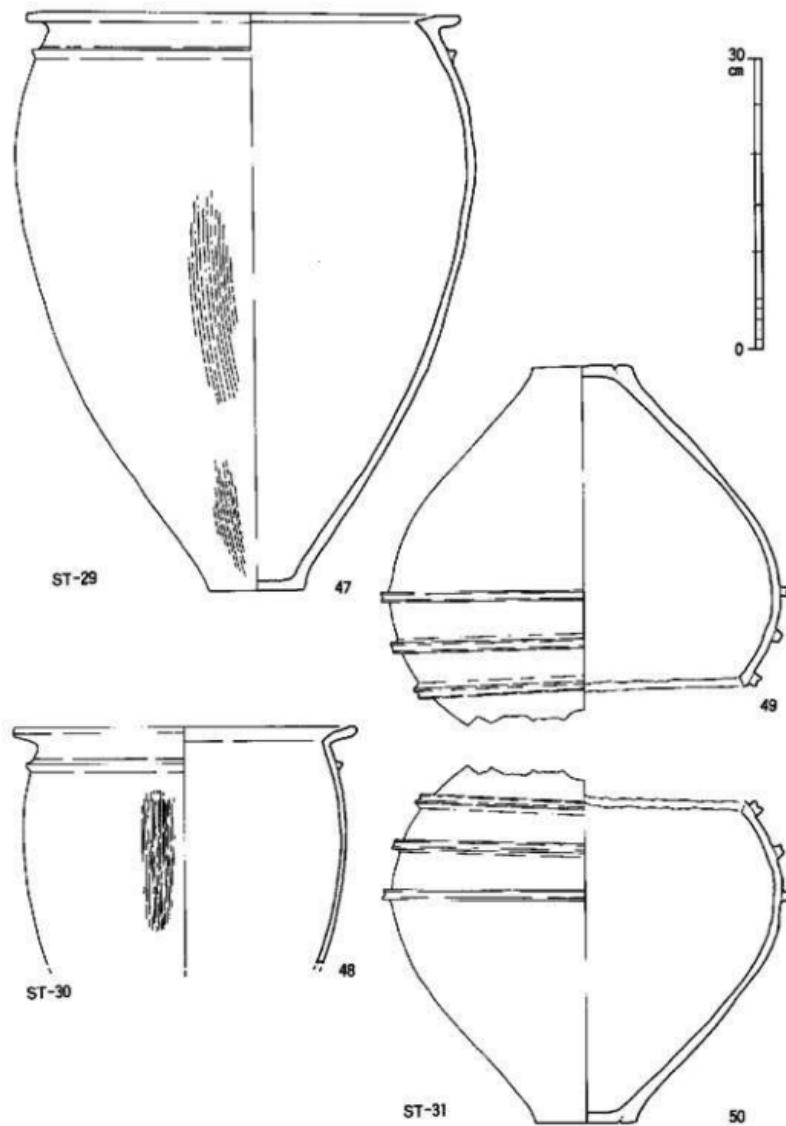


Fig.35 ST-29~31実測図(1/6)

ST-31 (Fig. 34・35 PL. 19・25)

調査区の西側で検出した接口式小児墓である。ST-04・SK-04と重複し、もっとも古い。墓壙は110×150cmの楕円形を呈す。主軸方位はN-53.5°-Wにとり、ほぼ水平に埋置している。喪棺は口頭部を打ち欠いて縦に半裁した壺形土器を上・下壺として、遺体上面を覆っている。

上壺（49）は胸部最大径39.6cmの壺形土器で、口縁部から頸部を打ち欠いている。胸部は肩の張った球形で、上半部には3条の「M」字凸帯が等間隔に巡る。調整は内外ともにナデで、外面には煤様の黒色顔料を塗布している。胎土は石英粗砂を含み、焼成は良好。にぶい黄色。

下壺（50）は壺を縦方向に半裁したもので、上壺と同一個体である。

2) 箱式石棺墓

箱式石棺墓は調査区の北西隅部で1基検出されたが、すぐ北1mの距離にも南北方向に主軸をとるもののが確認されたが調査区外の歩道下あるために調査するにはいたらなかった。

SQ-01 (Fig. 36 PL. 20)

調査区の北西隅で検出した。石棺墓は南側が20号喪棺墓と重複し、20号喪棺墓よりも新しい。石棺墓は主軸方位をN-67°-Eにとり、墓壙は短軸128m、長軸197mの隅丸長方形プラン

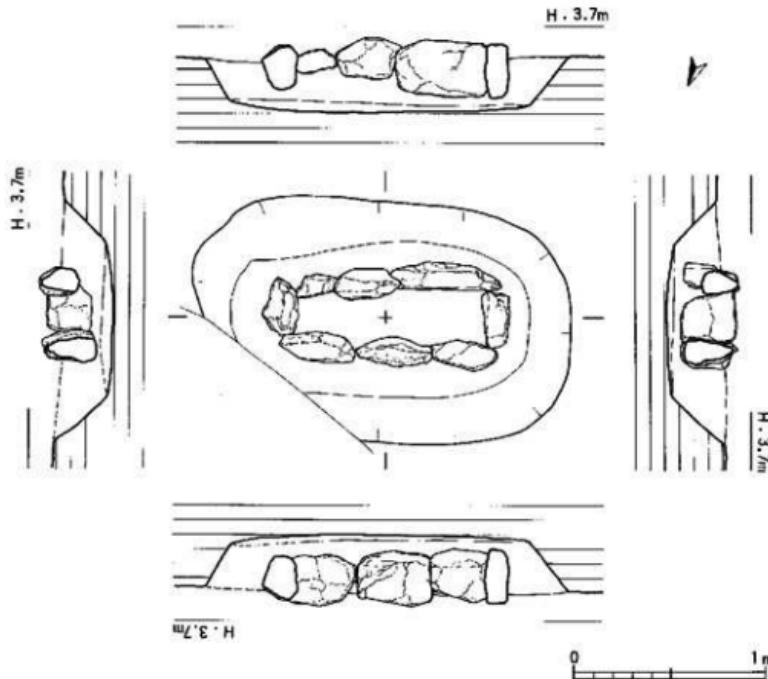


Fig.36 SQ-01実測図(1/30)

を呈する。石棺は側壁に4枚の板石を用い、西側は小口板を狹み込む形式であるが、東側小口板は鍵型をなす。内法は長さ97cm、小口幅は西側で30cm、東側で19cmを測り、頭位を西にとるものであろう。床面は棺材底より約10cm白色砂を敷き詰めて平坦に作り、蓋石までの空間は21cmである。蓋石は消失しているが、石棺内は暗茶褐色砂が単純に堆積し、擾乱を

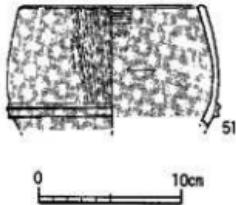


Fig.37 SO-01出土土器実測図(1/4)

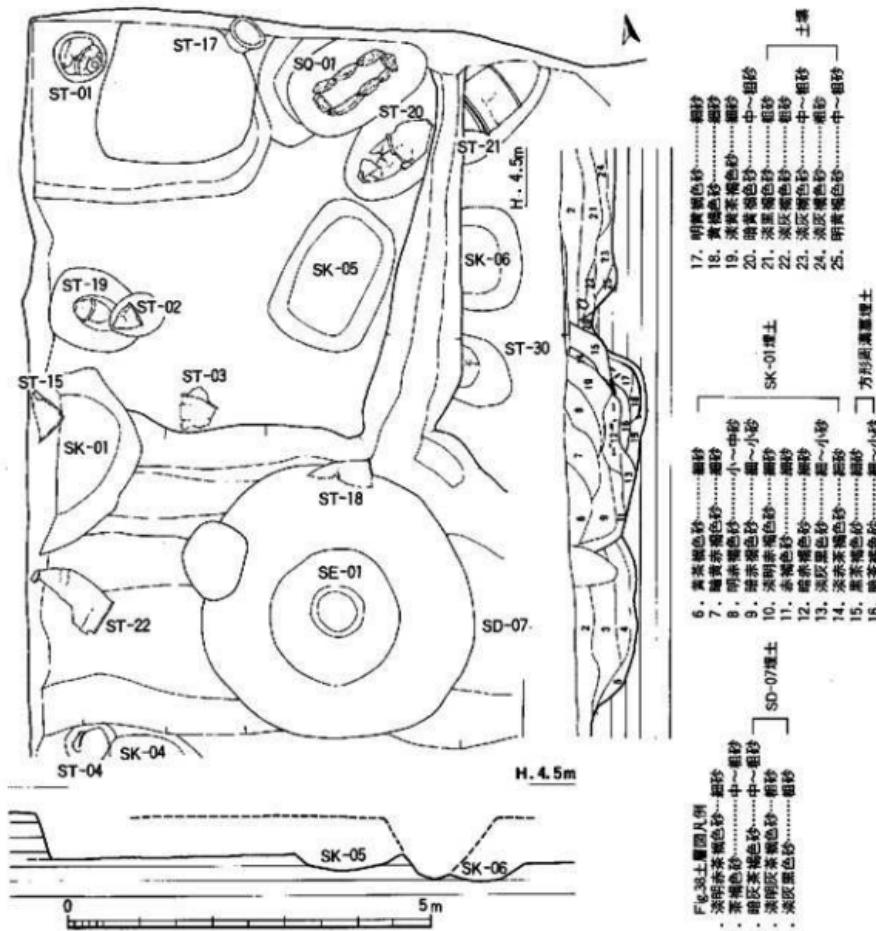


Fig.38 方形周溝基実測図(1/80)

受けた跡がないことから板材を蓋として用いたことも考えられる。

出土遺物 (Fig. 37)

51は脚付壺である。プランデーグラス状のプロポーションをもつと考えられる。外面は縦、内面と口縁部は横方向の暗文を意識した研磨を施す。全体に丁寧な作りで、胎土は黄灰色を呈し、極めて精良である。内外とも丹塗り。類例として福岡市城南区宝台遺跡B地点祭祀遺構出土のものがある。

3) 方形周溝墓

方形周溝墓は1基検出した。東方は第10次調査区で、西方は第2・3・4次調査区で検出されているが、その分布する中心は本調査区より西北方に拡がるものであろう。

1号方形周溝墓 (Fig. 38 PL. 20)

調査区の西北隅で検出した。西・北側は調査区外に拡がるために全容は明確でないが、西隣の第2次調査区ではこれにつながる周溝が確認されていないことから、一辺が6~7mの小型の方形周溝墓になるものであろう。周溝及び墓域内は壇棺墓・箱式石棺墓等との重複が著しい。東側周溝は現長6mでST-20・21・30を切っている。南側のST-30は棺自体が破壊されているのに対し、北側のST-20・21は両墓間の間をぬって棺を破壊することなく開削している。このため周溝底は壇棺上面で止まり南側に比べてかなり浅くなる。ST-20を切る箱式石棺墓(SQ-01)は周溝を切り込んだ黒褐色砂層下半より掘り込んでおり、周溝墓よりも古い。南側周溝は現長5mで東南コーナーはSE-01によって破壊される。ここにはST-18があるが南半分は消失している。西隣周溝底にはST-15があるが、周溝とともにSK-01によって破壊されている。周溝を区切る陸橋部はない。主体部は精査したが検出できず、削平によって消失したものであろう。副葬遺物がないために明確な時期は決定できないが、東側周溝がST-20・21、SQ-01より新しいことから弥生時代後期前半以降に比定できよう。

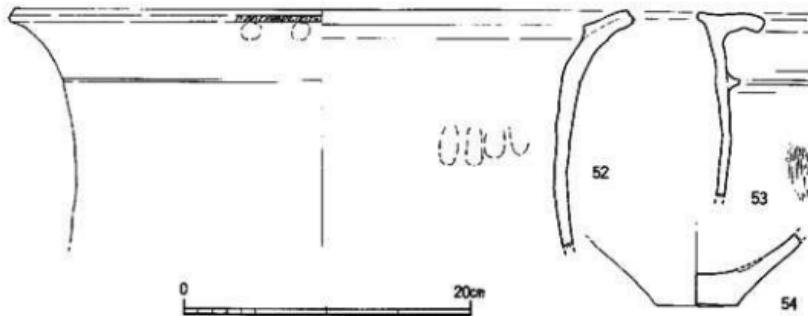


Fig.39 方形周溝墓出土土器実測図(1/4)

出土遺物 (Fig. 39)

壺形土器 (52・54) 52は大壺の壺である。外反した口縁の内側は粘土貼付けにより肥厚し、貼付部上面は内傾する。端部に刻み目、口縁下に沈線を巡らす。頸部外面はナデ、口縁付近はヨコナデ、内面は指押え後ナデ調整。54は壺の底部である。小さめの分厚い底から胴部が丸味をもって立ち上がる。外面とも風化が著しく調整不明。胎土は粗く小砂粒を密に含む。

壺形土器 (53) 鋸先状の口縁部はやや外傾し、口縁下に三角凸帯が1条巡る。調整はハケ目後軽くヨコナデ、内面はナデ。外面は薄く煤が付着す。大小の砂粒を含みやや粗い胎土である。

4) 土壙

土壙は13基検出した。土壙は調査区北半の壺棺墓群中にあり、SD-01以南には分布しない。平面形は橢円形と方形のものがあるが、形状の相違が時間差に直結するとは云い難い。覆土中の遺物も少なく、その性格等を推定しうるものも少ないが、時期的には壺棺墓造営期の範囲内におさまるもので、2~3を除いて壺棺墓となんらかの関わりをもつものと推測される。

SK-01 (Fig. 40 PL. 21)

調査区の北西部にあり、ST-15や方形周溝墓と重複し、最も新しい。平面形は径約2.6mの円形になろう。底面下にはST-15があるが、土壙の開削によって上半部が破壊され、破片が覆土下層に堆積していた。覆土は淡桃褐色砂で、遺物は他に近世陶磁器片が少量出土した。

出土遺物 (Fig. 43 PL. 28)

壺形土器 (55・56) 55は口縁部が大きく外反して開く。口頸部外面は調整後に縱方向の暗文を施す。胎土は小砂粒を多く含み粗い。56は口径25.8cm。朝顔状に開く頸部に鋸先状口縁がつく。球形の胴部と頸部の境に三角凸帯が1枚、中位には「コ」字凸帯が2条巡る。調整は口頸部がヨコナデの他はナデ。胴部には一部にハケ目が残る。内面はナデ調整。胎土は小砂粒を少量含むが精良で焼きも良い。口縁部内側から外面全体に丹が塗られている。

壺形土器 (57・58) いずれも底部資料である。調整は外面をハケ目、内面をナデ調整する。

高坏 (59) 口径は29cm。口縁部は素口縁で内唇を小さく摘み出す。口縁下に三角凸帯を1条巡らす。調整は内面が2~3mm幅の研磨、外面は突帯下までヨコナデの他はナデ。脚部はタテに2~3mm幅の研磨を施す。淡茶褐色の精良な胎土である。内外面とも丹塗り

SK-02 (Fig. 40)

調査区の中央部西側にSK-03の南に隣接して位置する。平面形は長軸152cm、短軸122cmの隅丸長方形で、南側がやや幅広になる。深さは45cmで断面形は逆台形状を呈し、底面は浅い凹レンズ状をなす。主軸方位をN-17°-Eにとる。

SK-03 (Fig. 40 PL. 21)

調査区の中央部西側に位置する。上面にはST-08がある。平面形は長軸190cm、短軸130cmの隅丸長方形を呈し、深さは60cm。横面は緩やかに傾斜し、底面は平坦である。東側小口に沿っ

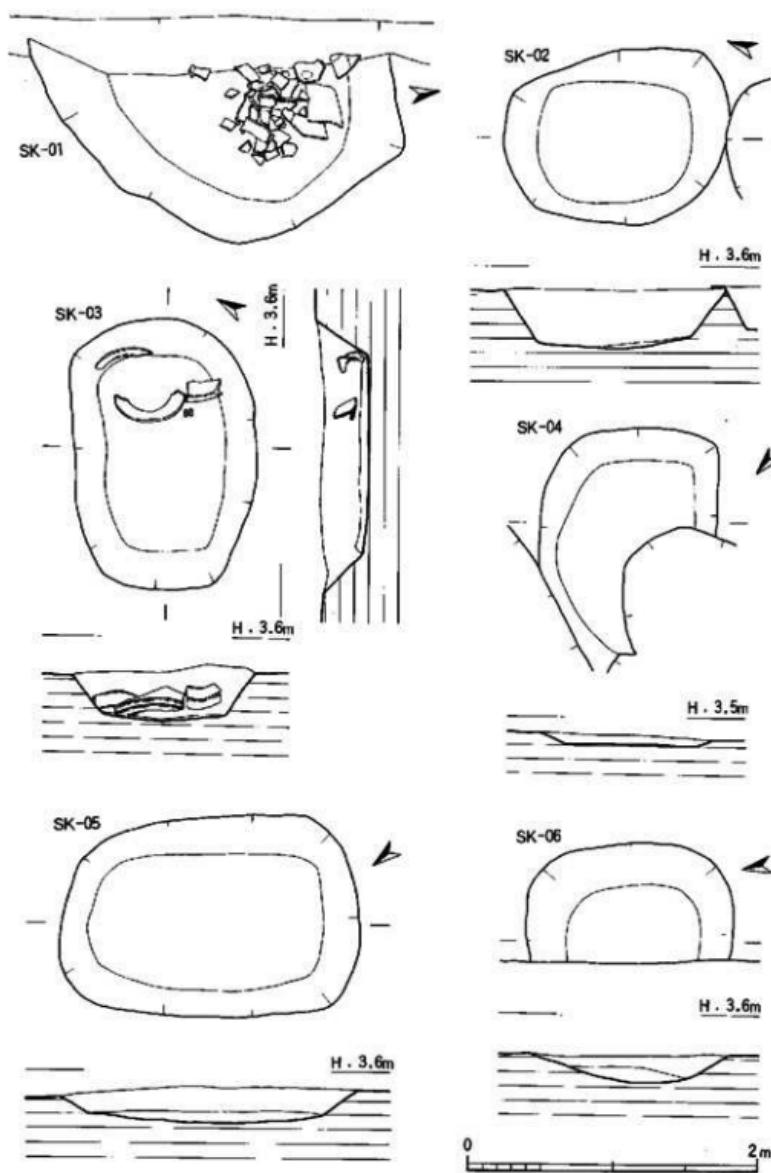


Fig.40 SK-01~06実測図(1/40)

た底面上には胴部を打欠いた大型甕の口縁部が埋置されていた。主軸はN-E 62° -E。

出土遺物 (Fig. 43 PL. 28)

甕形土器 (60) 口径46cm。やや内傾する「T」字状口縁の大型甕である。口縁下に「コ」字突帯が1条巡る。調整は外側がヨコナデ、内面はナデ。胎土は粗砂粒を密に含み、焼成は良好。

SK-04 (Fig. 40)

調査区の中央部西側にある。ST-04・31・SD-07と重複し、ST-31より新しく、ST-04・SD-07より古い。平面形は長軸180cm、短軸120cmの隅丸長方形に復原できる。主軸方位をN-31°-Wにする。深さは10cmと浅い。底面は平坦で、断面形は逆台形を呈する。遺物は1点も出土しなかった。

SK-05 (Fig. 40)

調査区西北部の方形周溝墓内にある。平面形は長軸204cm、短軸120cmの隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-40°-Eにとる。喉面は緩く立ち上がり、深さは27cmを測る。断面形は逆台形で、底面は浅い凹レンズ状を呈する。遺物は一点も出土しなかった。

SK-06 (Fig. 40)

調査区の北隅にあり、西側は方形周溝墓の周溝によって切られている。平面形は一边が約140cmの隅丸方形になろう。深さは25cmを測り、断面形は舟底状を呈する。覆土は淡茶褐色砂で、遺物は出土しなかった。

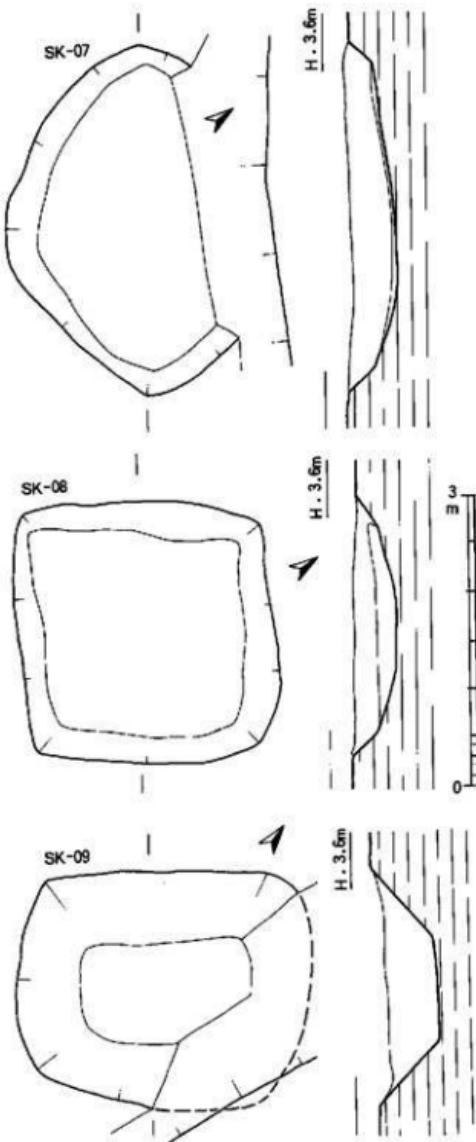


Fig.41 SK-07~09実測図 (1/60)

SK-07 (Fig. 41 PL. 21)

調査区の北部で検出したもので、ST-21のすぐ東に位置する。平面形は一边が約150cmの隅丸方形をなすものであろう。深さは25cmを測り、壁面は緩く立ち上がる。底面は中央が凹レンズ状に凹む。覆土は淡茶褐色砂で、遺物は出土しなかった。

SK-08 (Fig. 41 PL. 22)

調査区の北側にあり、SK-07とSD-07の間に位置する。平面形は一边が130cmの隅丸方形で、深さは45cm。断面形は舟底状を呈する。覆土は淡茶褐色砂で、遺物は出土しなかった。

SK-09 (Fig. 41)

調査区の北東隅にあり、東側は調査区外に並ぶ。平面形は長軸が約150cm、短軸は120cmの隅丸長方形になろう。主軸方位はN-37°-Wにとる。壁面は緩く傾斜し、深さは35cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。覆土は淡茶褐色砂で、弥生時代の壺・甕片が少量出土した。

出土遺物 (Fig. 43, PL. 28)

壺形土器 (62・63) 分厚い底から胴部は段を有して立ち上がる。62は底径4.8cm、底部付近にヘラ状工具で稚拙に凹線を描く。円盤貼付の底部形状を意識したものであろう。調整は外面が研磨風の丁寧なヘラナデ、内面はナデ。胎土は大小の砂粒を多く含む。63は底径6.7cm。上げ底で体部の張りが強い。胴部外面はハケ目調整後にナデ、内面はナデ調整。小砂粒を多く含む。

甕形土器 (61) 口径20cm。口縁部は逆「L」字状で、端部にはハケ目原体による刻み目を施す。口縁下には三角凸帯が1条巡る。鉢の可能性もある。調整は外面がヨコナデ、内面はナデ。

SK-10 (Fig. 42 PL. 22)

調査区の中央部で検出したものでST-28、SK-12、SD-01・07と重複し、最も古い。平面形は長軸約1.7m、短軸約1.2mの梢円形になるものであろう。底面は平坦で、深さは15cmを

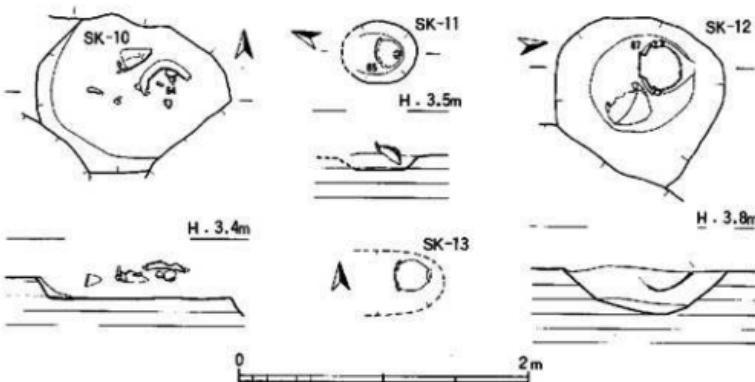


Fig.42 SK-10~13実測図(1/40)

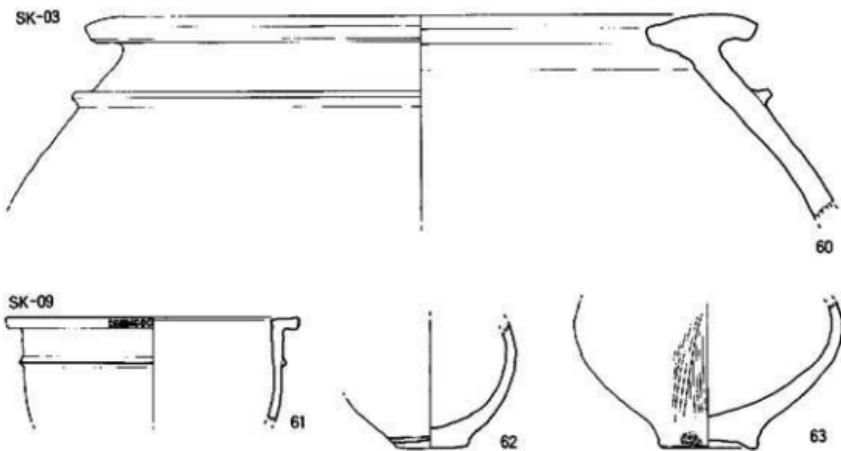
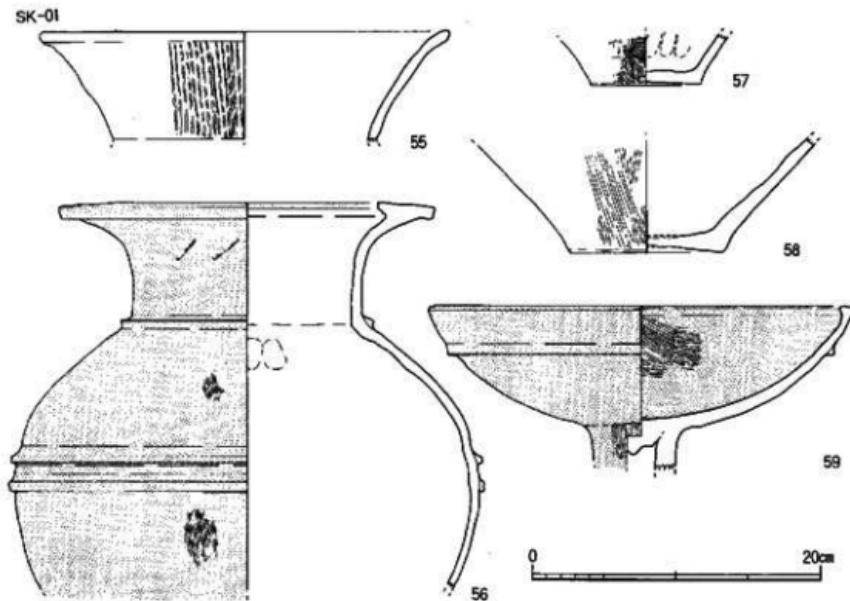
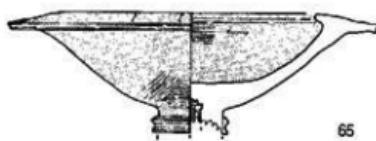


Fig.43 SK-01・03・09出土土器実測図(1/4)

SK-10



SK-11



SK-12

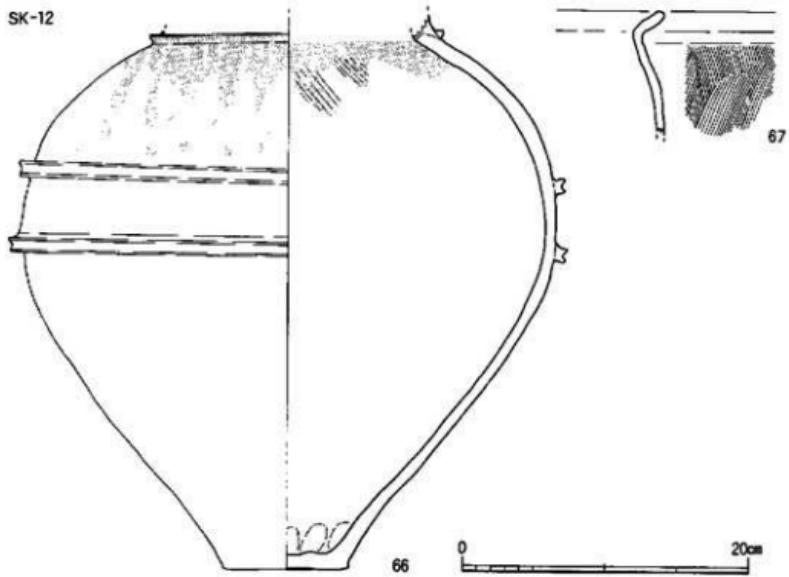


Fig.44 SK-10・11・12出土土器実測図(1/4)

かる。底面上からは壺形土器の口頸部が破碎して出土した。

出土遺物 (Fig. 44)

壺形土器 (64) 朝顔状に開く頸部にやや外傾する勧先口縁がつき、端部には刻み目を施す。頸部と胴部との境には三角凸帯が1条巡る。口縁内側から突帯直下までヨコナデ調整、内面はナデ調整で頸部に指痕が残る。胎土は精良で小砂粒を少量含み、焼成も良好である。

SK-11 (Fig. 42)

調査区の中央部北側のST-05~07に東接して位置する。平面形は53×43cmの円形を呈し、深さは10cmを測る。平坦な底面上には脚部を打欠いた高坏が斜めに伏せた状態で出土した。

出土遺物 (Fig. 44 PL. 28)

高坏 (65) 口径22.5cm。口縁部は勧先状でやや外傾する。坏部と脚部との境目付近に「M」突帯が1条巡る。坏部は内外面とも幅3mm程のヘラ先状工具による研磨を施す。脚部は凸帯部はヨコナデ調整し、内面には絞り痕が明瞭に残る。内外面ともに丹塗りである。

SK-12 (Fig. 42 PL. 22)

調査区の中央部で検出したもので、ST-28・SK-10と重複し、最も新しい。平面形は径120~130cmの不整円形を呈し、深さは30cmを測る。断面形は舟底状をなし、壁面は緩やかに傾斜して立ち上がる。土壤内には口縁部~頸部を打欠いた丹塗りの壺型土器2個体が横位に埋置されており、祭祀土壤としての色彩が濃い。なお、調査中に盗難にあい、紛失した。

出土遺物 (Fig. 44 PL. 28)

壺形土器 (66) 脚部は球形を呈し、頸部との境に三角凸帯が1条、頸部上位に「M」字凸帯が2条巡る。外面は頸部から脚部中位までをヨコナデ、以下をナデ調整。内面はハケ目後ナデ。内底は指おさえ。黄褐色の胎土は小砂粒を多く含む。脚部上位は丹を塗っている。

壺形土器 (67) 口縁部は短く外反し、脚部は張りが弱い。調整は外面がハケ目、内面はナデ。

SK-13 (Fig. 42)

調査区の中央部にあり、ST-11のすぐ西に位置する。土壤東端には継に半裁したL字形約20cmの小型壺があり、これを中心に幅40cm、長さ60cmの範囲に淡灰茶褐色砂が堆積していた。壺は底部を小口方向に向けて伏せた状態にある。半裁した壺を上下に合わせて遺体を覆う葬法を探っているST-31例から、壺を以て遺体頭部を覆ったものとも推測されよう。この場合は長軸が約80~90cmの土壤壺となろう。なお、壺は調査中に盗まれ現存しない。

5) 溝

溝は大小合わせて7条を検出した。このうちSD-06を除いては中世以降のもので、SD-01・07は第8・10~12・14次調査区からつづく一連の溝であろうと思われる。

SD-01 (Fig. 45)

中央部を北東から南西に直線的にのびる溝である。東端でSD-07、SE-02と重複し、最も

新しい。溝幅は2.0~3.1mで断面形は浅いU字形をなす。深さは60~90cmを測り、溝底は砂丘後背地に立地するためか南側が浅い。遺物は焼棺片の他、古墳時代~古代の土師器・須恵器や中世~近世の陶磁器片・瓦が出土した。東方の第10次調査区からのびる2・3号溝につながるものだろうが、どの溝に接続するかは不明。西隣の第2次調査区では検出されていない。

出土遺物 (Fig. 46・52・53 PL. 29)

壺形土器 (68) 朝顔状の頸部に鋤先口縁がつく。調整は内外面ともナデ仕上げ。胎土は粗い。

壺形土器 (69) 口径27cm、口縁部は「T」字状をなす。外面はハケ目、内面はヨコナデ調整。

土師器碗 (70) 分厚い丸味のある体部に低い高台がつく。内面は雑なナデ、外面高台付近には指頭痕が残る。胎土は精良であるが、雑な整形である。

陶磁器 (71・72) 71は中国陶器の壺の耳である。灰ベージュのねっとりした緻密な胎土に白や褐色の砂粒が混じる。オリーブ色がかった灰白色の不透明な釉の上から褐釉が流しがけされている。72は龍泉窯系青磁碗である。内面は蓮花折枝文を施す。灰ベージュの緻密な胎土で、粘性の強い半透明の灰オリーブ釉がかかる。細かい貫人がある。

勾玉 (115) 土製の勾玉で、端部は直角に曲がる。長さ3.2cm、重さ4.5g。

土錘 (116~119) いずれも管状の中型土錘である。長さは7.2~7.4cm。重さは117が16.4g、119が28.8gである。

硯 (123) 硯尻部の破片で裏面は中央部が凹み、裏面は上げ底状になる。縁部は消失する。

SD-02 (Fig. 45)

南北隅で検出した長さは7mの南北溝で直線的にのび、南端は西に小さく曲がる。溝幅は45cm、深さは10~15cmで、断面形はU字形をなす。弥生~中世の土器片が少量出土した。

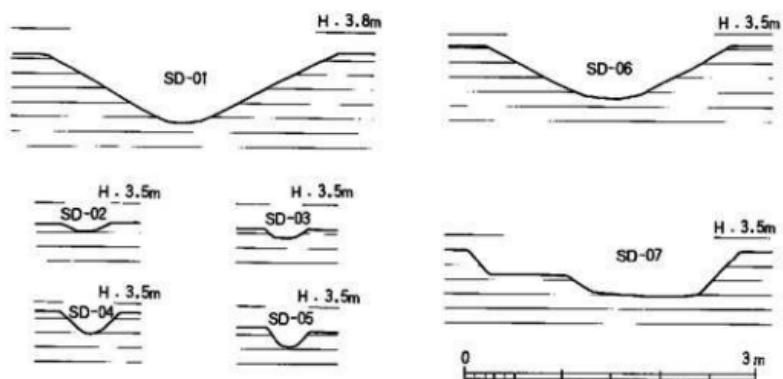


Fig.45 SD-01~07断面図(1/60)

SD-03 (Fig. 45)

南西隅で検出した南北溝で、SD-02の西に並行してのびる。長さは3m、溝幅は40~55cm、深さは10cm。断面形は逆台形に近い。遺物は出土していない。

SD-04 (Fig. 45)

南部で検出した東西溝で、西端はSD-01と重複し、新しい。長さ5.5m、溝幅は60cm、深さは15~20cm。断面形はU字状をなす。中世~近世の土師器・陶磁器が少量出土している。

出土遺物 (Fig. 46)

染付小鉢 (73) 白色精良な素地上に灰白色の不透明釉がかかる。高台畳付に目砂が付く。

SD-05 (Fig. 45)

南部で検出した東西溝で、SD-04の東に隣接している。長さ2.7m、溝幅は45cm、深さは15~20cm。断面形はU字状をなす。古代~中世の土師器・須恵器が少量出土している。

SD-06 (Fig. 45)

東部で検出した溝で、西端はSD-01に切られる。溝幅は2.6m、深さは60cmで断面形はU字状をなす。覆土は黒褐色で方形周溝墓の覆土に近く、これに近い時期のものであろう。

SD-07 (Fig. 45)

北部で検出した東西溝で直線的にのびる。SD-01、SE-01・02や方形周溝墓と重複する。

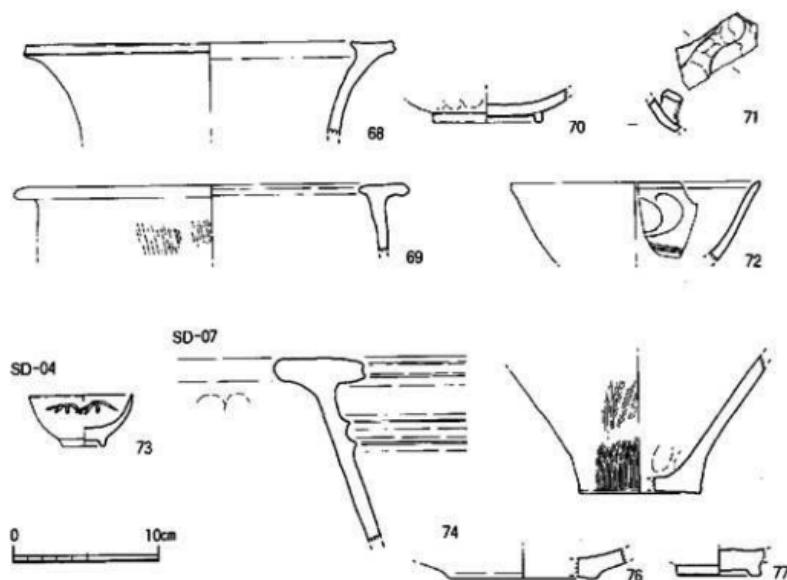


Fig.46 SD-01・04・07出土土器実測図(1/4)

溝幅は2.5~3.5m、深さは50cmを測る。断面形は逆台形を呈し、北側は一部に平坦面を作る。遺物は甕棺片の他、古墳時代~中世の土師器・須恵器が出土している。東の第10次調査区からのびる2・3号溝のいずれかにつながるものであろう。第2次調査区では検出されていない。

出土遺物 (Fig. 46)

甕形土器 (74・75) 74は復原口径約65cm。水平な「T」字口縁で、直下には三角突帯が2条ある。調整は口縁部と凸帯がヨコナデ、他はナデ。75は底部。外面はハケ目、内面はナデ調整。

陶磁器 (76・77) 76は中国陶器の鉢である。不透明な茶オリーブ釉がかかる。77は龍泉窯系青磁碗。灰ベージュの緻密な素地に透明の金茶オリーブ釉がかかり、細かい貫入がある。

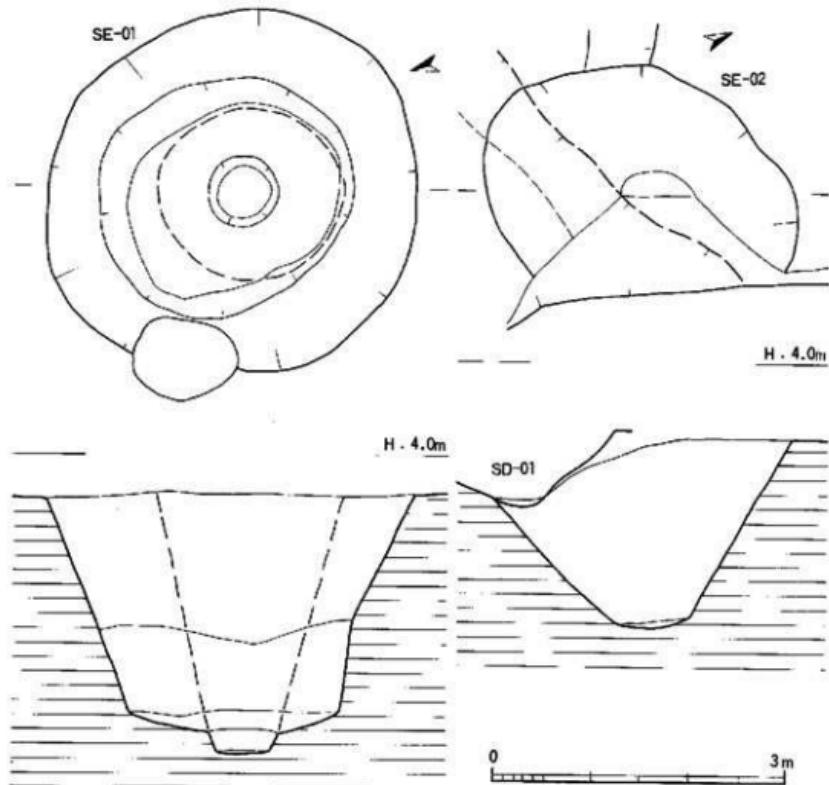


Fig.47 SE-01・02実測図 (1/60)

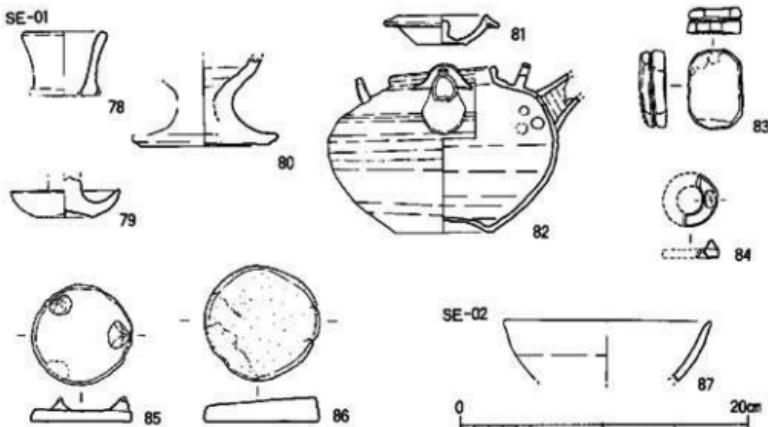


Fig. 48 SE-01・02出土土器実測図(1/4)

6) 井戸口

井戸は中・近世期のものを2基検出した。調査区北部のやや高所に並列してあり、平面形は円形を呈する。このうち1基は井筒を用いたものである。

SE-01 (Fig. 47 PL. 23)

調査区の北西部で検出した井戸址で、ST-16・SD-07や方形周溝墓と重複し、最も新しい。平面形は直径3.7~4.0mの指円形を呈し、掘り方は二段掘りになる。壁面は深さ2.3mまで逆円錐状に窄まって一旦レンズ状の底面を作り、さらに中央部が径70cmの円形に深さ25cmまで掘り下げている。井戸底面の標高は0.9m。この壁面にはうすい灰色粘質土の堆積層があり、井筒にはうすい曲げ物状の桶を用いたものと推測される。井筒底上方の造構確認面では直径190cmの円形をなす。覆土中の遺物は弥生~古墳時代の甕・壺・坏のほか中・近世の瓦質土器・陶磁器や銅鏡（寛永通宝：88・89）がある。

出土遺物 (Fig. 48・49・52・53 PL. 28・29)

灯明皿 (78・79) 78は土師質の筒部である。接合面ではがれ、その部分に糸切り痕が残る。ヨコナデ調整で、胎土は精良。79は陶器。底部を除いて不透明の濃いペーチュの釉がかかる。

陶器 (80~82・84~86) 80は陶器瓶で無釉。81・82は陶器の土瓶である。蓋上面と体部上半に半透明の黄味を帯びた釉がかかる。体部上半にはいわゆる「飛びがんな」調整がみられ、底部には煤が付着する。84~86は陶器のハマである。84はドーナツ状の台座に突起状の目が付きクロクロ整形される。目は3つであろう。85は円盤状の台座に目が3つ付く。86はかなり砂粒



Fig. 49 SE-01出土銅鏡拓影(2/3)

を含む赤茶色の粘土を円盤状に焼いたもの。85・86とも手捏ね整形される。いずれも近世以降のものである。

土製品 (83) 瓦の再加工品である。まわりに溝を削り込んでいることから鍤として使用された可能性が強い。長さ5.4cm、幅3.8cm、厚さ1.7cm。

土鍤 (112・113) 管状の土鍤である。112は小型で長さ4.3cm、重さ5.6g。113・114は中型土鍤で、一端が欠失している。

硯 (122) 硯尻部の破片で、硯面は平坦である。縁部は欠失する。

SE-02 (Fig. 47 PL. 23)

調査区の北東部で検出した素掘りの井戸址で、東半は調査区外にのびる。SD-01・07と重複し、古い。平面形は径約2.8×3.4mの楕円形になろう。壁面は逆円錐形に窄まり、深さは2.0mで底面にいたる。底面の標高は1.25mである。覆土中からは弥生から中世までの壺・甌・皿・碗等の遺物が出土しているが、量的には少ない。

出土遺物 (Fig. 48・52 PL. 29)

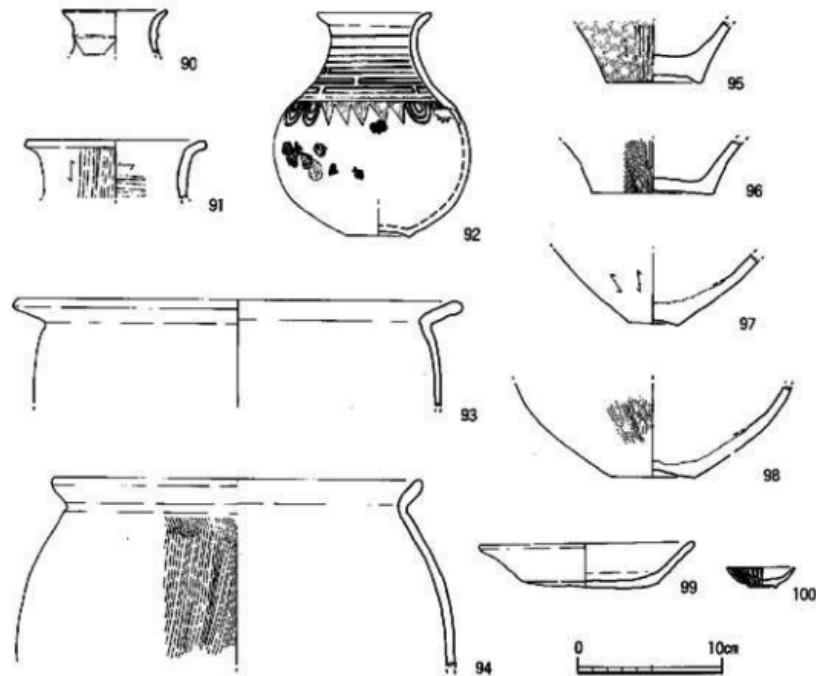


Fig.50 包含層出土土器実測図(1/4)

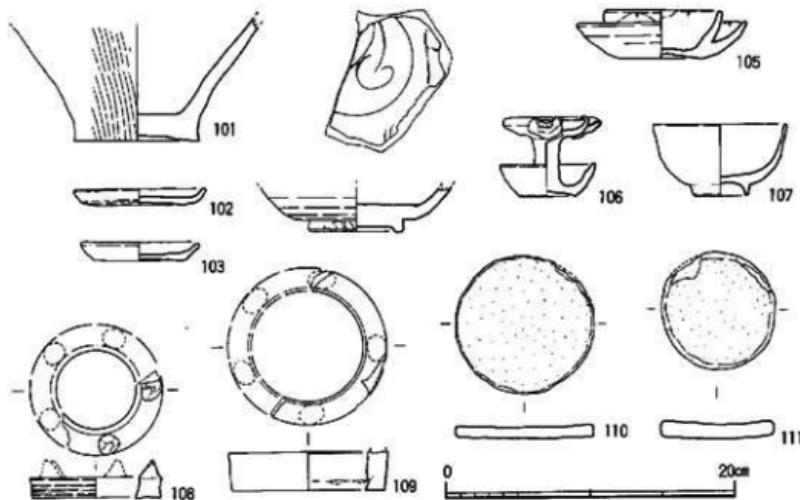


Fig.51 横乱塚出土土器実測図(1/4)

瓦器碗(87) 口径は14.2cm。口縁端部が他の部分より黒っぽい色を呈する。内外面とも亂雜な研磨を施す。

土鉢(114) 管状の上鉢である。現長7.2cmを測る中型品で、一端が欠失している。

7) 包含層出土の遺物

調査区全域には弥生～中・近世の遺物を含む茶褐色砂の遺物包含層が10～20cmの厚さで堆積していた。また、近代の擾乱塚には遺物包含層から混入したものも含まれている。

出土遺物 (Fig. 50～52 PL. 28・29)

90～100は遺物包含層のものである。

壺形土器(90～92・97・98) 90は口縁端が先細りになり、口縁下に小さな段を有する。外面をヨコナデ調整し、内面は横方向に丁寧なヘラナデを施す。黄褐色の精良な胎土で焼きも良い。頸部には彩文が施されている。91は口縁端部をヨコナデし、他の部分は研磨する。小砂粒を多く含んだ黄褐色の粗い胎土である。92は口径7.8cm、器高15.9cmを測る完形品である。球形の胴部に上げ底の小さな底部がつくもので、頸部とやや肩のはった胴部上半には重弧文や鋸歯文からなる彩文が描かれている。97・98は底部である。97は外面を縱方向に研磨し、内面はナデ調整する。黄褐色の粗い胎土である。98は外面をハケ目調整後、ナデ調整、内面を稚にナデする。黄灰色の粗い胎土である。90・92は弥生時代前期、91は前期末～中期初頭。97・98は中期後半～末。

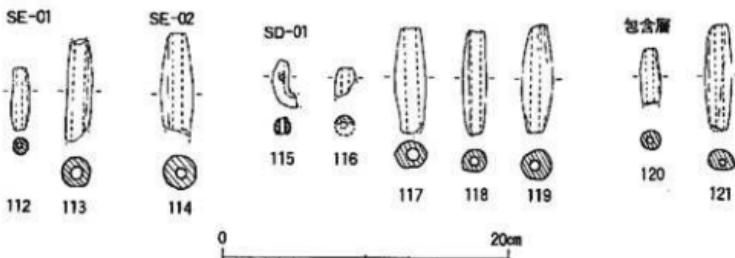


Fig. 52 土製品実測図(1/4)

変形土器 (93~96) 93・94は口縁部が「く」字状になる。93は口縁付近をヨコナデ、他はナデ調整する。赤褐色の粗い胎土である。94の調整は口縁付近をヨコナデ、胸部外面をハケ目、内面はナデ。灰褐色の精良な胎土である。95は外面を縦方向に研磨し、丹を施す。内面はナデ調整。白色砂粒を少量含むが赤褐色の精良な胎土で焼きもいい。96は外面をハケ目、内面をナデ調整する。93は中期末、94は後期初頭。95・96は中期後半~末。

土師皿 (99) 口径14.8cm、底径9.2cm、器高3.2cmの糸切りの上師皿である。内底はナデ仕上げする。底部は板状痕が残る。

紅皿 (100) 口径4.8cm、底径2.0cm、器高1.3cmの磁器の紅皿である。淡青色の不透明釉が体部中位までかかる。

101~111は攪乱層出土である。

変形土器 (101) 底部で、外面は粗いハケ目、内面はナデ調整する。粗砂粒を多く含む。

上師皿 (102・103) 糸切り底の上師皿である。口径は102が9cm、103が8.1cm。底径は大差がないが、器高は102の方が低い。また、102は内底をナデしているが、103は内底もヨコナデ調整。

陶磁器 (104~111) 104は龍泉窯系青磁碗で、器内に片切形で文様を描く。灰ページュの緻密な素地に半透明の灰オリーブ釉が疊付までかかる。105~106は灯明皿である。106は注口部には、炭化物の付着がみられる。107は小碗である。うすいページュの精良な胎土で粘性の強

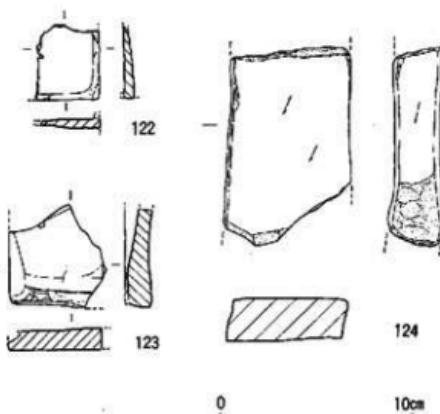


Fig. 53 石器実測図(1/3)

い不透明な灰白色の釉がかかる。曼付の釉は搔き取られる。108-111はハマである。108・109はドーナツ状の台座に目のつくものでロクロ整形されている。

いずれも目は5つであろう。110・111は小砂粒を多く含む粘土を手捏ね整形して焼いたものである。器面の表裏とも砂粒を多く散らしている。これらの窯道具は、当地近くに開かれた高取焼に関連するものと思われる。

土鍤 (120・121) 管状の土鍤である。120は現長3.9cmの小型品で、一端が欠失している。121は長さ7.3cmの中型品で、重さは17.4g。

砥石 (124) 端部を欠く砥石で現長は10.3cm。底面は4面あり、中央部が凹む。

3. 小 結

1912(明治45)年の島田寅次郎氏による三角縁二神竜虎鏡を副葬した「藤崎古墳」の発見が藤崎遺跡周知化の端緒となり、その後、方格渦文鏡の副葬された箱式石棺墓や三角縁二神二車馬鏡を副葬した方形周溝墓群が発見されるによんで早良平野における藤崎遺跡の重要性が一層付加されるに至った。

第13次調査区は、国道202号線沿いの古砂丘尾根の南側緩斜面上にあたり、第2次調査区の東隣に位置する。検出した遺構は弥生時代前期から後期の豪棺墓や箱式石棺墓・方形周溝墓からなる墳墓群と中世の溝と井戸で、これまでの調査成果を補完するものである。

1) 彩文土器について

彩文土器 (Fig. 54) は、調査区北西部の西壁中より土層観察中に検出した完形の小型壺である。口径7.8cm、底径4.4cm、器高15.9cm、胴部最大径13.5cmを測る。胴部にはネズミなどの歯齒類にかじられた跡が多く残り、胴部中位には長さ3cmの細長い穴が横方向にあいている。口縁部の屈曲は強く、頸部との境には棱がつく。口縁部は丸くおさめる。胴部は若干肩の張った球形をなし、上げ底の小さな底部がつ

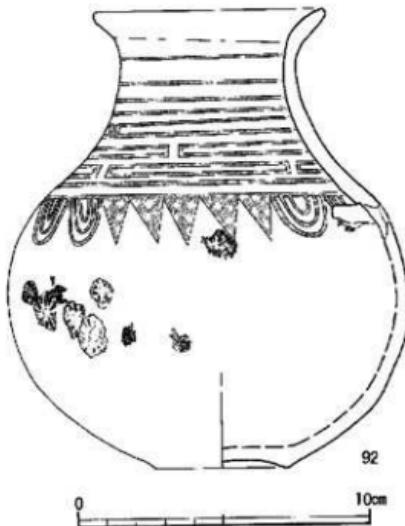


Fig.54 包含層出土彩文土器実測図(1/2)

く。内面には胴部と頸部との接合部に明瞭な段を有する。調整は口頸部内面から外底までは横方向の丁寧な研磨を施し、内面はナデ仕上げする。淡茶褐色の精良な胎土で、焼成は堅密である。胴部中位に黒班が2ヶ所認められる。口頸部から肩部には赤色顔料による彩文を施しているが、風化によりかなりの部分が剥げ落ちている。しかし、文様は外腹全体にカーボン状の黒色顔料を塗布した上に赤色顔料で彩文を描いている。そのために彩文が剥落した後も下地である黒色顔料が部分的に文様状に残り、彩文の大要は復原できる。彩文は、口縁部、頸部、肩部に分かれる。まず、口縁部は幅広く帯状に塗布する。次いで、頸部は上部と最下位に圓線を巡らし、その間に横形流水文を配する。頸部と胴部の境に巡る圓線を隔てて肩部には三重の下向きの重弧文が3個、それに連続して5個の鋸歯文、そしてまた重弧文が1個つづく。器面の風化が進んでいるため反対側の文様は知り得ないが、連続する重弧文中に5個の鋸歯文を配するものであろう。底部や口縁部から肩部の形状は夜臼式土器的色彩を強く窺わせる。連続する重弧文のなかに鋸歯文を配することを除けば、その形状および文様構成は東に隣接する第4発見地出土の小型壺とはほぼ同じである。

いわゆる彩文土器等の小型壺が斎棺墓や土塚墓等の墳墓に副葬されるのは弥生時代前期のことである。斎棺墓に小型壺が副葬されるのは、斎棺が大型化する前中期のいわゆる金海式期である。一方、それ以前は前原町志登支石墓群、筑紫野市道場山遺跡第2地点や夜須町沼尻遺跡例等のように土塚墓に副葬されることが一般的に多い。本地点の小型壺は調査区壁面の清掃中に発見した。遺構の面的な確認はできなかったが、深さ50cmほどの落ち込みの肩部に口縁を上にしてやや内傾して出土し、土塚墓に副葬された小型壺と考えて差し支えあるまい。東接する第4地点出土の彩文土器もおそらくは土塚墓に副葬されたものである可能性がたかく、本調査区周辺には土塚墓を主体とする前期初めの一派の墳墓域が展開していたものと思われる。

2) 墳墓群について

今次調査で検出した墳墓は、斎棺墓31基、箱式石棺墓1基、方形周溝墓1基で調査区北側の歩道下の1基を加えると石棺墓は2基になる。また、明確な土塚墓は確認できなかったが、SK-03が土塚墓と考えられよう。

このうち斎棺墓は、弥生時代前期から後期初頭まであり斎棺墓の盛行する弥生時代全期に亘るが、中期のものが主体となる。森編年案に従えば、城の越式から須玖・立岩式まであるが中期後半の須玖・立岩式期が主体となる。まず前期にはST-01が出現し、あいだをおいて中期初頭（城の越式）にはST-14・23・25の一派がある。次に中期後半（須玖式）のST-09・15・18・21・22・24の一派がつづくが、ST-15・18等は古い要素をもち汲田式の影響がつよく残る。さらに中期後葉～末（立岩式）のST-16・28がつづき、大きくは4時期に区分できるが、中期以降は連続的な造墓活動がなされている。

本調査区内の墳墓群は、まずはじめに彩文土器等を副葬する土塙墓群が前期初頭に出現し、つづいて前期から後期初頭まではほぼ全域に壺棺墓群が展開する。さらに後期前葉以降は箱式石棺墓と方形周溝墓がつづく。

藤崎遺跡群全体についてみると、弥生時代前期には壺棺墓や土塙墓が、第1次調査区西半部から第2次調査区の北半部と第13次調査区の西北部にかけての古砂丘尾根中央部の東西90m、南北50mの狭い範囲に墓域をつくり、数量的にも少ない。次の中期になると壺棺墓の数は急激に増大し、その分布も古砂丘の尾根筋に沿って東西200m、南北60mの広範な拡がりを示すが、第1次調査区西半部から第2・7・13次調査区にかけての藤崎遺跡群南西部、古砂丘南側緩斜面が墓域の中心となる。さらに退潮期の後期になると壺棺墓の数は激減し、その分布も第12次調査区を東限とし、第1次調査区西端を西限とする壺棺墓群の南縁に沿って弧状にわずかな拡がりを示すにすぎない。また、箱式石棺墓も本調査区例の2基のみであることから、限られた範囲に墓域を作るものであろう。さらに古墳時代前期にいたると方形周溝墓が出現するが、その分布は第3次調査区を中心とする遺跡群の西北部に古砂丘尾根上へと移行する。しかし、これが単に壺棺墓群との重複を避けた占地上の理由によるものか、あるいは墳墓群を構成する集団の不連続性に起因するものかは判断し難い。壺棺墓の詳細な編年的検討とともに墳墓群の時間的差異による展開のあり方を明かすことが今後の課題であろう。

〈藤崎遺跡関係文献〉

- 島田寅次郎「藤崎の石棺」 1925 福岡県史蹟天然記念物調査報告書 第一輯
 中山平次郎「古支那鏡鑑沿革(二)」 1918 考古学雑誌第9卷第3号
 水倉松男、鎌山猛「筑前国藤崎に於ける弥生式遺跡」 1931 考古学雑誌第2卷第1号
 浜石哲也編「高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 藤崎遺跡」 1981 福岡市教育委員会
 鎌山 猛「壺棺累考(二)」 1953 史淵 第55輯
 浜石哲也編「藤崎遺跡」 1982 福岡市教育委員会
 井沢洋一編「藤崎遺跡Ⅲ」 1986 福岡市教育委員会
 井沢洋一編「藤崎遺跡Ⅵ」 1986 福岡市教育委員会

V 第14次調査

1. 調査の概要

本調査は、福岡市早良区高取二丁目140・141番地にあり、古砂丘上に拡がる藤崎遺跡群の東南部に位置する。1977（昭和52）年の高速鉄道工事に伴う第1次調査以来、今次で第14次目の調査にあたる。

調査区周辺の地形は、古砂丘の後背斜面が一名栄山という花崗岩からなる独立丘陵の北端と接する地点にあたり、元来は緩やかな斜面上に位置していたものと思われるが、近年の住宅化による開削のためその旧状はほとんど留めていない。本調査区の西隣には1988（昭和63）年5月に調査された第12次調査区があり、さらに西方には第11・8・10次調査区がつづき、弥生時代の甕棺墓群や古墳時代の方形周溝墓、中世の溝、井戸址等が検出されている。このため東につづく当該地にもこれらの遺構が拡がることが予見されていた。

1988（昭和63）年5月、当該地における開発申請が内山潔氏より提出されたが、すでにテナントビルの建設計画が進行していたため記録保存の止むなきにいたり、1988（昭和63）年6月

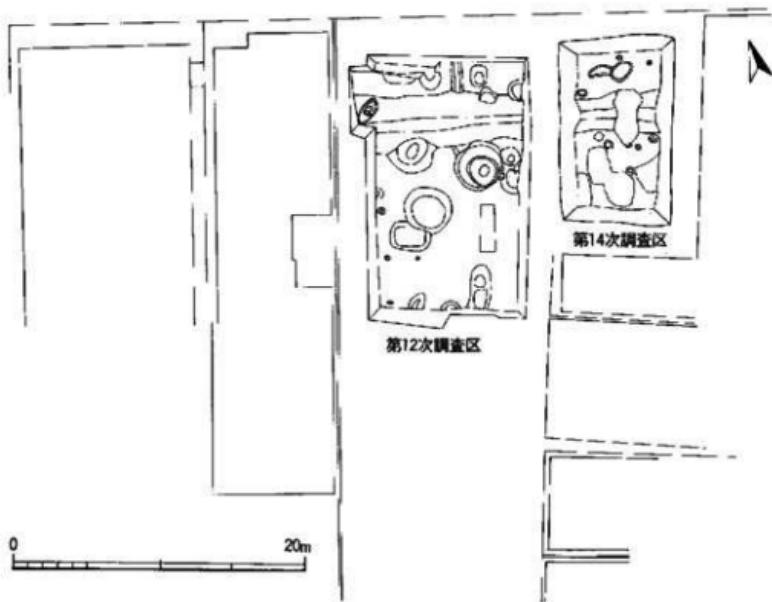


Fig.55 第12次・第14次調査区周辺現況図(1/400)

18日～25日に発掘調査した。調査区は建物部分に沿って設定したが、隣接するビルとの間をとり、かつ崩落防止のために壁面に緩やかな勾配をとったために、開発面積173m²にたいし、調査区上面で102m²、下面では62m²を調査したにすぎない。

発掘調査の結果、現地表下から70～80cmまでが数層の客土層で、その下層は暗褐色砂が20～30cm厚さで堆積し、その下が遺構のる古砂丘の黄白褐色砂になる。この黄白褐色砂面は南の丘陵部へむかって緩やかな傾斜をしており、周辺調査の成果と一致するものである。遺構面上に堆積する暗褐色砂層には高取焼きをはじめとする近世陶器が少量ながら含まれる。

検出した遺構は、溝1条、土壤2基と柱穴である。調査区南側は擾乱が著しいため遺構はなく、北側に分布する。このことも周辺調査の所見と一致するところで丘陵に隣接する砂丘背部は遺構が希薄になる。このことは藤崎遺跡群における中世期の集落の在り方を知る上でひとつの指標となろう。

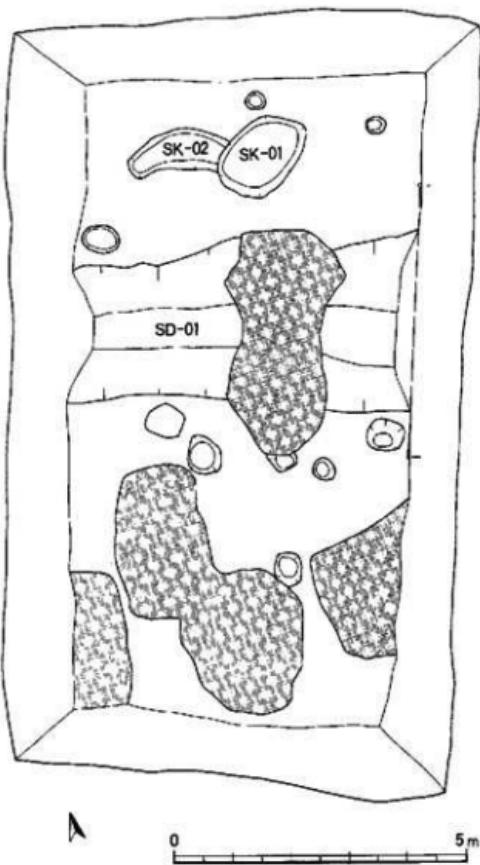


Fig.56 第14次調査区遺構配置図(1/100)

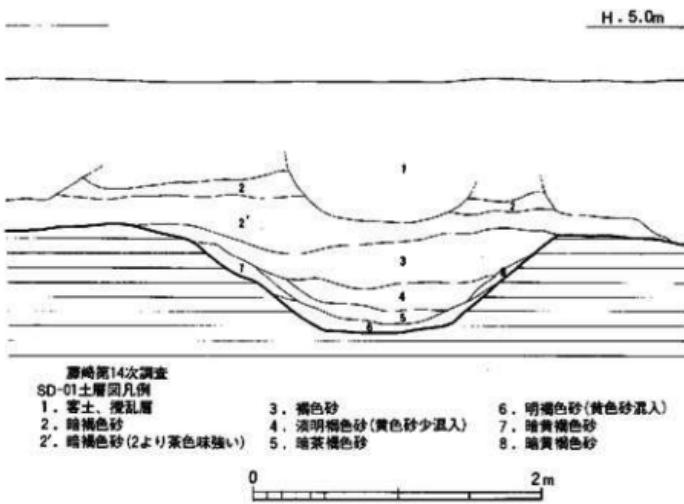


Fig. 57 SD-01 土壠断面図 (1/40)

2. 調査の記録

1). 溝

溝は調査区の北側で1条検出した。西に接する第12次調査区では3条の東西溝が折重なって検出されており、その第1号溝につながるものである。

SD-01 (Fig. 56・57 PL. 30)

調査区のはば中央で検出した、東西方向に直線的にのびる溝である。溝幅は2.3~2.8m、深度は65cmを測る。断面形は逆台形を呈し、底面は浅い凹レンズ状をなす。第12次調査区の第1号溝につづき、さらにその西は第11次調査区の3号、第8次調査区の2号溝、第10次調査区の3号溝へとつづくもので、その総延長は60m余になる。覆土は基本的には4層 (Fig. 57) よりなり、上から(3). 棕色砂、(4). 淡明褐色砂、(5). 暗茶褐色砂、(6). 明褐色砂が凹レンズ状に堆積している。

覆土中からは1点の遺物も出土していないが、覆土の状況及び近隣調査区の成果から中世期はじめに求められよう。

2). 土壙

土壙は調査区の北側で2基検出した。土壙はいずれも削平を受けて浅く、出土遺物もないためにその時期や性格等は明確でないが、覆土等の状況から南接する溝（SD-01）と同時期のものであろう。

SK-01 (Fig. 58 PL. 30)

調査区の北側にあり、SD-01の北60cmの距離にある。西側はSK-02と重複し、これよりも新しい。平面形は長軸155cm、短軸110cmの菱形に近い隅丸長方形を呈する。全体に削平を受けているために深さは20cmと浅い。底面は平坦で北方へ緩く傾斜する。覆土は淡灰色砂で中央部には淡黒色砂が堆積している。

覆土中からの出土遺物が1点もないために明確な時期は決定はできないが、中世のものであろう。

SK-02 (Fig. 58 PL. 30)

調査区の北側にあり、SD-01の北に隣接している。東側はSK-01に切られている。平面形は弧状の梢円形をなし、現長170cm、最大幅70cm、深さは10~15cmを測る。底面は平坦であるが、北へむかって急に傾斜するために壁面は南側が緩いが、北側はやや急峻に立ち上がる。覆土は淡茶褐色砂である。

遺物は1点もなく、その時期は明確でない。

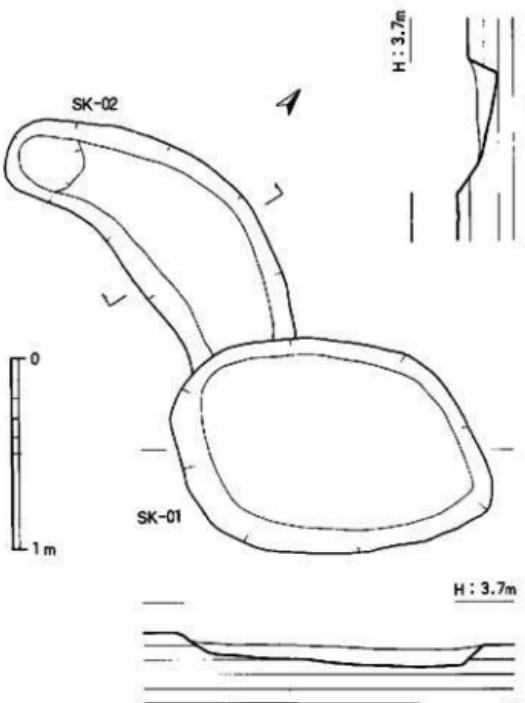


Fig.58 SK-01・02実測図(1/30)

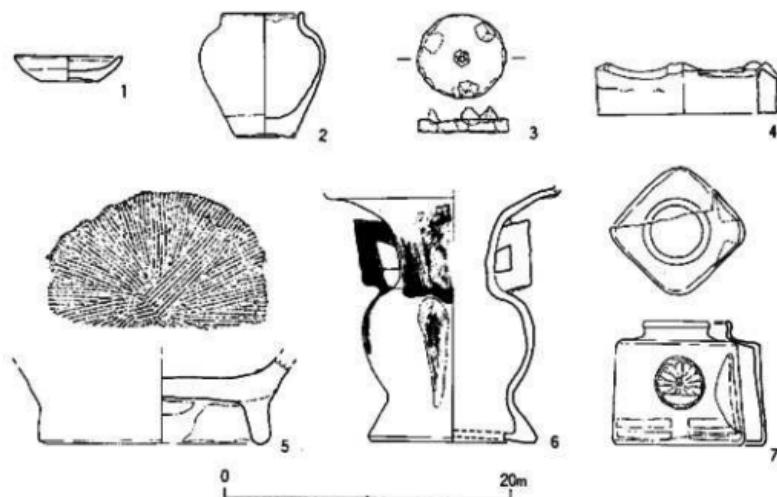


Fig. 59 包含層出土土器実測図(1/4)

3). 包含層出土の遺物

遺構面上には厚さ20~30cmの暗褐色砂が調査区全域にわたって堆積しており、この中には高取焼をはじめとする近世遺構の陶磁器が包蔵されていた。また、調査区内の擾乱層からも遺物包含層より混入したと思われる近世陶磁器が出土している。

出土遺物 (Fig. 59)

1は陶器の小皿である。外底から体部中位は回転ヘラケズリであるが、他はすべて丁寧にヨコナデされる。茶味を帯びた灰色の精良な胎土で焼きも良い。内面には半透明の茶オリーブ色の釉がかけられ、口縁付近の釉は拭き取られている。口縁端部に炭化物が付着していることから灯明皿として使用されていた可能性が強い。2は陶器の小壺である。口縁部内側から胴部中位にかけてヨコナデ調整、胴部下半から外底までを回転ヘラケズリ調整する。内面はナデ仕上げされる。灰色の緻密な胎土で、焼成も良好である。口縁部内側から胴部下位まで半透明の灰オリーブ色の釉がかかるが、口縁端部の釉は搔き取られる。また口縁付近には目砂が付着する。3・4はハマである。3は小砂粒を多く含んだ灰褐色の粘土を円盤形に整え、火の通りを良くするために中央を穿孔し台座としている。目は淡褐色の精良な磁胎で、3個貼りつけているが、うち1個は欠失している。4は小砂粒を少量含んだ灰褐色の粘土をドーナツ状にし、上面に山形の突起をヘラケズリによって作り出している。突起は6個あったと思われるが、2個しか残っておらず、その先端部も欠損している。焼きはよく堅緻である。5は陶器のすり鉢である。長

石や石英砂粒を多く含んだやや粗い淡褐色の胎土に暗褐色の不透明釉がかかる。高台内には露胎部分がある。内底には輪状に目砂の付着がみられる。未使用の可能性が高い。6は磁器の花瓶である。頸部から口縁部にかけてラッパ状に大きく広がり、頸部には1対の把手がつく。把手は粘土貼付後、中央部をくり抜き、ケズリやナデ調整によって方形に整形している。胴部は球形を呈し、脚部は据広がりとなる。内面には頸部と脚部に絞り痕が認められる。灰白色の極めて精良な胎土で焼きしまっている。全体に半透明のオリーブ色の釉をかけた後、外底部のみ釉を搔き取る。上半部には黒釉が流しがけされる。7は陶器の旧国鉄製茶入れである。口径部は円形であるが、胴部位下は方形を呈す。胴部の一つの角は両側がへこみ、把手状になる。型づくりで、薄手に整形される。型の合わせ目は明瞭で、バリは削り取られている。胎土は精良で淡赤褐色を呈し、焼きは軟質である。暗褐色の不透明な釉がほど外底付近までかかる。内面には露胎部がある。

以上の遺物はいずれも近代のもので、隣接する高取焼窯と関連が深い。

3. 小 結

第14次調査では、中央で東西方向の溝1条、その北で土壤2基と柱穴を検出した。本調査区のこの溝（SD-01）は第12次調査区の1号溝につづくもので、さらに西の第11・8・10次調査区の溝へ直線的につながる。また、第8・11次調査区で交差し、これに並行する溝は本調査区では検出されず、第12次調査区を境として北へ屈曲してのびるものであろう。本調査区検出の遺構は遺物がなく明確な時期は決定はできないが、西隣の第8・10～12次調査区の成果によれば消極的ながら中世の初め、13世紀中頃が求められよう。なお、この溝のもつ性格も明確にしがたいが、本調査区の北に拡がる百道浜を東西にのびる元寇防壁と並行することから、これの二次的防御施設の可能性も指摘されており、今後のデータ集積とともに詳細な検討が必要であろう。

また、調査前に予想された壺棺墓は検出されなかった。西隣する第12次調査区では東北端で後期のものが1基検出されている。さらに西方へつづく第11・8・10次調査区でも北辺に沿って拡がり、西へいくほど南方に広く展開する。一方、北の古砂丘尾根上に立地する第1次調査区では本調査区の北50mにある壺棺墓をその東限とし、西方ほど濃密に分布する。このことから藤崎遺跡群の弥生時代壺棺墓群は第1次調査区の東端と第12次調査区東北端の壺棺墓を結ぶラインをその東限とし、第2次調査区東南端を西限とするものである。この中で、古砂丘後背の第7・2・13次調査区周辺から第1次調査区西部にかけてが最も濃密に分布し、壺棺墓群の中心となっていたものであろう。

付論

「藤崎遺跡第13次調査出土の弥生時代人骨について」

中 橋 孝 博

九州大学医学部解剖学教室第2講座

藤崎遺跡第13次調査出土の弥生時代人骨について

中橋 孝博

九州大学医学部解剖学教室第2講座

福岡市の西城、博多湾に面した藤崎一帯のかつての砂丘上に古く墓地が営まれていたことは、1912年の箱式石棺（藤崎古墳：三角縁二神龍虎鏡、素冠頭太刀を出土）の発見によって既に明治の昔から知られていた。その後も、幾度か種々の埋葬遺構、遺物が出土していたようだが、1977年からは地下鉄工事に伴って本格的な発掘調査が開始され、この地域が弥生時代を中心に古墳や中世に到る多彩な遺構、遺物を含んだ、かなり広大な遺跡（東西400m弱、南北300m余り）であることが明らかにされてきた。現在まで既に十数次に亘る調査が重ねられており、その間、弥生時代の甕棺墓だけでも12次調査までに200基、人骨資料の出土もまた40体近くに上っている。1988年夏、当地においてビル建設に伴う第13次発掘調査が実施され、新たに31基の甕棺と12体の弥生人骨が出土した。残念ながら人骨の保存状態が悪く、当遺跡の弥生人の形質を窺うに十分な資料とは言い難いが、貴重な追加資料となるものであり、以下に知り得たところを概括する。

遺跡・資料・方法

今回の調査区は福岡市早良区高取2丁目に位置する、約300m²の区域である。1988年夏、当地でのビル建設工事に伴う第13次発掘調査が実施され、古砂丘上に営まれた弥生墓地より、計31基の甕棺が出土した。

所属時代は弥生時代の中後期を主体として、前期から後期初頭に到る時期のものとされている（詳しく述べ参照）。その内、12基より出土した人骨を表1に一覧する。成人11体（男性5体、女性3体、不明3体）、幼児1体であるが、弥生時代中期、それも後半に属するものが殆どを占める。

保存状態は全体的に不良のものが多い。大半は小片を残すのみで、一応全身の特徴を知り得たのは、ST-21号男性人骨1体のみに留まった。以下、この21号人骨を中心にその形質についての検討を加えることとする。

なお、計測は Martin-Saller (1957)、鈴木 (1963) らに従い、性判定には保存不良骨に対する筆者ら (Nakahashi & Nagai, 1986; 中橋, 1988) の方法を随時援用した。

計測・観察結果

1. 頭蓋

S T - 10、21、28号人骨で得られた計測値を表 2 に示す。また表 3 には、男性人骨について、比較のため他集団の計測値を併せて示した。

1-1. S T - 10号 (女性・成年)

脳頭蓋はほぼ原型を保ち、一部の計測値も得られたが(表 2)、顔面部は上、下顎の一部を残して欠損している。

頭最大長(179mm)は比較的大きく、北部九州弥生人の平均(177mm:中橋・水井、1989)を上回っているが、最大幅(135mm)は狭く、その為、長幅示数は75、4とやや長頭傾向を見せる。水平周(512mm)は北部九州弥生人の平均に一致し、現代人はもとより、縄文(津雲:506mm)を含む他の古入骨集団を上回る傾向を見せるが、横弧長(301mm)は頭幅の狭さに対応してやや短い。全体的にみて、北部九州地方の弥生人の一員としてはやや大きめで、長頭に頗る特徴を持った脳頭蓋と言えよう。

なお、上顎は不明ながら、下顎に抜歯の痕跡は認められない。

表1 薩摩遺跡第13次調査出土人骨

番号	時代	性	年齢	保存状態*	備考
S T - 05	弥・中末	♂	熟年	△	
-09	弥・中後	?	成人	▲	
-10	弥・中末	♀	成年	△	
-14	弥・中初	♂	熟年	▲	抜歯ナシ
-15	弥・中後	♂	成人	▲	
-20	弥・後初	♀	成人	△	
-21	弥・中末	♂	熟年	○	抜歯ナシ
-22	弥・中後	?	(成人)	▲	
-23	弥・中初	?	成人	▲	
-24	弥・中後	♀	成年	▲	抜歯ナシ
-28	弥・中末	♂	熟年	△	
-31	弥・中	?	幼児	▲	2歳前後

* ○: 保存良, △: 不良(一部計測可), ▲: 小片のみ

表2 藤崎遺跡第13次調査出土弥生時代人頭蓋計測値

	男	性	女	性
	S T - 21	S T - 28	S T - 10	
1 頭蓋最大長	184	178	179	
8 頭蓋最大幅	145	—	135	
17 Ba-Br 高	—	—	—	
8/1 眼長幅示数	78.8	—	73.4	
9 最小前頭幅	100	98	93	
23 頭蓋水平闊	532	—	512	
24 側 頭 高	313	(302)	(301)	
25 正中矢状高	—	368	—	
43 上 頭 幅	109	110	101	
44 両眼窓幅	103	—	—	
45 頭骨弓幅	144	—	—	
46 中 頭 幅	96	—	—	
47 離 高	116	—	—	
48 上 頭 高	72	—	—	
47/45 頭示数 (K)	80.6	—	—	
47/46 頭示数 (V)	120.8	—	—	
48/45 上顎示数 (K)	50.0	—	—	
48/46 上顎示数 (V)	75.0	—	—	
51 眼窓幅 (左)	43	44	—	
52 眼窓高 (左)	35	32	—	
52/51 眼窓示数 (左)	81.4	72.7	—	
54 鼻 幅	26	—	—	
55 鼻 高	53	—	—	
54/55 鼻 示 数	49.1	—	—	
72 全頭面角	92	—	—	
74 齒槽側面角	77	—	—	
69(3) 下顎体厚 (右)	31	—	—	
71 下顎技幅 (右)	13	—	—	
	33	—	—	

表3 主要頭蓋計測値の比較 (男性)

	藤崎13次 (弥生)			北部九州 ^b (弥生)			山 口 ^c (弥生)			西北九州 ^d (弥生)			広 田 ^e (弥生)			津呂・吉野 ^f (現代)			西南日本 ^g (現代)		
	ST - 21	ST - 28	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M			
1 頭蓋最大長	184	178	118	183.7	61	182.9	21	182.8	26	166.0	60	184.2	108	181.4							
8 頭蓋最大幅	145	—	117	142.4	66	142.0	20	144.9	25	147.2	62	144.9	108	139.3							
17 Ba-Br 高	—	—	101	137.2	45	135.2	15	134.6	17	130.7	26	135.5	108	139.3							
8/1 頭長幅示数	78.8	—	104	77.7	59	77.8	20	79.2	25	89.0	55	78.7	108	76.6							
45 頭骨弓幅	141	—	103	140.0	44	139.2	12	138.4	7	137.7	16	141.0	106	134.5							
46 中 頭 幅	96	—	114	104.7	46	104.2	17	105.0	10	99.6	31	103.8	107	99.9							
47 頭 高	(116)	80	123.8	27	121.4	14	117.1	11	109.9	25	115.7	66	122.2								
48 上 頭 高	72	—	114	74.8	38	72.7	17	68.1	12	62.9	28	66.3	92	71.8							
47/45 頭示数 (K)	80.6	—	71	88.4	24	86.8	12	84.6	7	79.9	10	80.4	64	91.4							
47/46 頭示数 (V)	120.8	—	74	118.4	27	115.4	14	111.8	9	111.2	18	110.4	65	122.2							
48/45 上顎示数 (K)	50.0	—	95	53.3	34	52.1	12	49.3	7	45.6	10	47.0	90	53.5							
48/46 上顎示数 (V)	75.0	—	105	71.5	37	69.4	17	64.8	10	63.7	22	63.1	91	71.8							
51 眼窓幅 (左)	43	44	89	43.2	39	43.6	15	43.1	9	43.4	40	43.2	108	43.0							
52 眼窓高 (左)	36	32	93	34.5	41	34.6	15	32.8	9	31.8	38	33.2	108	34.4							
52/51 眼窓示数 (左)	81.4	72.7	86	79.9	38	79.4	15	76.2	8	74.2	33	77.5	108	80.2							
54 鼻 幅	26	—	117	27.1	43	26.9	16	27.8	12	25.9	36	26.5	108	25.9							
55 鼻 高	53	—	116	52.8	41	52.8	16	51.0	12	45.5	30	48.1	108	52.2							
54/55 鼻 示 数	49.1	—	113	51.4	41	51.1	16	54.4	11	56.4	27	54.7	108	49.8							
72 全頭面角	92	—	85	84.5	31	85.5	15	82.0	7	84.1	19	81.5	92	83.8							
74 齒槽側面角	77	—	83	69.8	28	72.8	—	—	6	66.0	20	70.1	107	70.7							

^a: 広田 + 丸ノ半^b: 中橋 + 永井 (1989), ^c: 内藤 (1971), ^d: 清野・宮本 (1925), ^e: 金高 (1928), ^f: 原田 (1954)

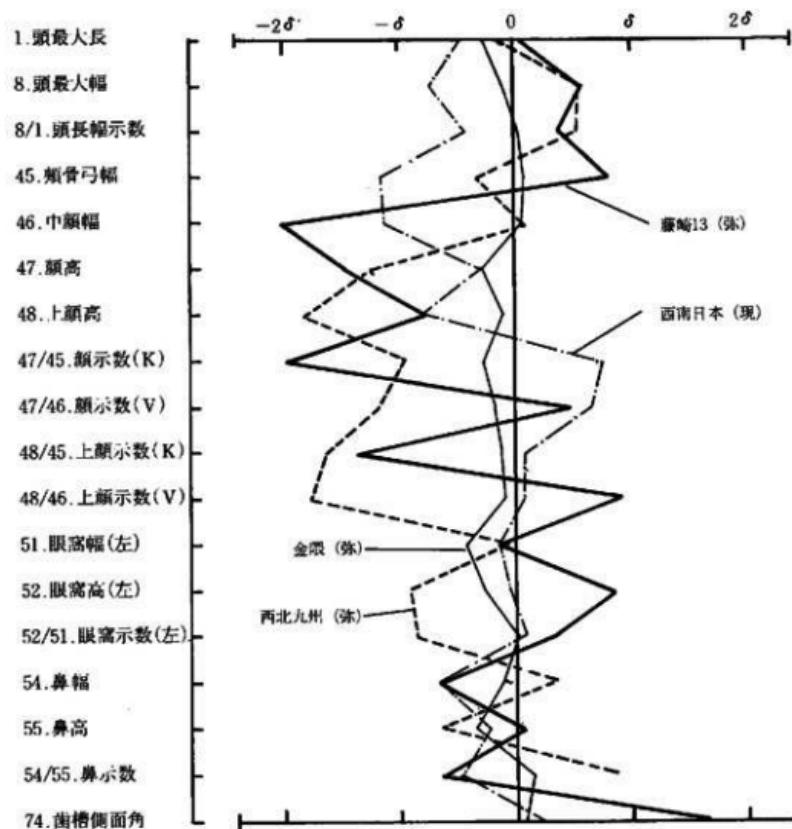


図1 北部九州弥生人を基準とした偏差折線

表4 上腕骨計測値の比較（男性、左）

	藤崎第13次		北部九州		山口		大友 ^a		津雲 ^b		九州 ^c	
	(弥生)	(弥生)	(弥生)	(弥生)	(弥生)	(弥生)	(弥生)	(繩文)	(繩文)	(現代)	N	M
	ST-05	ST-21	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
1 埃大長	—	—	22	302.6	29	305.3	11	291.4	15	283.3	106	295.3
2 全長	—	—	17	296.8	23	300.0	8	285.8	15	279.0	106	290.6
3 中央最大径	25	—	76	23.3	61	23.1	34	23.4	20	23.7	106	21.9
4 中央最小径	19	—	76	17.4	61	17.6	33	17.6	20	17.7	106	16.9
5 骨体最小周	69	61	81	63.9	66	63.7	33	63.5	21	64.7	106	61.8
6a 中央周	72	—	75	67.8	57	67.5	33	68.2	—	68.8	106	63.7
6/5 骨体断面示数	76.0	—	76	74.9	61	76.5	33	75.0	20	74.6	106	79.1
7/1 長厚示数	—	—	22	21.3	28	20.8	11	22.4	15	23.0	106	20.9

1) 松下 (1981), 2) 清野・平井 (1928), 3) 専頭 (1957)

表5 下肢骨計測値の比較（男性、左）

	藤崎第13次		北部九州		山口		大友 ^a		津雲 ^b		九州 ^c	
	(弥生)	(弥生)	(弥生)	(弥生)	(弥生)	(弥生)	(弥生)	(繩文)	(繩文)	(現代)	N	M
	ST-21	ST-28	N	M	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨												
1 最大長	—	—	60	430.9	37	434.4	15	420.1	11	415.2	59	406.5
2 自然位長	—	—	18	427.7	26	432.8	17	413.9	11	411.3	59	403.2
3 中央欠状徑	28	30	162	29.7	72	29.1	41	28.6	20	28.9	59	26.5
4 中央横徑	26	29	166	28.0	72	27.2	42	26.4	20	25.5	59	25.6
5 中央周	85	91	161	90.8	72	88.9	41	87.0	20	86.6	59	82.4
6 骨体上横徑	31	—	115	32.6	74	32.7	38	31.6	19	30.4	59	29.4
7 脊柱上矢状徑	24	—	115	26.2	74	26.0	38	25.2	19	24.8	59	24.3
8/2 長厚示数	—	—	18	21.4	26	20.5	16	21.4	11	21.1	59	20.4
6/7 中央断面示数	107.7	103.4	162	106.4	72	107.6	41	108.6	20	113.2	58	103.8
10/9 上脛骨断面示数	77.4	—	115	80.5	74	80.0	39	80.1	19	81.7	58	82.8
脛骨												
1 全長	—	—	27	345.6	19	350.5	10	345.3	10	337.0	61	320.3
1a 埃大長	—	—	52	350.5	21	356.9	11	354.8	10	343.0	60	326.9
2 中央最大径	—	—	74	32.0	36	30.6	43	31.0	21	31.7	61	27.8
3a 采養孔位最大径	37	—	153	36.5	60	35.7	35	34.5	19	34.7	60	30.6
4 中央横徑	—	—	75	22.9	36	22.3	43	21.4	21	19.7	61	21.1
5a 采養孔位横徑	21	—	153	25.3	59	25.1	36	23.3	19	21.5	61	23.7
6a 骨體周	—	—	74	86.5	36	83.6	41	83.4	20	82.5	62	78.4
7a 采養孔位周	93	—	151	96.8	58	95.5	34	92.6	19	90.7	61	88.9
10b 最小周	77	—	122	78.4	63	75.4	38	75.6	17	75.6	60	71.3
9/8 中央断面示数	—	—	74	72.2	36	73.0	43	69.1	21	62.4	61	76.1
9a/8a 采養孔位断面示数	56.8	—	152	69.5	59	70.5	35	67.7	19	62.0	60	77.5
10b/1 長厚示数	—	—	26	22.7	19	21.5	10	21.9	10	22.9	60	22.4
腓骨												
1 最大長	—	—	8	347.9	14	343.6	—	—	8	333.3	58	322.9
2 中央最大径	18	—	46	17.0	34	16.8	—	—	19	17.5	59	14.5
3 中央最小径	11	—	46	11.6	34	11.4	—	—	19	12.1	59	10.0
4 中央周	49	—	47	47.2	34	47.2	—	—	19	50.7	59	41.5
4a 最小周	—	—	24	39.7	25	40.1	—	—	18	41.8	59	35.6
3/2 中央断面示数	61.1	—	46	68.3	34	67.9	—	—	19	69.3	59	69.5
4a/1 長厚示数	—	—	8	11.0	13	11.8	—	—	8	11.8	58	11.1

1) 清野・平井 (1928), 2) 鑄錫 (1955)

1-2, S T-21号 (男性、熟年)

ほぼ全身骨が遺存しており、今回の出土例中では、その形質をほぼ全身にわたって検討できる唯一の資料である。頭蓋の計測結果を表2、3に、また北部九州弥生人を基準線とした偏差折線を図1に示した。

脳頭蓋：比較的大きく、頭高は不明ながら、頭長、頭幅は共に他の弥生人の平均をやや上回る傾向を見せ、比較群中ではむしろ津糸・吉湖の平均値に近い。頭蓋水平周（532mm）もそうした特徴を示しているが、ただ、横弧長（313mm）はそれほどでもなく、あるいは頭高は幾分低かった可能性も窺える。

顔面頭蓋：北部九州の弥生人としては、頬骨弓幅の大きさ（144mm）と、額高の低さ（116mm）が目立つ。幅径については、上顎幅（109mm）、両眼窩幅（103mm）とともに縄文人に比肩し得る広さを持っており、顔面上半部の幅径の大きさが顕著である。しかし、その一方で中顎幅（96mm）だけは逆に狹顎を特徴とする現代人に較べてもなお狭く、また、眼窩幅（43mm）や鼻幅（26mm）も北部九州の平均と同程度か、むしろ下回る傾向を見せる。

高径では、上述のように額高値が縄文人や西北九州弥生人に近い低さを示しているが、これには歯の摩耗やオトガイ高（31mm；北部九州の平均は35.7mm）の低さがかなり影響しているものと考えられ、上顎高（72mm）そのものは決して低くはない。北部九州の平均（74.8mm）よりは幾分下回っているものの、縄文人よりは明らかに高く、額高や鼻高値も近在の弥生人に似てやはり高い。ちなみに Kollmann の上顎示数（50）は北部九州の平均より低いが、Virchow のそれはかなり上回っている。また鼻根部の陥凹は弱く、鼻根弯曲示数は87.7と、これも北部九州弥生人の平均（88.5）に近い。なお、以下の歯式に見るように、一部に不明の部分があるが、隣接部の歯槽の状況などからみて抜歯はされていないものとみなされる。

/○M○○C I ₁ ○	○/○○○○○×
×○M ₁ P ₁ △C I ₂ ○	○○○△//

(○：歯槽開放、×：歯槽閉鎖、//：欠損、△：歯根のみ)

1-3, S T-28号 (男性、熟年)

左側頭部、及び顔面左半にかなりの欠損があるため、計測部位が限られ、その正確な特徴はつかみ難いが、残存部でみると、かなり筋張りの強い男性であったことが窺える。眉間部は強く膨隆し、眼窓上縁から頬骨、上顎骨にかけての骨質も厚く頑状で、乳様突起を始めとする各筋付着部の発達も非常に良好である。

計測値では、頭長（178mm）がかなり短いが、その上面観において、さほど短頭傾向は認められない。また眼窓がかなり低く、低眼窓型となっている。なお抜歯の有無は不明である。

2、体部骨

一部得られた計測値を、比較群と共に表4、5に示す。

2-1. 上肢骨（表4）

ST-5号の上腕骨は、骨幹部の諸計測値がいずれも比較群を上回っており、筋付着部の発達も良好でかなり頑丈な特徴を見せている。しかしもう一つのST-21号は逆にやや細く、傾向を異にする。なお、5号の骨体断面形状に、扁平性は認められない。

2-2. 下肢骨（表5）

ST-21号：上腕骨と同様、やや華奢な傾向を見せている。大腿骨の骨体諸径はいずれも北部九州弥生人の平均を下回っており、胫骨、腓骨についても同様な特徴が窺える。また、大腿骨の断面型については、近在の弥生人に類似してさ程の柱状性は見られないが、胫骨は著しく扁平で、その断面示数(56.8)は扁平胫骨で知られる純文人の値(62.0)を下回っている。

ST-28号：その大腿骨は、頬蓋で見た傾向と軌を一にして、やはりかなり頑丈だが、断面に柱状傾向は認められない。

推定身長については、いずれについても正確な値は得られなかったが、ST-21号大腿骨の最大長が少なくとも415mmを越えているとみなされるので、当男性については一応、低くとも160cm程度の身長が見込まれる。

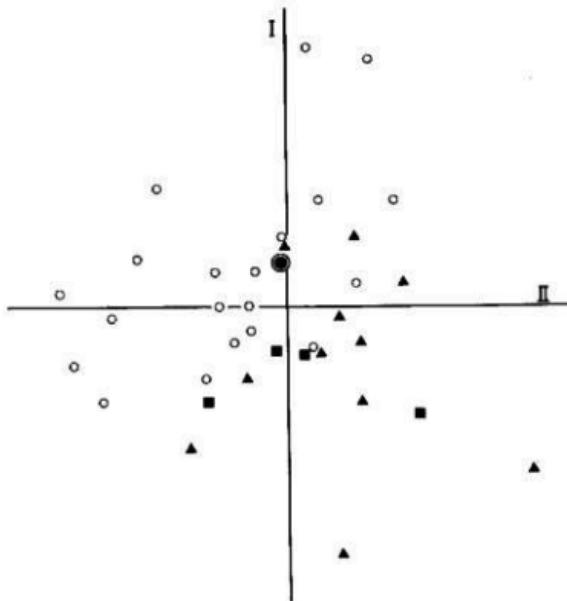


図2 主成分分析による比較(△、頬蓋8項目)

○：金剛弥生人、▲：津露・吉胡縄文人、■：西北九州弥生人

総括・考察

福岡市の西城・藤崎遺跡における1988年度の第13次発掘調査によって、12体の弥生人骨が新たに出土した。1体の男性人骨を例外として、全体的に保存状態が悪く、十分にはその特徴を知り得なかつたが、小数の遺存例について得た知見を概説すると以下のような。

- ・脳頭蓋：男女各1体（ST-10, 21）は、共にやや大きめで、女性は長頭、男性は幾分短頭に傾く傾向を見せた。頭高は不明。
- ・顔面頭蓋：男性人骨の1体（ST-21）では、その上半部にかなりの広顎傾向が見られたが、顎高値を除く各高型は比較的高く、鼻根部の扁平性も強い。また、もう1体の男性（ST-28）はかなり屈強で、低眼傾向を示した。
- ・抜歯：検討可能な3体のいずれについても抜歯痕を認められなかった。
- ・四肢：やや個体変異が大きい。大腿骨に柱状性は見られなかつたが、21号男性の胫骨に強度の扁平性が認められた。
- ・身長：21号男性についてのみ、少なくとも160cm以上との推定結果が得られた。

ここで、今回の出土例中、唯一その特徴を知り得たST-21号人骨について、頭蓋8項目（M, 1, 8, 45, 48, 51, 52, 54, 55）による主成分分析を用いてその形質上の位置づけを探ってみた（図2）。同じ福岡市内にある金隈弥生人、及び津雲、吉胡等の縄文人や西北九州弥生人の中で当人骨がどのような位置を探るかを見たものであるが、この結果を見ると、まず高額を特徴とする金隈と他の縄文タイプの資料とが明確に分離されていることが見て取れよう。そして、当人骨はこの内で、一応、近隣の金隈集団の変異域内にはあるものの、かなり縄文集団にも近い位置をとることがわかる。

藤崎遺跡からは、これまでに40体近い弥生人骨が出土していたが、いずれも断片状の保存不良骨であり、顔面部の特徴を知り得たのは当人骨が最初である。上記の諸結果から見て、一応、「渡来系」とされる北部九州弥生人の一員とみなして大過ないよう思えるが、しかしながら、21号胫骨の扁平性や28号の低眼高等も考え合わせると、金隈やさらに内陸に入った地域に分布する者らしい高額の弥生人とはやや異なる傾向を持った集団である可能性も窺えなくはない。

北部九州地方は、周知のようにわが国では例外的に多くの弥生人骨を出土している地域であるが、その内実を見ると地域的、時代的な偏りが強く、当地に分布する高額・高身長を特徴とする弥生人の出現経緯に問しても、まだ明確な回答が得られている訳ではない。また、現在知られている「渡来系」弥生人についてみても、その内容は決して一様では無く、例えば沿岸部と内陸部の間に高額性や身長で地域差が窺われるなど、その成因に関して依然、多くの解決すべき疑問点が残されているのが現状と言えよう（中橋・水井、1989）。当遺跡の立地する北部九州沿岸部は、わが国で最も早く稻作農耕が始められた地域であり、そこに居住した弥生人の形質を知ることは重要な意味を帯びた課題となろうが、残念ながらこれまでのところ、まだまと

また資料が出土しておらず、残された空白地域の一つとなっている。とりわけ当遺跡にも近い糸島半島の新町遺跡では、やや時代的に遅った弥生初頭に、明らかに縄文的特徴を残した弥生人の存在が確認されており（中橋・永井、1987）、はたしてこの沿岸部でいつ頃から高額の弥生人が現れるのか、その時代的推移を明らかにすることは、当地における渡来人問題の解決上、不可避の課題となろう。今回得られた結果はその意味で興味深く思われるが、しかし僅かに1、2体での考察には無理があり、いずれにしろ資料の追加が先決問題である。福岡市周辺は、古代朝鮮半島との関係において、地理的にも、文化的にも重要な鍵を握る地域であり、当地の資料の果たす役割はこれから益々その重要性を増して行くであろう。今後とも残された地域的、時代的空白を埋めていく根気強い作業の継続が望まれる。

文 献

- 阿部英世（1955）：「現代九州人大脳骨の人類学的研究」人類学研究 2。
- 原田忠昭（1954）：「現代西南日本人頭骨の人類学的研究」人類学研究 1。
- 鍋勝 登（1955）：「九州人下顎骨の研究」人類学研究 2。
- 金高勘次（1928）：「吉胡貝塚人頭骨の人類学的研究」人類学雑誌 43。
- 清野謙次・平井 隆（1928）：「津雲貝塚人骨の人類学的研究 第3部 上肢骨の研究」人類学雑誌 43。
- 清野謙次・平井 隆（1928）：「津雲貝塚人骨の人類学的研究 第4部 下肢骨の研究」人類学雑誌 43。
- 清野謙次・宮本博人（1925）：「津雲貝塚人骨の頭蓋骨の人類学的研究」人類学雑誌 40。
- Martin-Saller（1957）：“Lehrbuch der Anthropologie” Bd. I, Gustav Fischer Verlag, Stuttgart.
- 松下孝幸（1981）：「佐賀県大友遺跡出土の弥生時代人骨」大友遺跡、佐賀県呼子町文化財調査報告書、1。
- 内藤芳篤（1971）：「西九州出土の弥生時代人骨」人類学雑誌、79。
- Nakahashi T. & M. Nagai（1986）：Sex assessment of fragmentary skeletal remains. J. Anthropol. Soc. Nippon, 94.
- 中橋孝博（1988）：「古入骨の性判定法」日本民族・文化の生成（永井昌文教授退官記念論文集）六興出版。
- 中橋孝博・永井昌文（1987）：「福岡県志摩町新町遺跡出土の縄文・弥生移行期の人骨、新町遺跡、志摩町文化財調査報告書」7。
- 中橋孝博・永井昌文（1989）：「弥生人の形質」弥生文化の研究 1、雄山閣。
- 中橋孝博・土肥直美・永井昌文（1985）：「金櫻遺跡出土の弥生時代人骨」史跡 金櫻遺跡、福岡市埋蔵文化財調査報告書 123。
- 専頭時義（1957）：「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」人類学研究 4。
- 鈴木 尚（1963）：「日本人の骨」岩波新書 477。



①



②



③

図版1 藤崎13次、ST-21号（男性・熟年）

P L A T E S



通路周辺航空写真



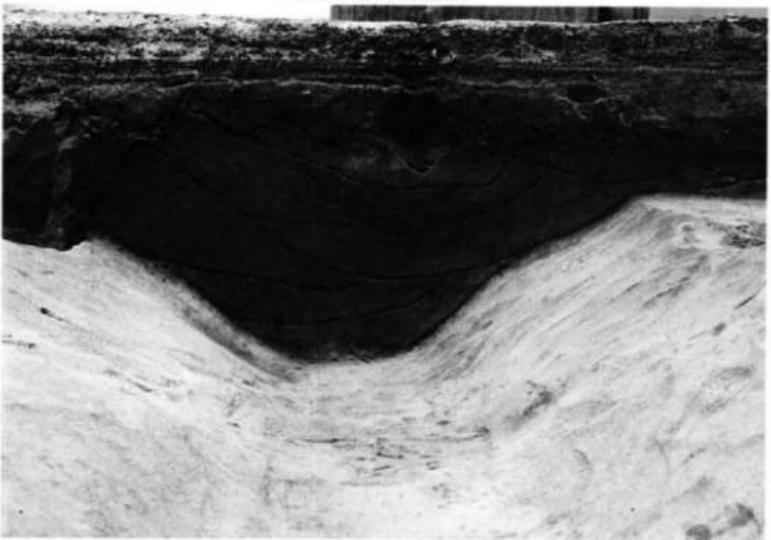
(1) 調査区全景(北から)



(2) 調査区全景(西から)



(1) 調査区北半部(東から)



(2) 中世溝土層(西から)

P_4



(1) ST-01 (南東から)



(2) ST-01 売棺



(1) 調査区全景北半部

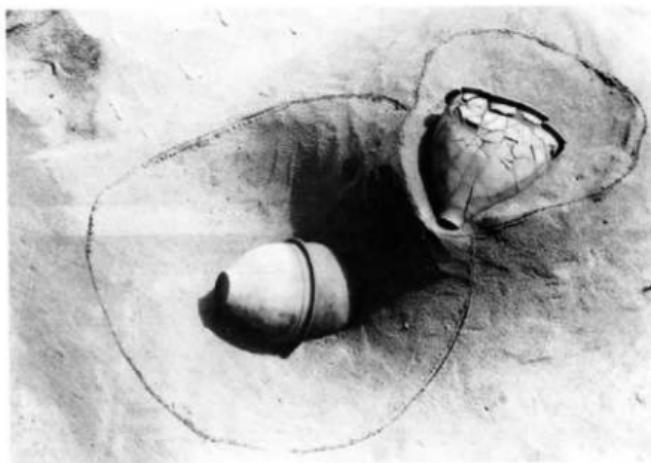


(2) 調査区全景南半部

(1)
ST—01
(南から)



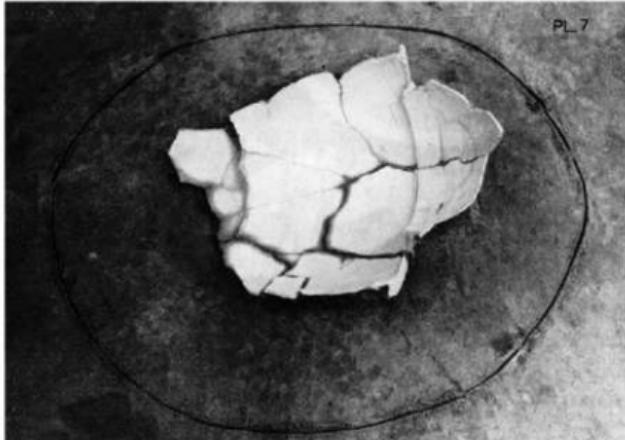
(2)
ST—02
19・15
(南から)



(3)
ST—02
(北から)



(1) ST—03 (東から)



(2) ST—04 (西から)



(3) ST—05—08全量 (東から)





(2) S.T.—05 (南から)

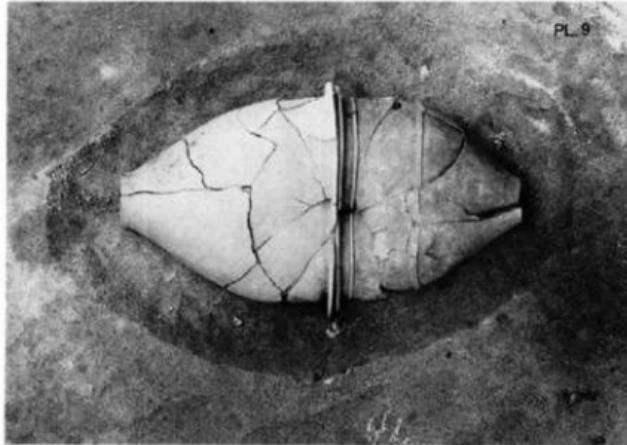


(1) S.T.—05 (西から)

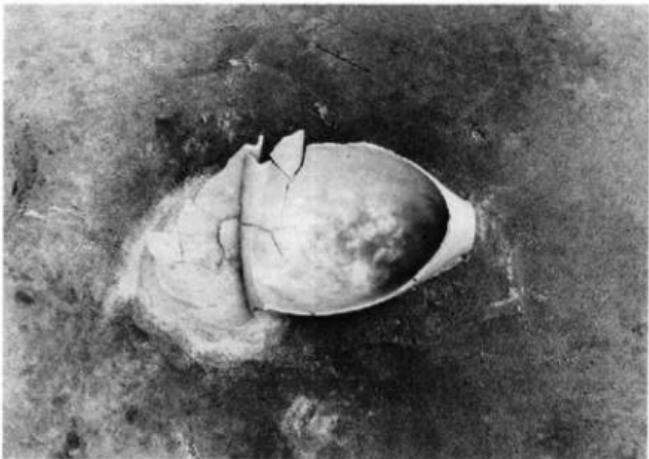
(3) S.T.—05 (南から)



(1) SST-07 (東から)

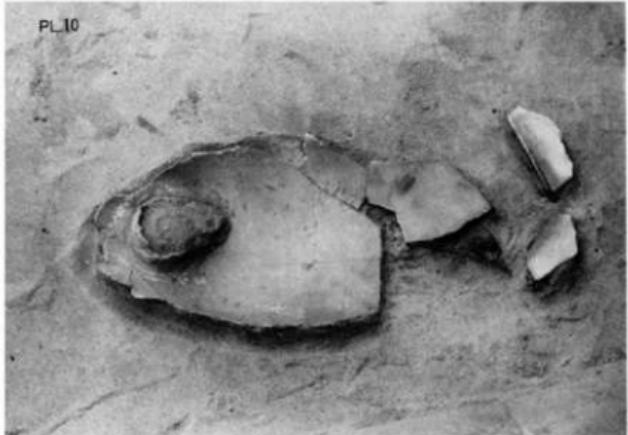


(2) SST-08 (東から)



(3) SST-09 (北から)





(1)
SST-09
(北から)

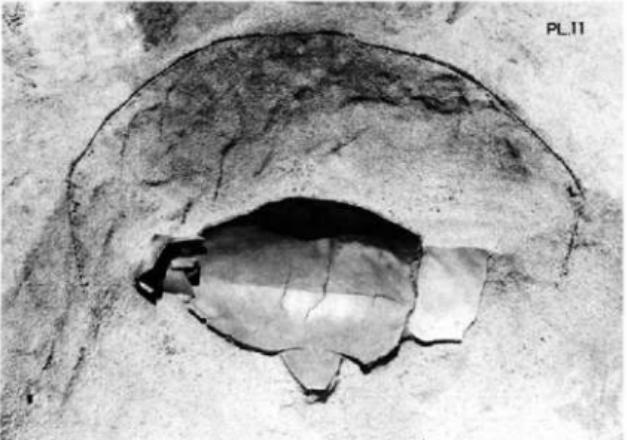


(2)
SST-10
(北から)

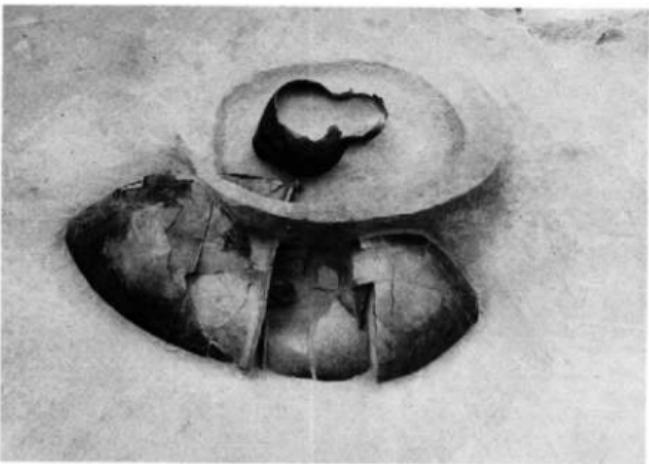


(3)
SST-11.5K-13
(北から)

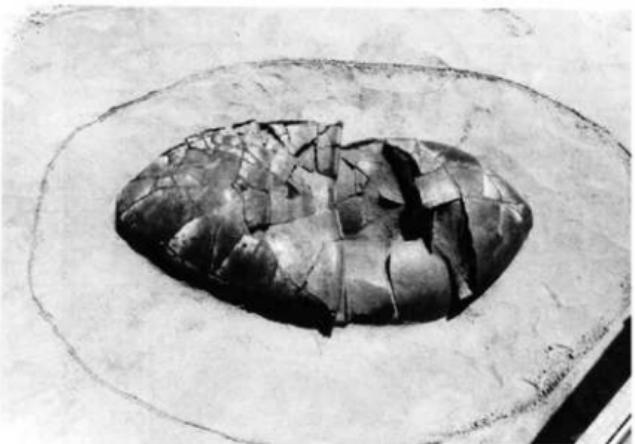
(1) ST—12(南から)

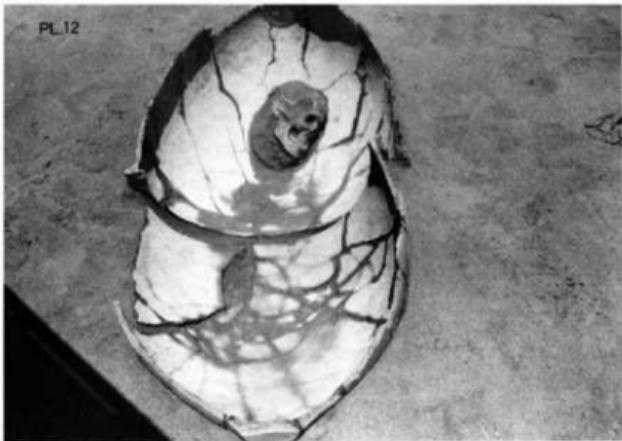


(2) ST—13·14(北から)



(3) ST—14(北から)

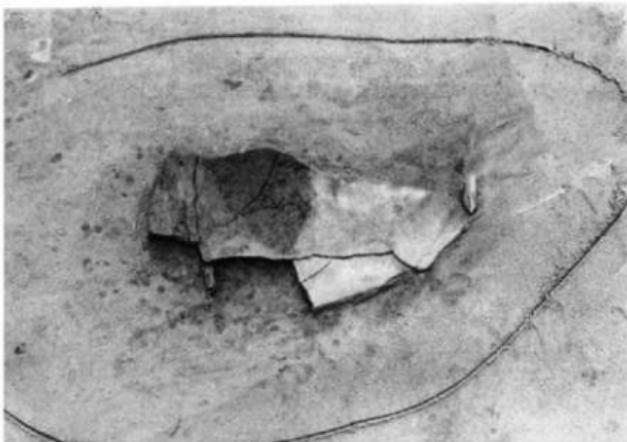




(1)
SST—14
(西から)



(2)
SST—15
(東から)

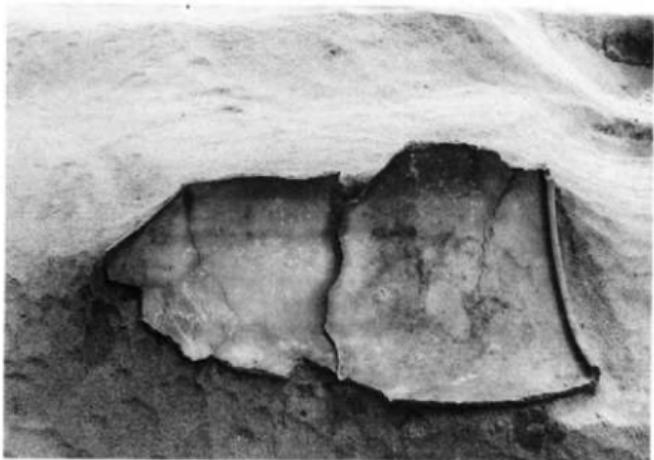


(3)
SST—16
(北から)

(1) ST—17(北西から)



(2) ST—18(南から)



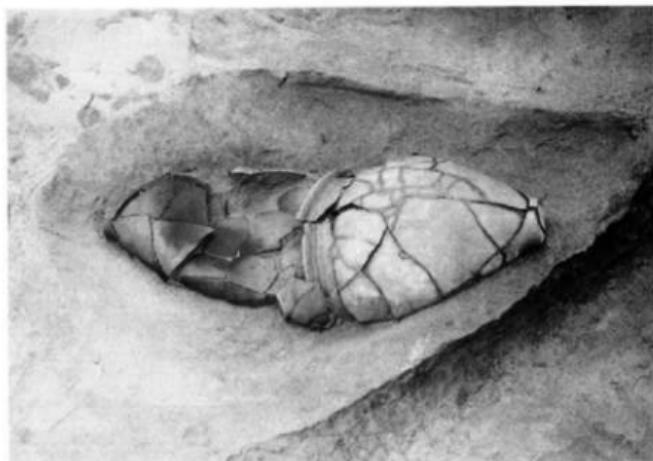
(3) ST—19(北から)



(1) ST—20
21 SQ—01 (東から)



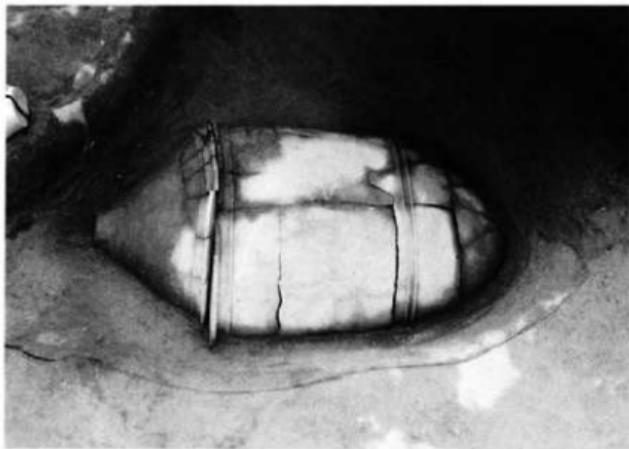
(2) ST—20 (南東から)



(3) ST—20 (北西から)



(1)
SST—21
(東から)

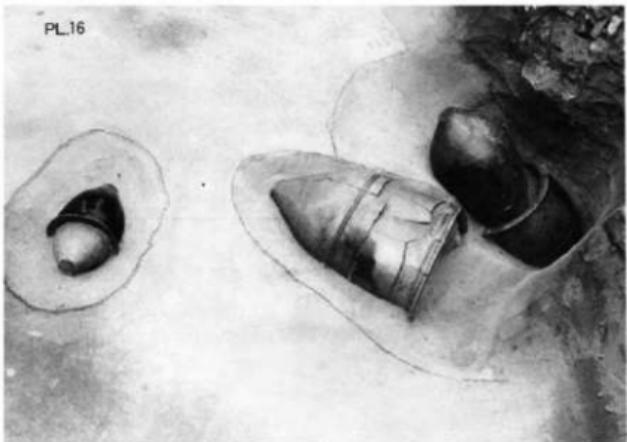


(2)
SST—21
(南東から)



(3)
SST—22
(南から)

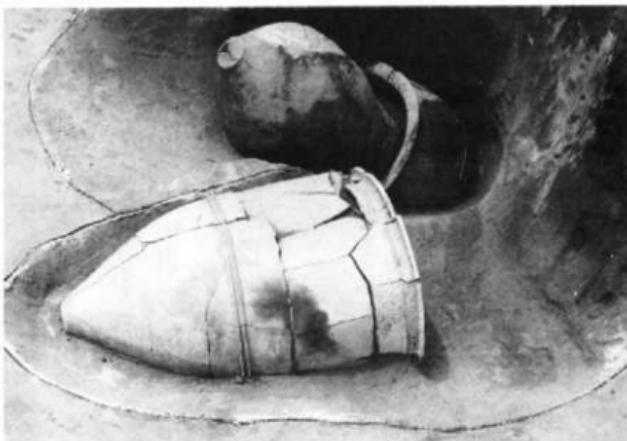




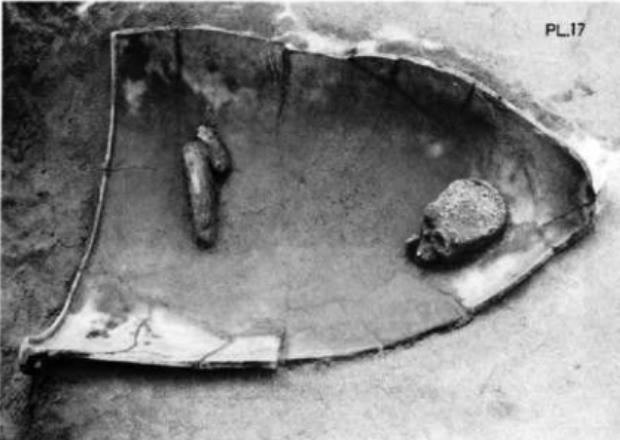
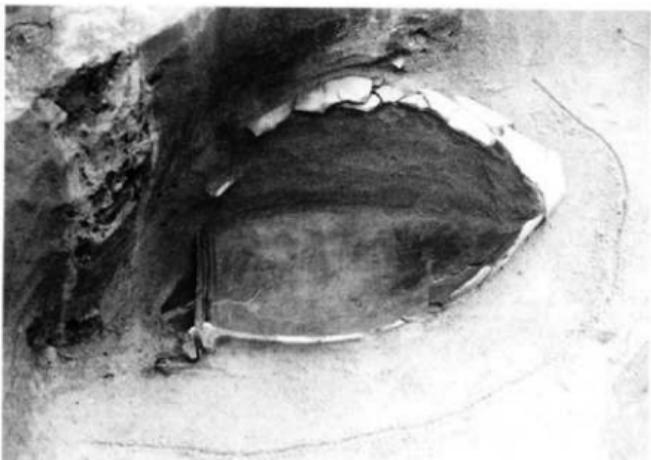
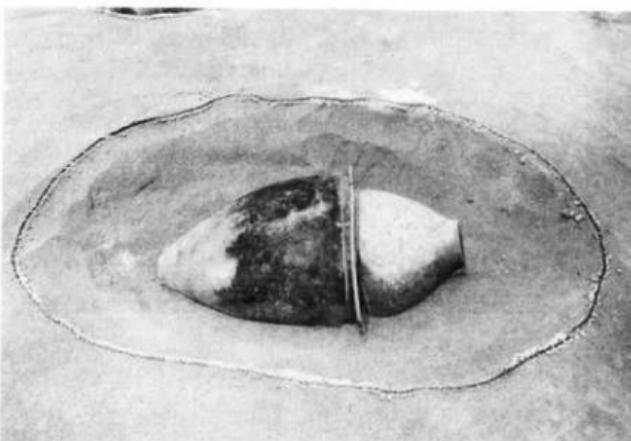
(1)
SST—
23
24
26
(東から)

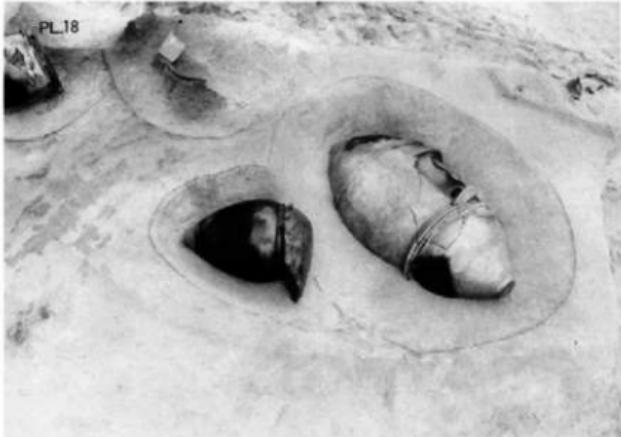


(2)
SST—
23
(東から)



(3)
SST—
24
(東から)

(1) S—24
西から(2) S—25
(北西から)(3) S—26
南から



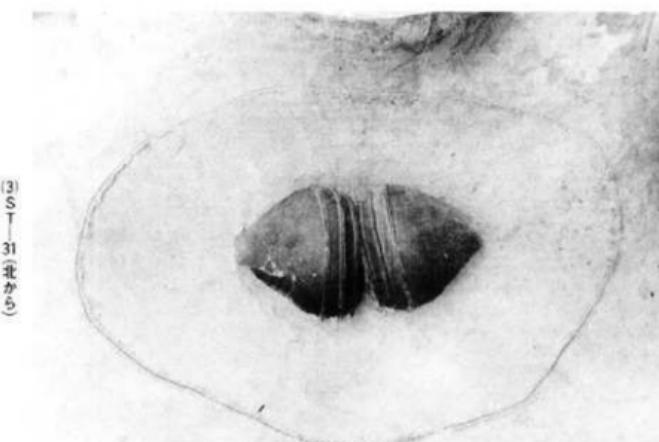
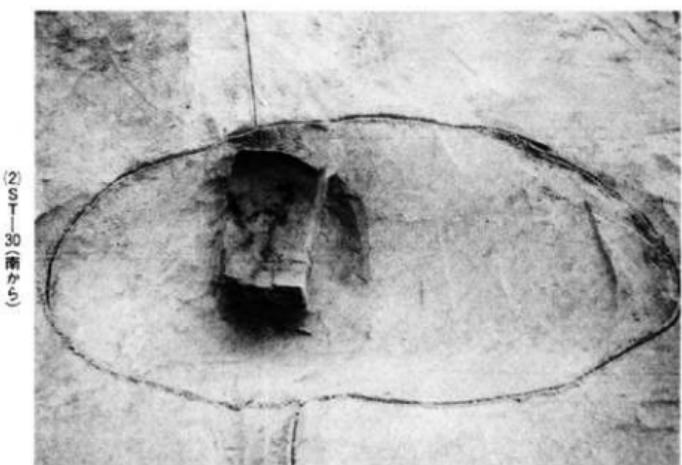
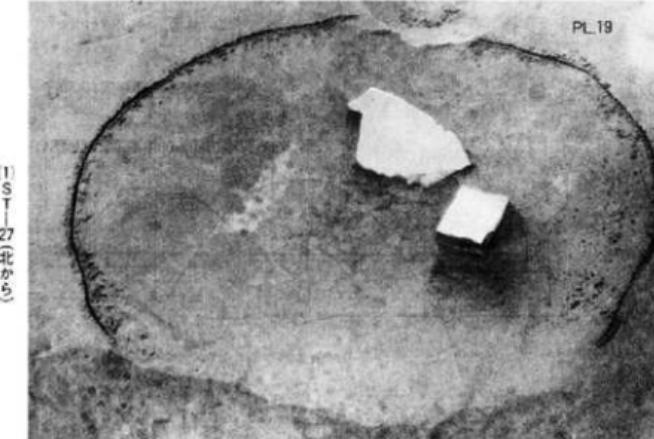
(1) ST—
11·
27·
29(雨から)



(2) ST—
28·
29(雨から)



(3) ST—
28
人骨検出状況(雨から)





1
15/0
01 (南東から)



2
方形周溝器

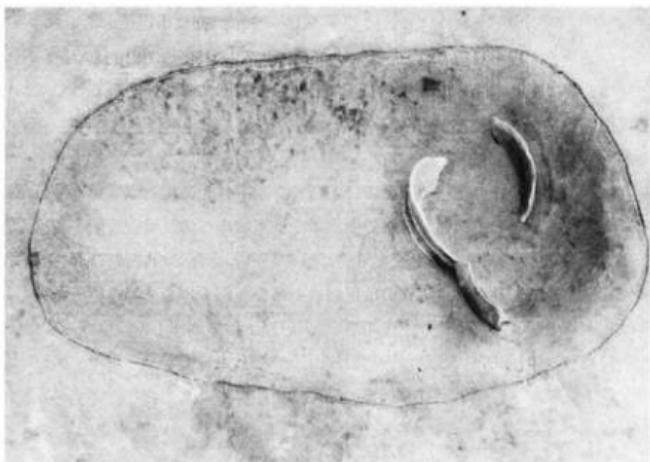


3
調査区西壁土層断面(北側)

(1) SK-01 (東から)



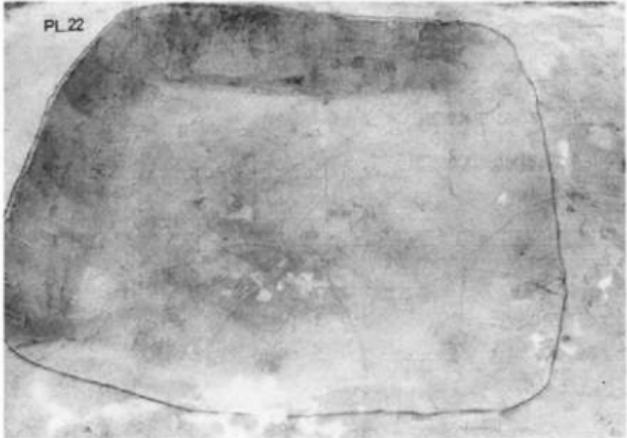
(2) SK-03 (南から)



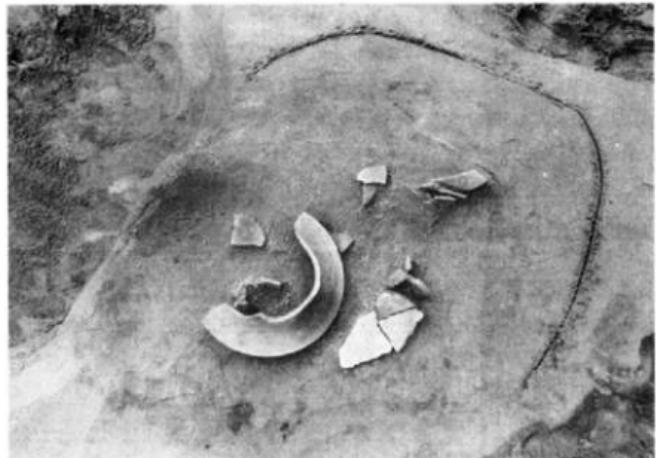
(3) SK-07 (南西から)



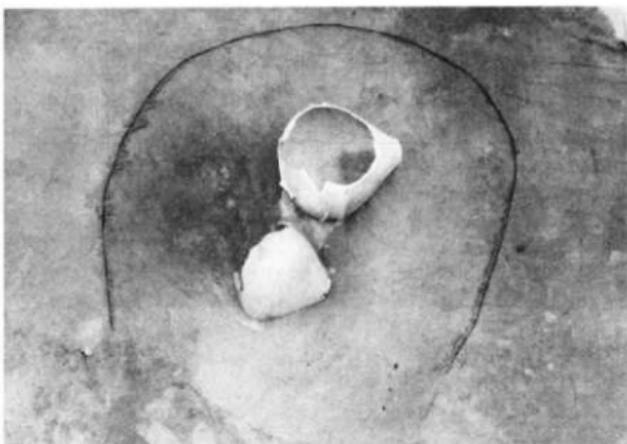
PL_22



[1]
SSK—08
(北から)

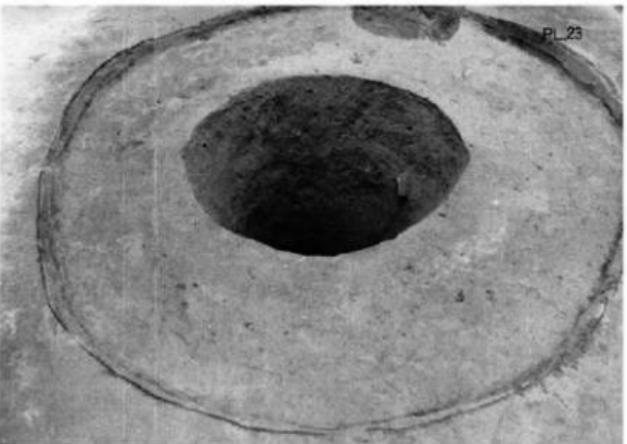


[2]
SSK—10
(北から)



[3]
SSK—12
(東から)

(1) SSE—01 (東から)

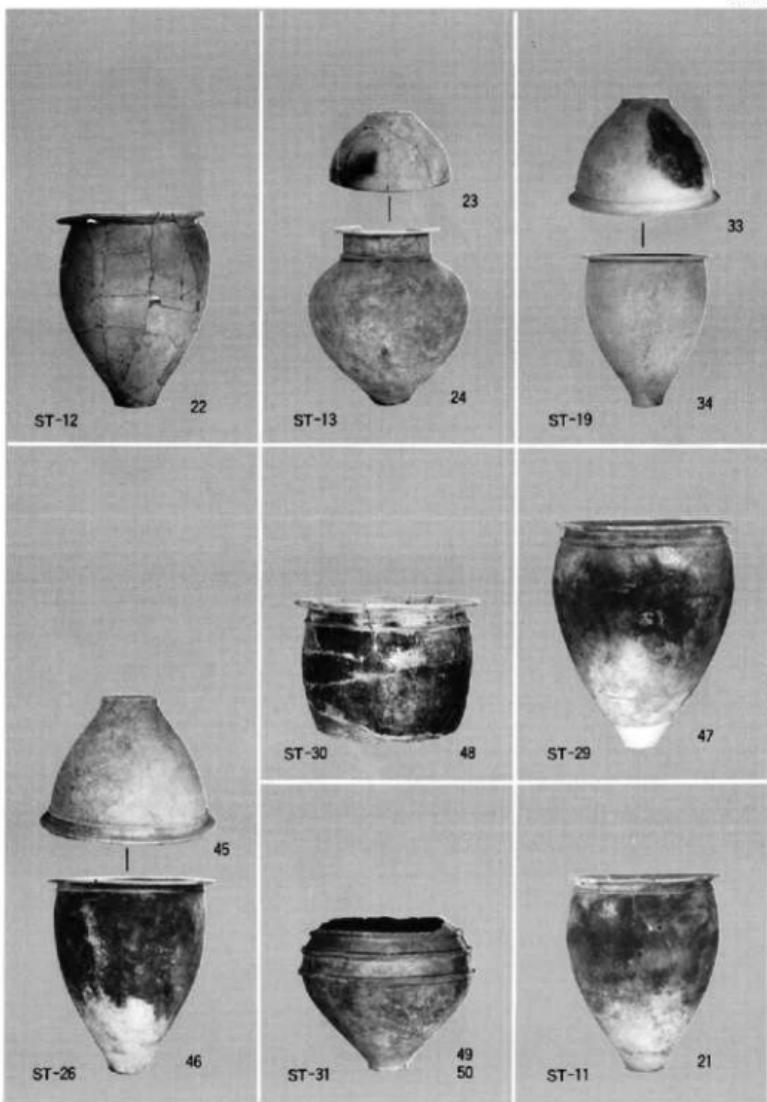


(2) SSE—01 (南東から)

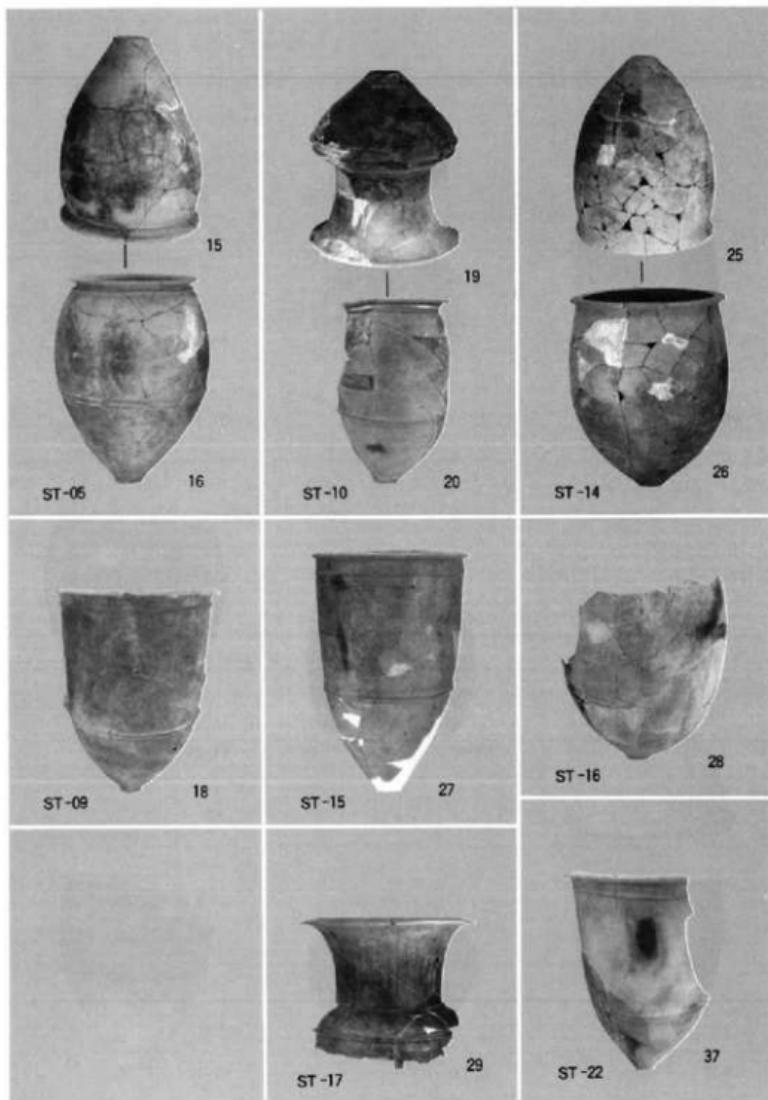
(3) SSE—02
土質断面 (西から)



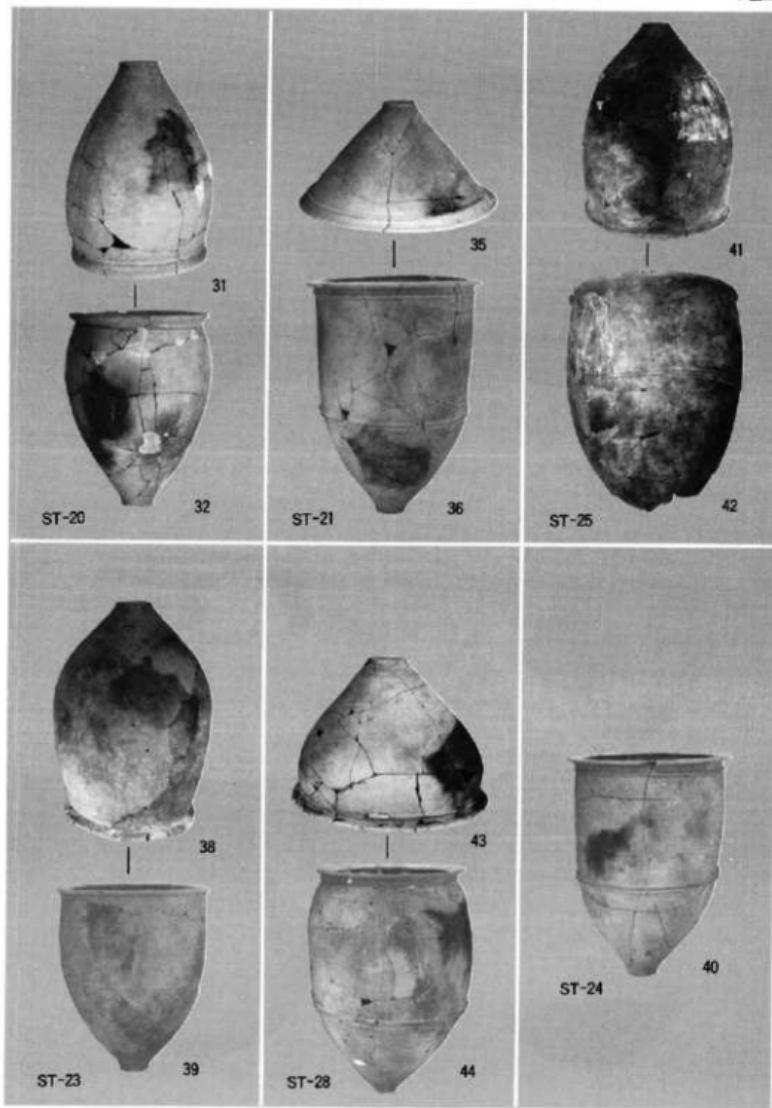
13次調查區出土陶器(縮尺不同)



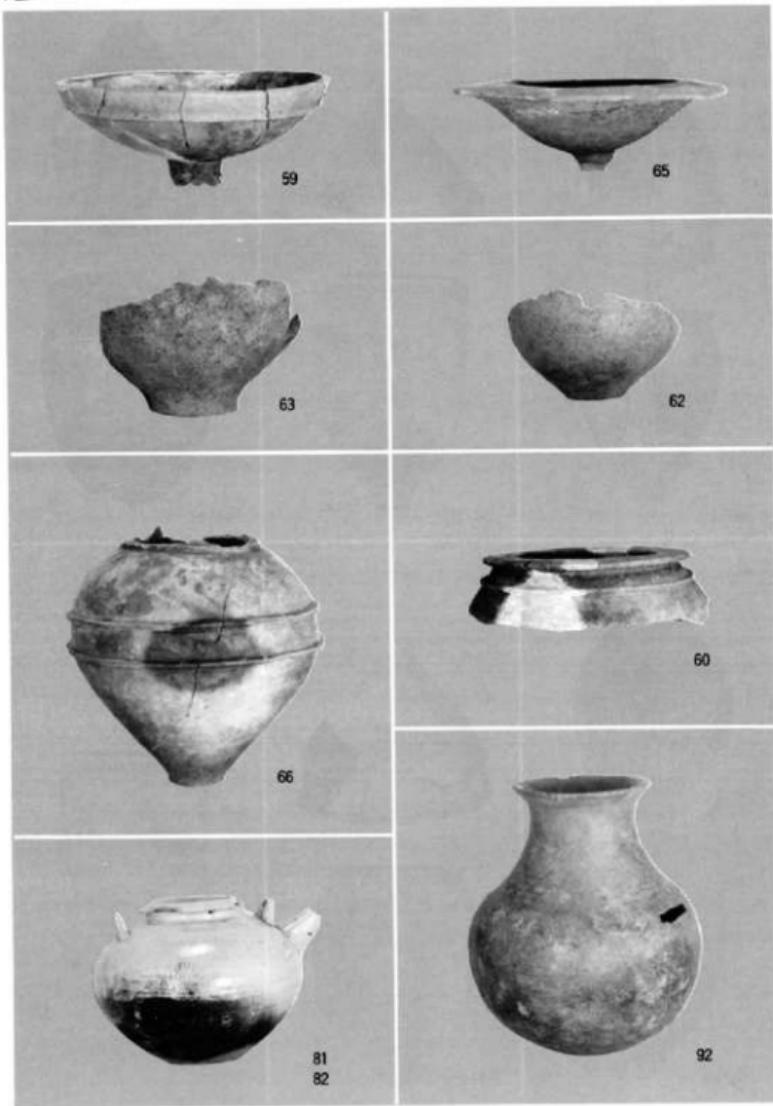
13次調査区出土陶器(縮尺不同)



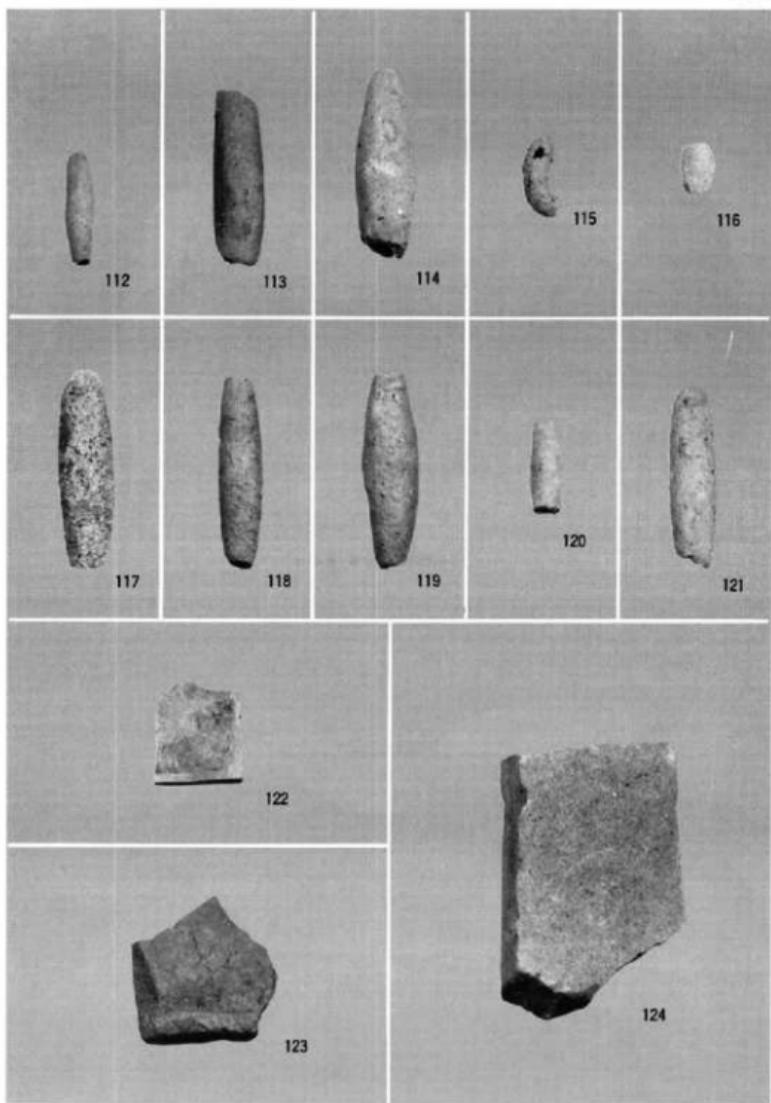
13次調査区出土甕棺(縮尺不同)



13次調查區出土陶器(縮尺不同)



13次調査区出土遺物(縮尺不同)



13次調査区出土土製品・石器(1/2)



(1)14次調査区全景(東から)



(2)14次調査区SD-01全景(西から)

